

助料ヲ受クルノ權利アリ、滿二十歳以下ノ孤兒ハ嫁娶シ又ハ他家ノ養子女ト爲リタル場合ノ外其ノ權利ヲ失ハス、又之ヲ受クルノ權利アル者ハ死者ノ相續人タル者ニ限ラス、數子アルトキハ一定ノ順序ニ由リテ之ヲ給シ、又滿二十歳以上ニ至ルモ廢疾ニシテ產ヲ營ムヲ得ス且ツ他ニ給養スル者ナキトキハ寡婦扶助料ノ三分ノ一ヲ給ス、扶助料ノ年額ハ死者ノ恩給年額ノ三分ノ一トシ、公務ノ爲メ死去シタル場合ニハ概シテ恩給年額ノ三分ノ二ヲ給ス、一時扶助料ハ死者ノ兄弟姉妹ニ給スル場合ノ外在官十五年未滿者カ在官中公務ノ爲ニ非スシテ死去シタルトキニモ一定ノ額ヲ其ノ遺族ニ給ス、扶助料ヲ受クル權利ノ移轉、時効及ヒ之ニ關スル争訟ノ規定ハ同時ニ發布セラレタル恩給法ノ規定ト概テ相同シ

## 第二部 各部行政

### 要領

行政ノ實體ニ關スル法制ノ沿革ヲ論スルニ先チ此ニ一言注意ヲ要スルモノアリ、他ナシ下ニ論スル所ハ中央政府ノ發布シタル全國ニ通スル法制ノ大體ニ止マリ、我國ニ於ケル行政法ノ一部分ニ過キサレコト是ナリ、抑モ我國ノ地形ハ面積ニ比シテ長大ノ海岸線ヲ有シ交通上頗ル有利ノ地位ニ立ツト雖モ、維新以前ニ在リテハ幕府ヲ中央ニ戴キ全國二百七十有余藩ニ分レ、各藩皆一小獨立國ノ姿ヲ有シテ彼是人民ノ交通ハ頗ル制限セラレ、其ノ法制モ最も重要ナルモノニ付キテハ多少幕府カ其ノ直轄領ニ行ヒシ所ノモノニ倣ヒシ點アリト雖モ概シテ各藩區々ノ制度ヲ立テシカ爲メ、各地ノ民情頗ル異同アリ、明治四年七月藩制ヲ廢シテ政權ハ全ク中央政府ニ歸シ、各地方長官ハ一ニ政府ノ指

揮監督ノ下ニ立チテ政務ヲ執リ、交通ノ便ハ日ニ開ケテ各地ノ民情相同化シ、加フルニ明治二十三年憲法ノ實施ニ依リ臣民ノ權利義務ニ關スル數多ノ重要ナル事項ハ法律ヲ以テ規定スルコトヲ要スルニ至リ、爲ニ主要ノ法令ハ益全國一途ニ出ツルノ有様ヲ呈セリ、然レトモ現今尙ホ重要ノ法制ニシテ各地方區々ニ亘ルモノ少ナカラス、故ニ各地方ニ於ケル行政法規ノ全體ヲ觀察スルトキハ下ニ論スル所ヨリ遙カニ早ク發達シ且ツ遙カニ整備セルモノタルコトニ注意セサルヘカラス、尙ホ一ノ注意ヲ要スルハ行政法ハ上ニ述ヘタルカ如ク近時中央政府ノ法令ヲ以テ各地方區々ノ制度ヲ改ムルコト益盛ナルノミナラス、今日ハ正ニ是レ一般法制ノ進歩最モ盛ナル時代ニシテ就中行政法ハ其ノ最モ著シキモノナルカ故ニ吾人ハ久シカラスシテ行政制度ノ面目ヲ一新スルノ期アルヲ疑ハサルナリ

保安警察

幕府時代ノ警察制度

第一章 保安警察

警察ナル名稱ハ近世唱道スル所ナリト雖モ警察テフ事務ハ古昔ヨリ存在セリ、鎌倉時代ニハ政所、侍所、問注所、アリテ侍所ヘ軍務ヲ掌リ兼テ叛亂鬪爭ヲ按治シ即チ警察ノ職務ヲ行ヘリ、足利、織田、豊臣ノ諸氏大抵之ニ因襲ス、徳川氏時代ニハ町ニ町奉行アリ郡邑ニ郡代代官アリテ各治下ノ警察事務ヲ掌ル、別ニ火付盜賊改役所アリ、奉行ニ附屬スル者與力同心アリ、代官ニ附屬スル者八州廻アリ、是レ皆警察機關ナリ、諸藩ニ於テハ町奉行、郡代、警察事務ヲ掌リ之ニ付屬スル者目附、横目、十段等アリ、其ノ名稱ハ一定ナラスト雖モ警察機關ハ能ク設備セラレタリ、享保寛永時代ノ制度ニハ頗ル觀ルヘキモノアリ、今日ノ警察ト其ノ名稱コソ異ナレ其ノ實際ニ於テハ安排配置其ノ宜シキヲ得、國事警察アリ安寧警察アリ其ノ他風儀、宗教、祭儀、出版、衣服制度、濟貧、賭博、賣淫、火災古物

商質屋、贓物、遺失物、埋藏物、旅奉公人、請人、浪人、遊藝人、發死疾病、行倒、棄兒、迷兒、牛馬車、輦輿、鳥獸、漁獵、度量衡、道路、塵芥、掃除、關所、番所、水路、橋梁、堤防、井戸、乞丐、浮浪、無宿、湯屋、料理店、寄席等ニ關スル諸控其ノ他罪人、惡漢、缺者召捕ニ關スル手續一等トシテ備ハラサルハ莫シ明治維新ノ初メ幕政落解體干戈未タ戢ラス新政未タ舉ラス民心恟々匪徒之ニ乘シ市ニ出沒シ其ノ勢暫クモ警備ヲ怠ルヘカラス是ニ於テ總督府假リニ舊町奉行石川河内守利政佐久間鑄五郎信義ヲ以テ江戸市中取締ト爲シ、尋テ之ヲ罷メ更ニ田安中納言大久保忠實後ニ一翁勝義邦後安芳等ニ江戸市中鎮撫取締ヲ命ス時ニ世上稍、鎮靖ニ歸スルカ如シト雖モ不逞ノ徒往々市郡ニ横行シ財物ヲ掠奪シ或ハ強請シ甚シキハ暗殺ヲ行フ者アリ此ノ際警察ノ内政ニ最モ必要ナルヲ以テ尾紀薩長其ノ他ノ藩々ニ命シテ兵隊ヲ以テ市中ヲ巡邏シ茲軌ヲ防制シ恩威並行ハシム又舊江戸北南奉町行ヲ改メ北南市政裁判所ヲ置キ市政ヲ管ス是時ニ當リ市中

明治維新ノ警察制度

ノ警邏査察ハ各藩兵專ラ之ヲ掌リ其ノ他ノ警務ハ江戸府及ヒ市政裁判所之ヲ管ス又別ニ鐵砲洲外國人居留地ノ安寧ヲ保ツ爲メ嚴ニ取締ヲ爲サシム、  
 明治二年五月東京市中取締規則八個條ヲ定ム同十二月東京府兵規則十六則ヲ設ク取締ニ從事スル隊長ニ安寧保護ニ關スル心得方ヲ示シタルモノナリ四年十月東京府下取締トシテ邏卒三千人ヲ置キ取締組大體法則十九個條取締規則二十六則取締組自守規則十六則及ヒ給與規則等ヲ定ム五年十月司法省警保寮中ニ巡査ヲ置ク六年一月東京府下ニ番人ヲ置キ其ノ規則ヲ定ム七年一月東京警視廳ヲ置キ府下ノ警察ヲ掌ラシメ巡査邏卒ヲ其ノ管轄トス  
 各地方ノ警察ニ關スル規則方法ハ粗ホ東京所定ノモノニ因リ而シテ警保寮ノ指揮ニ從ハシム七年十月達第三百三十二號ヲ以テ司法警察ノ事務ヲ使府縣ニ委任セシム七年一月太政官第十四號ヲ以テ檢事職制

章程司法警察規則ヲ制定シ、同九月司法警察規則附録ヲ達示セリ、司法警察規則ノ略ニ曰ク司法警察ハ行政警察豫防ノ力及ハスシテ法律ニ背ク者アルトキ其ノ犯人ヲ探索シテ之ヲ逮捕スルモノトス、司法行政二個ノ警察事務ハ互ニ相牽連スルヲ以テ一人ニテ二個ノ職務ヲ行フモノナリト雖モ其ノ本務ハ判然區域ヲ立テサルヘカラス、内務省ヨリ行政警察假規則ヲ使廳府縣ニ達ス、行政警察ノ要ハ人民ノ危害ヲ豫防シ社會ノ安寧ヲ保持シ風俗ヲ正シ健康ヲ保ツヘキコトヲ明示シタルモノナリ、此ノ時ニ當リ人心漸ク定リ世局亦舊ノ如クナラス、故ニ其ノ取締法ノ如キモ亦從テ其ノ趣ヲ異ニシ稍、丁寧ニ取扱ハサルヘカラスアルコトヲ知ルニ至レリ、是レヨリ前ニハ舊幕府多年慣用ノ弊猶未タ脱セス警察官吏ニ士族出身ノ者多キヲ以テ人民ヲ視ルコト猶舊藩ノ侍カ其ノ領分内ノ町人百姓ニ於ケルカ如キ趣アリ、殊ニ警察ハ兇ヲ押ヘ暴ヲ制スル等單ニ司法警察ニ流レタリシカ追々規則訓令等ヲ定メ行

政警察ヲ以テ人民ノ安寧ヲ保護シ幸福ヲ増進セシムヘキコトヲ服膺セシメ威壓抑制ノ弊ヲ洗除セリ、是ニ於テ大ニ警察ノ面目ヲ一新シ人民深ク警察ニ依頼スヘキコトヲ知ルニ至レリ、其ノ後警察制度及ヒ其ノ實務方法取調ノ爲メ官吏ヲ歐洲ニ派遣シ又獨逸國ヨリ警察ニ熟練ナル官吏ヲ備聘シ警官練習所ヲ設ケテ全國ノ警察官ヲ訓練スルノ方法ヲ設ケ、又廳府縣ニ巡查教習所ヲ設ケシメ諸般ノ規則ヲ改良シ人文ノ進歩及ヒ社會ノ多事ニ應シ差支ナキ丈ケノ警察制度及ヒ機關ノ發達ヲ圖レリ

警察機關ノ設備ハ隨時變更アリシモ現今ノ組織ハ左ノ如シ  
東京ハ叢轂ノ下即チ全國ノ首府ニシテ警察事務最モ繁劇ナルヲ以テ特ニ警視廳ヲ置キ警察消防監獄ニ關スル事ヲ掌ラシム、各區ニ警察署及ヒ消防署ヲ設ク、府縣ノ首部ニハ警察部アリ、警部長ハ警察部長トシテ知事ノ指揮ヲ稟ク警察事務ヲ掌ル、各郡ニハ一個又ハ二個以上ノ警

察署アリ警部之カ長トシテ巡查ヲ指揮シ管内ノ警察ヲ掌ル  
 普通警察機關ノ外ニ憲兵テフ警察機關アリ明治十四年三月太政官第  
 十一號達ヲ以テ憲兵條例ヲ定ム憲兵ハ陸軍兵科ノ一部ニ位シ巡按檢  
 察ノ事ヲ掌リ軍人ノ非違ヲ視察シ行政警察及ヒ司法警察ノ事ヲ兼テ  
 内務、海軍、司法ノ三省ニ兼隸シテ國內ノ安寧ヲ掌ル其ノ職掌軍紀ノ檢  
 察ニ係ルハ陸海軍兩省ニ隸シ行政警察ニ係ルハ内務省ニ隸シ司法警  
 察ニ係ルハ司法省ニ隸ス巡察中若シ警察ノ職權ヲ有スル者若クハ巡  
 査ヨリ幫助ヲ要求スルコトアラハ直チニ應接シ或ハ代テ其ノ事ヲ掌  
 ル又便宜憲兵ヨリ巡查ニ補助ヲ求ムルヲ得巡察中巡查ノ軍人非違ヲ  
 捕ルニ遇ヘハ憲兵ハ速ニ之ヲ收管シ又憲兵ニシテ常人ノ違式註違ヲ  
 發見スルトキハ拘引シテ之ヲ巡查ニ交付ス憲兵ハ最初先ツ東京ニ其  
 ノ一隊ヲ實施セシカ其ノ後師團所在地等樞要ノ地ニ配置シ尋テ地方  
 一般ニ擴張スルニ至レリ又憲兵條例ハ數次改正セラレタルモ其ノ編

賣淫取締

賭博犯取締

制配置等ノ變更ニシテ其ノ職務權限ノ大體ニ於テハ十四年三月ニ定  
 ムル所ト大差アルコトナシ  
 内務卿ハ全國ノ行政警察事務ヲ指揮監督ス警保局ハ内務卿カ警察事  
 務ヲ管理スルニ付テノ直隸機關タリ  
 明治九年一月第一號布告ヲ以テ私娼街賣律ヲ廢シ賣淫取締ヲ警視廳  
 并ニ地方官ニ委任ス内務省乙第九號達ヲ以テ今後賣淫ハ過料三十圓  
 以內懲戒六個月以內ノ罰例ヲ以テ適宜ノ方法ヲ設ケ其ノ取締ヲシテ  
 一層周到ナラシムヘキコトヲ以テス十七年一月第一號布告ヲ以テ賭  
 博犯處分規則ヲ設ケ其ノ處分方ヲ警視廳及ヒ府縣長官ニ委任ス規則  
 ノ略ニ曰ク賭博ヲ爲セシ者及ヒ其ノ家屋ヲ貸與シ若クハ屋外ヲ看守  
 シ其ノ他總テ幫助ヲ爲セシ者ハ一月以上四年以下ノ懲罰及ヒ五圓以  
 上二百圓以下ノ過料ニ處シ博徒ニシテ黨類ヲ招結シ若クハ賭場ヲ開  
 張シ若クハ兇器ヲ携帶シ若クハ四隣ニ横行スル者ハ一年以上十年以

下ノ懲罰及ヒ五十圓以上五百圓以下ノ過料ニ處シ其ノ招結ニ應セシ者ハ賭博ヲ爲サスト雖モ尙ホ前項ニ照依處分ス賭博犯ヲ捕拿スルハ何人ノ家宅ヲ問ハス隨時之ニ立入ルコトヲ得賭具及ヒ賭場ニ現存スル財物ハ都テ之ヲ沒入ス而シテ此ノ規則ヲ施行スル方法細則ハ警視總監府縣令便宜之ヲ定メ内務卿ノ許可ヲ經テ施行スルヲ得ルモノトセリ蓋シ十五年一月刑法治罪法施行以來刑罰ノ寬ナルト逮捕手續ノ鄭重ナルトニ因リ賭博ノ盛ナル其ノ弊甚シ殊ニ博徒ノ首魁ナル者ハ常ニ數十百人ノ乾兒ヲ養ヒ一方ニ雄峙シ自ラ賭場ヲ設クルノ限界ヲ畫シ若シ一步ヲ犯ス者アレハ一大團圍ヲ惹起スルヲ例トス實ニ其ノ跳梁跋扈殆ント其ノ極ニ達ス是レ處分規則ノ已ムヲ得サルニ出テ設定セラレタル所以ナリ警視廳及ヒ各府縣警察部ハ之カ爲メ一種ノ裁判所タリシモ數年ヲ出テスシテ賈淫賭博犯共ニ大ニ掃清セラルニ至レリ然レトモ警察處分ヲ以テ是等ノ裁判的行爲ヲ爲スハ法理上穩

當ナラサルヲ以テ是等ノ規則ハ二十二年二月憲法頒布ニ先タチ悉ク排除セラレ全ク刑法治罪法ノ定ムル所ニ復シタリ  
各警察署ハ違警罪ニ付テハ今猶ホ即決裁判ヲ行フ但シ其ノ處分ニ對シテ不服ナル者ハ一定ノ期間内ニ區裁判所ニ正式裁判ヲ求ムルコトヲ得

明治十四年頃マテハ警察署ニ於テ吟味願ト稱スル一種ノ訴ヲ受理シタルコトアリ是ハ民事ニ起因スルモノニシテ其ノ證據確然タラサルヲ以テ詐僞ノ行爲アルモノナトシテ一方ヨリ相手方ノ取調ヲ請フモノ要スルニ一種變態ナル民刑混合的訴訟ナリ十四年一月司法省甲第一號布達ヲ以テ吟味願ノ受理ヲ廢ス又刑事ニ就テハ治罪法施行前ハ勿論其ノ施行後モ當分ノ便宜法ニ依リ十七八年マテハ警察署ニ於テ豫審處分同様ノ事ヲ行ヒタリシモ法律ノ進步ニ從ヒ全ク是等ノ變則的事務ヲ一掃スルニ至レリ

明治十七年頃マテハ官司ノ權限今日ノ如ク明確ナラス法理ノ分析今日ノ如ク明瞭ナラス故ニ警察權能ノ及フ範圍畛域頗ル廣漠ニ涉リ其ノ行動臨機應變從テ其ノ權力旺盛ヲ極メ時トシテハ之カ爲メ人民却テ迷惑ヲ感スルコトモアリシカナレトモ警察ガ不休不眠ノ勤勞ヲ以テ兇惡ヲ防制シ良民ヲ保護スルノ効績ニ至テハ大ニ觀ルヘキモノアリ併シ將來法治ノ進歩ニ從ヒ警察モ亦其ノ權能ノ據ル所行動ノ範圍畛域ヲ明畫シ處理裁斷適法ナラサルヘカラサルヲ以テ從テ其ノ面目精神ヲ更新セサルヘカラス一

警察ニ關スル法律命令ハ社會事物ノ發達ニ隨ヒ人文開化ノ度ニ應シ漸次整頓改良ニ趣ケリ

安寧警察ニ關シテハ集會、政社、出版、新聞紙、賈造貨幣、嘯聚暴動議員選舉、銃砲、火藥、刀劍類、燃質物、及ヒ發火物、火技、水火災、人命急變、棄兒、迷兒、失蹤者、難破船、漂流物、遺失及ヒ埋藏物、衛生警察ニ付テハ檢疫、種痘、檢微、飲食

物、飲料水、製氷、貯雪、游泳、著色料、醫藥、家畜、屠場、墓地、火葬場、汚穢物、風俗警察ニ付テハ演藝、遊戲場、及ヒ遊藝人、貸座敷、引手茶屋、密賣淫、祭典、葬儀、賣卜、符呪、賭博、富籤、乞丐、浮浪者、

營業警察ニ付テハ古物商、質屋、度量衡、雇人請宿、旅人宿、湯屋、印判彫刻、市場、相場所、料理店、

宗教警察ニ付テハ教會、講社、說教及ヒ禮拜

道路河港及ヒ建築警察ニ付テハ道路、橋梁、渡船場、公園、車馬、船舶、堤防、河岸地、建物、諸製造所、諸貯藏所、

漁獵及ヒ田野警察ニ付テハ狩獵、捕漁、採藻、牧畜等ナリ

右等ノ事項ニ付テハ法律ヲ以テ其ノ規則ヲ制定シタルモノアリ又ハ省廳府縣ノ警察令ヲ以テ規定シタルモノアリ其ノ性質ヨリ論スレハ宜シク法律ヲ以テ制定スヘキモノナルモ未タ法律ヲ以テ制定スルニ至ラサルモノアリ是レ他ナシ都鄙其ノ情況ヲ異ニシ一律以テ其ノ取

締ヲ爲サントスレハ緩急其ノ宜シキヲ失シ人民不便ヲ感スルノ恐レ  
 アルヲ以テ各地方ニ於テ其ノ必要ノ程度ニ應シ便宜規則ヲ設定セシ  
 ムルモノヤセリ

廳府縣長官ニ於テ設定スル所ノ警察規則ニハ刑法第四百三十條ニ依  
 リ違警罪ノ刑即チ拘留科料ノ制裁ヲ附セリ是レ十四年八月刑法第四  
 百三十條ニ依リ各地方ノ便宜ニ從ヒ違警罪目ヲ定メ之ヲ發行セシト  
 キハ主務省ニ届出テシムルノ公達アリシヲ以テ刑法第四百三十條ヲ  
 以テ地方廳ニ違警罪ヲ設ルノ權ヲ規定セラレシモノトノ見解ニ出テ  
 タルモノナリ然ルニ憲法ノ施行ニ伴ヒ官司ノ職權判然タルノ時ニ當  
 リ其ノ權限ノ據ル所ハ最モ正確ナラサルヘカラス殊ニ明治十九年二  
 月官制通則第七條ニ各省大臣ノ命令ニハ罰金二十五圓以下禁錮二十  
 五日以内ノ罰則ヲ附スルコトヲ得ルノ明文アリシカ明治二十三年九  
 月敕令第二百八號ヲ以テ省令ト同時ニ地方長官及ヒ警視總監ノ發ス

通常保安警察

特種ノ物件ニ關  
スル警察

ル命令ニモ十圓以内ノ罰金若クハ拘留ノ罰則ヲ附スルコトヲ得セシ  
 メタリ同九月法律第八十四號ヲ以テ命令ノ條項ニ違反スル者ハ各其  
 ノ命令ニ規定スル所ニ從ヒ二百圓以内ノ罰金若クハ一年以下ノ禁錮  
 ニ處スト規定セリ廳府縣長官ノ發シタル處分若クハ命令ノ成規ニ違  
 ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯ス者アルトキハ主務大臣ヨリ其ノ處分若  
 クハ命令ノ取消又ハ停止ヲ命セラル、モノトス、又地方警察ニ關スル  
 事件ニ付テハ訴願法ニ依リ上級行政廳ニ訴願ヲ提起スルコトヲ得  
 警察規則中法律ヲ以テ制定スヘキ性質ノモノニシテ地方警察令ニ依  
 テ規定セラレタルモノ多シ今之ヲ舉ルノ煩ヲ省キ警察ニ關スル法令  
 ノ沿革ヲ左ニ記述スヘシ

第一節 通常保安警察

第一款 特種ノ物件ニ關スル警察(石油取締火藥取締銃砲取締)



石油取締

石油

石油取締規則ハ明治十四年八月布告第四十號ヲ以テ制定セララル、此ノ規則ニ依レハ石油ハ引火力ノ強弱ニ由リ第一種、第二種ニ分チ、點燈用ニ供スルモノハ第一種ノ石油ニ限リ、凡テ警察官ノ検査ヲ經タルモノニ非サレハ販賣スルヲ得ス、石油營業者ハ坑業者、精製者、問屋及ヒ小賣ノ四類トシ、地方廳ノ許可ヲ受ケシメ、小賣商ハ第一種ノ石油ニ限リ販賣スルヲ得、第二種ノ石油ノ販賣ハ問屋ニ限リ、之ヲ販賣スルトキハ購買者ヨリ其ノ數量用途ヲ詳記シタル書面ヲ受取置キテ一定ノ期間之ヲ保存スヘキモノトス、但シ幼者其ノ他不能力者ニ交付スルヲ得ス、營業者ノ石油貯藏場、精製場ハ地方廳ノ許可ヲ得タル者ニ限リ、問屋小賣商消費者カ買受ケテ貯藏スル石油ノ數量モ規定ノ範圍内ニ限ル、石油ヲ運搬スルニハ其ノ石油タルコト及ヒ其ノ種類ヲ表示スヘク且ツ必要ノ時間ヲ超エテ之ヲ戶外ニ置クヲ許サス、此ノ規則ハ明治十六年二

火藥取締

月布告第六號ヲ以テ改定セラレタリト雖モ其ノ改良ノ主ナル點ハ石油ヲ第一種、第二種ニ分ツノ標準ヲ改メタルニ在リ

火藥

火藥ニ關シテハ明治四年十月火藥運搬規則ヲ定メ、之ヲ運搬スル時ハ届出ヲ要シ、危險ノ恐少ナキ通路ヲ選ミ、危險ヲ豫防スル手段ヲ悉サシム、又其ノ賣買製造及ヒ所持ニ關シテハ翌年一月發布ノ銃砲取締規則中ニ軍用銃砲ト同一ノ規定ヲ適用セリ、其ノ後此ノ規則ハ多少追加セラレ明治十七年十二月布告第三十一號ヲ以テ火藥取締規則ヲ制定ス、是レ即チ現行法ニシテ舊法ヲ改メタル要點ハ、火藥類ノ賣買運搬ハ平時ト雖モ許可ヲ得サレハ日出前日没後ニ爲スヲ得ス、戰時事變ノ際ニハ全ク之ヲ停止スルコトヲ得、營業者カ火藥類ヲ賣渡ス一回ノ數量ハ小銃用坑業用等各用途ニ由リ限定ス、火藥類ノ貯藏ハ數量ノ多寡ニ應ジ一定ノ距離ヲ有スル安全ノ場所、構造ヲ要シ、地方廳ノ許可ヲ得テ建

築シタル火薬庫ニ貯藏スヘキモノトス

銃砲

銃砲取締

銃砲ノ取締ニ關スル規定ハ明治五年一月布告第二十八號ヲ以テ制定セラレ其ノ後多少修正セラレテ現ニ効力ヲ有ス此ノ取締規則ニ依レハ銃砲ノ買買ヲ營業トスル者ハ地方廳ノ許可ヲ要シ各地方廳管區内ノ營業者ノ欺ハ法ニ依リテ定マル免許商人銃砲ヲ賣買セントスルトキハ其ノ相手ノ氏名物品ノ性質員數等ヲ記載シタル報告書ヲ作り軍用銃ニ關スルトキハ相手方ノ有スル軍用銃買受ノ免許狀ヲ受取りテ報告書ニ添ヘ毎月之ヲ管轄廳ニ届出サルヘカラス銃砲ノ製造ハ一般ニ之ヲ許サス只新奇ノ構造ヲ發明シ試験ノ爲メ製作セントスルトキハ官ノ許可ヲ受クルコトヲ得軍用ノ銃器ハ一般ニ所持スルヲ得ス從來ヨリ所持スル者ハ官ニ届出テ番號官印ヲ受ケ之ヲ他人ニ讓渡サントスルトキハ免許商人ノ賣渡ノ場合ト同一ノ手續ニ依ルヘク其ノ他

ノ銃器ヲ所持スル者ハ其ノ性質員數等ヲ届出サルヘカラス此ノ外銃器ノ使用ニ關スル制限ハ主トシテ狩獵規則ノ定ムル所ナルカ故ニ此ニ之ヲ論セス

第二款 特種ノ行爲ニ關スル警察(集會社出版)

集會

集會取締

特種ノ行爲ニ關スル警察

集會取締ニ關スル警察官ノ心得及ヒ其ノ取締方ハ明治十二年十二月内務省達ヲ以テ制定セラレタリ然レトモ是レハ單ニ當務者ニ對シ其ノ心得ヲ訓示スルニ過キス集會ニ關スル警察規定ノ設ケラレシハ明治十三年四月布告第十二號ノ集會條例ヲ以テ初メトス明治二十年十二月勅令第六十七號保安條例中祕密ノ集會及ヒ結社ヲ禁シ又屋外ノ集會ハ警察官必要ト認ムレハ之ヲ禁スルヲ得トノ規定ヲ設ケ其ノ後集會法ハ二十三年七月法律第五十三號及ヒ二十六年四月法律第十四

築シタル火藥庫ニ貯藏スヘキモノトス

銃砲

銃砲ノ取締ニ關スル規定ハ明治五年一月布告第二十八號ヲ以テ制定セラレ其ノ後多少修正セラレテ現ニ効力ヲ有ス此ノ取締規則ニ依レハ銃砲ノ買賣ヲ營業トスル者ハ地方廳ノ許可ヲ要シ、各地方廳管區内ノ營業者ノ數ハ法ニ依リテ定マル、免許商人銃砲ヲ賣買セントスルトキハ其ノ相手ノ氏名物品ノ性質員數等ヲ記載シタル報告書ヲ作り、軍用銃ニ關スルトキハ相手方ノ有スル軍用銃買受ノ免許狀ヲ受取リテ報告書ニ添ヘ毎月之ヲ管轄廳ニ届出サルヘカラス、銃砲ノ製造ハ一般ニ之ヲ許サス只新奇ノ構造ヲ發明シ試驗ノ爲メ製作セントスルトキハ官ノ許可ヲ受クルコトヲ得、軍用ノ銃砲ハ一般ニ所持スルヲ得ス、從來ヨリ所持スル者ハ官ニ届出テ番號官印ヲ受ケ、之ヲ他人ニ讓渡サントスルトキハ免許商人ノ賣渡ノ場合ト同一ノ手續ニ依ルヘク、其ノ他

銃砲取締

ノ銃器ヲ所持スル者ハ其ノ性質員數等ヲ届出サルヘカラス、此ノ外銃器ノ使用ニ關スル制限ハ主トシテ狩獵規則ノ定ムル所ナルカ故ニ此ニ之ヲ論セス

特種ノ行爲ニ關スル警察

第二款 特種ノ行爲ニ關スル警察(集會、結社、出版)

集會

集會取締ニ關スル警察官ノ心得及ヒ其ノ取締方ハ明治十二年十二月内務省達ヲ以テ制定セラレタリ然レトモ是レハ單ニ當務者ニ對シ其ノ心得ヲ訓示スルニ過キス集會ニ關スル警察規定ノ設ケラレシハ明治十三年四月布告第十二號ノ集會條例ヲ以テ初メトス明治二十年十二月勅令第六十七號保安條例中秘密ノ集會及ヒ結社ヲ禁シ又屋外ノ集會ハ警察官必要ト認ムレハ之ヲ禁スルヲ得トノ規定ヲ設ケ、其ノ後集會法ハ二十三年七月法律第五十三號及ヒ二十六年四月法律第十四

集會取締

號ヲ以テ再度ノ改定ヲ經タリ、今左ニ政治集會ニ特有ノ規定ト其ノ他ノ規定トヲ分チ沿革ヲ陳ヘン

甲 政治ニ關セサル集會

明治十三年四月ノ條例ニ依レハ主務ノ卿ハ集會ニシテ治安ニ害アリト認ムルモノハ之ヲ禁止シ、又警察官カ治安ノ保持ニ必要ト認ムルトキハ凡テ多衆ノ集會ニ臨監シ治安ヲ害スルト認ムルトキハ之ヲ解散スルヲ得トセリ、同二十三年七月ノ集會法ニ於ケル改正ノ要點ハ集會者ハ成規ニ依ルノ外武器ヲ携帶シ又ハ兇器ヲ携帶シテ集會スルヲ得ス、又集會ニ於テ罪人ヲ曲庇シ、犯罪ヲ教唆シ、會場ヲ故意ニ騷擾スルヲ得ス、犯ス者ハ之カ退去ヲ命スルヲ得、警察官ノ臨監ヲ拒ミ又ハ會衆騷擾シテ警察官ノ制止ニ應セサルカ如キ場合ニハ集會ヲ解散スルヲ得、又祭葬、學生ノ運動等慣例ノ許ス集會ノ外帝國議會ノ會期中ハ屋外集會ヲ爲スヲ得ス、其ノ他ノ場合ニ在リテモ此等ノ集會ヲ爲サントスル

政治ニ關セサル集會取締

トキハ發起人ヨリ豫メ會同ノ場處時日等ヲ警察署ニ届出テ認可ヲ受ケサルヘカラス、二十六年ノ法律ニ至リテハ主要ノ點ハ殆ント舊法ト異ナル所ナシ

乙 政治集會

明治十三年四月ノ集會條例ニ依レハ政治集會ヲ催スハ屋内ニ限り、且ツ豫メ警察官ノ認可ヲ得サルヘカラス、臨監ノ警察官ニ對シ認可證書ヲ開示スルコトヲ拒ミ、届出以外ノ事項ヲ講論シ、其ノ他公安ヲ害スルト認ムルトキハ解散セシムルヲ得、政治集會ニハ現役及ヒ召集中ノ豫備後備ノ軍人、學生、教員等ハ會同スルヲ得ストシ、二十三年七月改正ノ要點ハ政治集會ニハ必ス發起人ヲ定メシメ、發起人ハ日本臣民ノ能力者ニシテ刑ヲ受ケサル成年ノ男子タルヲ要シ、外國人ハ政治集會ニ於テ講論者タルヲ得ストシタルニ在リ、二十六年四月ノ法律ニ於ケル改正ノ主ナルモノハ政治集會ハ屋外ニ催スコトヲ得レトモ此ノ場合ニ

政治集會取締

ハ堅固ノ屏障ヲ設ケ自由出入ヲ制限シタル場所ニ限リ又政治集會ヲ  
届出ツルニハ集會ノ場所、時日、發起人及ヒ講論者ノ氏名ヲ記載スヘキ  
コトヲ定メタリ

結社

結社ニ關スル規定ハ從來主トシテ集會條例ノ中ニ含マレ、從テ集會法  
ト同一ノ沿革ヲ有ス、明治十三年四月ノ法律ニ於テ結社ハ治安ニ妨害  
アリト認ムルトキハ主務ノ卿之ヲ禁止スルコトヲ得トシ、其ノ後ノ法  
律モ同一ノ規定ヲ有シ又明治二十年十二月ノ保安條例中ニ秘密ノ結  
社ヲ禁シタルノ外一般ノ結社ニ關スル警察規定ナク、餘ハ皆政社ニ關  
スルモノトス、十三年四月ノ法律ニ於テハ政社ヲ設ケントスルトキハ  
豫メ其ノ社名、社則、會場及ヒ社員名簿ヲ添ヘテ警察署ニ届出テ認可ヲ  
受クルヲ要ス、政治集會ニ會同スルヲ得サル身分ヲ有スル者ハ亦政社  
ニ加入スルヲ得ス、政社ハ支社ヲ設ケ又ハ他ノ政社ト連結スルヲ得ス

結社

トシタリ、二十三年七月ノ法律ニ於ケル改正ノ主ナルモノハ、政社ヲ設  
クルニハ只届出ヲ以テ足レリトシ、政社ニハ役員ヲ置クヘク、又外國人  
ヲ加入セシムルヲ得ス、政社ハ標章旗幟ヲ用フルヲ得ス、政社ノ社員ニ  
シテ公ノ議會ノ議員タル資格ヲ有スル者ニ對シテハ其ノ議會ニ於ケ  
ル發言及ヒ表決ニ付キ議會外ニ責ヲ負ハシムルノ社則ヲ設クルヲ得  
ストシ、二十六年ノ法律ニ至リテハ政社ハ支社ヲ設クルコトヲ得トシ  
タルノ外著シキ變更ナシ

出版

甲 新聞紙外ノ出版物

維新以前ニ在リテモ圖書ノ出版ハ官ノ許可ヲ要シタリシカ、維新ノ初  
更ニ令シテ圖書ヲ出版セントスル者ハ其ノ稿本ヲ差出シテ許可ヲ乞  
ヒ、上板ノ上製本一部ヲ納ムヘキコトヲ定メ、明治五年一月出版條例ヲ  
制定シ出版ヲ出願スルニハ只願書ニ書中ノ大意ヲ記述セシメ、妄リニ

出版、版權  
新聞紙外ノ出版  
物

國法ヲ誹議シ惡事ヲ誣フルモノ、如キハ出版ヲ許サス、出版物ニハ必ス著者及ヒ出版者ノ氏名住所ヲ記載スヘキコトヲ命ス此ノ條例ニ於テハ版權保護ノコトヲモ併セテ規定シタリ明治八年九月布告第三百三十五號ヲ以テ出版法ノ主義ヲ一變シ圖書ヲ出版セントスル者ハ只豫メ主務省ニ届出シメ、主務省ハ必要ト認ムルトキハ草稿ヲ徴シテ検査シ、出版物ニシテ治安ニ害アリト認ムルトキハ其ノ出版又ハ販賣ヲ禁シ或ハ刻版ヲ毀タシムルコト、シ罰則八條ヲ定メタリ明治二十年十二月出版條例ヲ改定シ別ニ版權條例ヲ定ム、此ノ法律ニ依リ草稿ヲ徴シテ検査スルノ規定ハ廢止セラル二十六年四月法律第十五號ヲ以テ出版法ヲ制定ス是レ即チ現行法ニシテ、犯罪ヲ曲庇スル文書、傍聽ヲ禁シタル訴訟ノ事項又ハ公會ノ議事等ハ出版スルヲ得ス、軍事外交ノ機密ニ關シ公ニセサル官ノ文書ノ如キハ當該官廳ノ許可ヲ得サレハ出版スルヲ得ス、安寧秩序ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルト認ムル出版物

ハ内務大臣ニ於テ其ノ發賣頒布ヲ禁シ其ノ刻版印本ヲ差押フルコトヲ得、又圖書ノ發行者ハ著作者及ヒ其ノ相續人若クハ圖書販賣營業者ニ限ル、圖書ノ印刷者ハ其ノ氏名及ヒ印刷ノ年月日ヲ圖書ニ記載セサルヘカラス等ニシテ二十年ノ改正ト大差ナシ

### 乙 新聞紙

德川氏時代ニハ今日ノ如キ體裁ヲ備ヘタル新聞紙ノ發行トテハアラサリシモ大老老中等ノ更迭其ノ他政治若クハ社會ノ出來事ノ重要ナルモノアレハ一枚摺出版ヲ以テ迅速ニ發行セラレ且ツ市街ニ讀賣スルコトアリタリ明治二年二月新聞紙出版ヲ許スニ付キ開成學校ニ於テ都テ取締可致旨ヲ達セラル而シテ開成學校ハ單ニ東京ニ於テ出版スル所ノモノヲ監督シ各府縣ニ於テ出版ノ新聞紙ハ其ノ府縣裁判所ニ於テ檢閱スルコトニ定メラレタリ(二年三月開成學校伺指令)  
明治四年七月大史ヨリ新聞紙雜誌發行ニ關スル條例書ヲ設ケタル旨

新聞紙取締法ノ沿革

ヲ京都府ニ通知セリ其ノ略ニ曰ク新聞紙ハ人ノ智識ヲ啓開スルヲ以テ目的トスヘシ人ノ智識ヲ啓開スルハ頑固偏隘ノ心ヲ破リ文明開化ノ域ニ導カントスルナリ故ニ内外ヲ問ハス所有ノ事實ヲ記シ博ヲ約ニシ遠ヲ近フシ以テ觀者ノ聞見ヲ廣メ國家爲治ノ萬一ニ裨益アランコトヲ要ス海外諸邦ト交親ヲ厚フスルヲ以テ諸邦ニ對シ不敬ナル字面或ハ彼ヲ知ラスシテ自ラ誇大ニスルノ文字ヲ禁ス政法ヲ記シテ謗議ニ涉リ猥ニ教法ヲ主張宣說シ無根ノ言ニ託シテ人罪ヲ誣ヒ怪妖不經ノコトヲ說キ異說人心ヲ惑ハスコト四方ヨリ寄セ來ル新聞紙原稿中匿名ノ書ヲ掲載スルコトヲ禁シ人心ヲ警發シ勸戒トナルヘキコト或ハ新發明ノ器具等世ノ益ニナルコトハ務テ記載スヘシ雜談諧謔事ニ害ナクシテ人ノ一笑ヲ發スル事等記載スルモ亦妨ナシ但淫蕩ヲ誘クノ語アルヘカラス奇事異聞出所アリト雖モ疑ニ屬スル者ハ之ヲ註明スヘシ前號ニ載スルコト其ノ實ニ非ルヲ知ラハ後號必ス之ヲ辨明

スヘシ文ハ極メテ平易ナルヲ主トス奇字僻文ヲ用フヘカラス布行ハ遠境ニ及フヲ主トス近利ヲ貪ルヘカラス新聞紙ヲ選スルハ一部ノ正史ヲ作ルト見做スヘシ然ルトキハ率易妄誕ノ患少シ亦一部ノ稗官小說ヲ作ルト見做スヘシ然ラサレハ方正板實ニ過キテ里巷ノ耳目ニ適シ難シ新聞紙ヲ選スルハ務メテ讀者ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス然レトモ無ヲ有トシ虛ヲ實トシ人心ヲ煽動シ衆目ヲ掩惑スル等ノ如キ造說ヲ禁ス發兌ノ際八部宛上納セシムル事トセリ此ノ規定ハ殆ント一種ノ訓諭的條例ニシテ今日ヨリ之ヲ觀レハ頗ル幼稚ノ有様ナレトモ亦以テ其ノ程度如何ヲ知ルニ足レリ

明治五年三月新聞紙遞送規則ヲ定ム其ノ略ニ曰ク新聞紙ハ目方ニ拘ハラス一個ニ付差出ス地ヨリ五十里以内ハ半錢百里以内ハ一錢二百里以内ハ一錢半二百里以外ハ二錢ノ貨錢ヲ拂フヘシ同九月新聞紙遞送規則ヲ改正シ驛遞頭ノ遞送免許ヲ得タル新聞紙ノ遞送料ヲ目方ト

距離ノ遠近ニ從ヒ改正セラレタリシカ六年三月布告第九十七號郵便規則ニ依テ消滅セリ六年六月驛遞頭ノ遞送免許有之諸新聞紙上ニ載スヘキ爲メ其ノ社ニ報知スル原稿ハ無税ニテ遞送配達スルコトニ關シ規則ヲ定メラレタリ

明治六年十月新聞紙條目ヲ定メ新聞紙ヲ出版セントセハ先ツ官准ヲ要シ一タヒ許可ノ印ヲ得レハ其ノ後每號ヲ出シテ検査ヲ受クルニ及ハス唯一定ノ部數ヲ發行ノ都度官ニ納ムルヲ要ス新聞紙ハ其ノ固有ノ題號ヲ有シ每號ニ其ノ號數發行ノ時日地名編輯者印刷者ノ氏名ヲ記載スヘク治安ヲ害シ風俗ヲ紊ルノ記事ヲ掲クルヲ禁ス記事ニ付誤謬アルトキハ之ヲ正シ又凡テノ記事ニ付編輯者其ノ責ニ任スヘキコトヲ定ム明治八年六月布告第百一十一號ヲ以テ新聞紙條目ヲ廢シ更ニ新聞紙條例ヲ定ム其ノ規定ノ重モナルモノハ發行願書ニ記載シタル事項ニ詐謬アル者ハ其ノ發行ヲ禁止若クハ停止シ仍ホ一定ノ罰金ヲ

科ス持主社主若クハ編輯人タル者ハ内國人ニ限ル新聞紙ノ記事ニ付關係アル者ヨリ正誤ヲ求メラレ若クハ辨白ヲ受ケタルトキハ次號ニ其ノ旨ヲ刷出スヘシ裁判所ノ斷獄下調ニ來リ未タ公判ニ付セサルモノ及ヒ裁判官審判ノ議事ヲ載スルコトヲ禁シタル等ナリ

明治十六年四月布告第十二號ヲ以テ新聞紙條例ヲ改定ス此ノ改正ニ於テ其ノ最も重要ナルモノハ保證金制度ニシテ地方ノ階級ニ由リ日刊新聞ハ三百五十圓以上千圓以下一月一回以下發行スルモノハ各前項ノ半額專ハラ學術技藝統計及ヒ法令又ハ物價報告ニ係ルモノハ保證金ヲ納ムルニ及ハス新聞紙ニ記載シタル事項治安ヲ妨害シ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムルトキハ内務卿ハ其ノ發行ヲ禁止若クハ停止シ其ノ新聞紙ヲ差押ヘ又ハ發賣ヲ禁シ其ノ情重キ者ハ印刷器ヲ差押フルコトヲ得陸海軍卿ハ特ニ命令ヲ下シテ軍隊軍艦ノ進退及ヒ一般ノ軍事ヲ又外務卿ハ外交上ノ事件ニ付特ニ命令ヲ下シテ之カ記載ヲ禁



スルヲ得、式ニ依リ宣布セサル公文及ヒ上書建白請願書ハ當該官司ノ許可ヲ得ルニ非サレハ、又官省院ノ議事及府縣會ノ傍聽ヲ禁シタル議事ハ詳略ニ掲ハラス之ヲ記載スルヲ禁ス犯ス者ニハ一定ノ罰ヲ科ス政體ヲ變壞シ朝憲ヲ紊亂セントスルノ論說ヲ爲ス者、成法ヲ誹毀シテ國民法ニ違フノ義ヲ亂ル者、顯ハニ刑律ニ觸レタル罪犯ヲ曲庇スルノ論說ヲ爲ス者、猥褻ノ文辭圖書及ヒ誹謗ヲ寓シタル戲書ヲ掲載シタル者ニハ一定ノ罰ヲ科ス、條例違犯者ニハ刑法ノ自首減輕、再犯加重、數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

明治二十年十二月勅令第七十五號ヲ以テ條例ヲ改正ス其ノ大體ハ舊法ト大ナル差異ナシ此ノ改正ニ於テ其ノ著シキモノハ出願准許ヲ受ケ發行スヘキヲ改メテ發行ノ日ヨリ二週日前ニ内務省ニ届出レハ足ルノ自由ヲ與ヘタルコト、公訴ノ期滿免除ヲ六個月ト定メタルコト等是ナリ

明治三十年三月法律第九號ヲ以テ新聞紙條例ヲ改メテ新聞紙法トナス是レ即チ現行法ナリ其ノ條項中改正ノ重要ナルモノハ内務大臣ニ於テ治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムル新聞紙ヲ禁止又ハ停止スルノ權ヲ解キ皇室ノ尊嚴ヲ冒瀆シ又ハ朝憲ヲ紊亂セントスル論說ヲ載セ、軍事及ヒ外交ニ關シ主務大臣ノ掲載ヲ禁シタル事項ニ關スル記事ヲ掲ケテ刑ニ觸レ告發セラレタルトキハ其ノ新聞紙ノ發賣頒布ヲ停止シテ假リニ之ヲ差押ヘ其ノ告發ニ係ルモノト同一ノ事項ニ關スル記載ノ停止ヲ爲スコトヲ得ルニ止マリ裁判所ハ犯罪ノ情狀ニ山リ此等ノ罪ヲ犯シタル新聞紙ノ發行禁止ヲ宣告スルコトヲ得トシタリ發行停止ニ係ル條項ノ存廢ニ付テハ多年帝國議會ト政府トノ間ニ於テ意見ヲ異ニシ論争スル所アリシカ茲ニ至テ終ニ全廢スルニ至レリ

特種ノ事業ニ關スル警察

第三款 特種ノ事業ニ關スル警察（古物商及ヒ質屋）

營業取締、電氣事業取締

古物商ノ取締

古物商

古物買買ニ關シテ從來各地方警察ニヨリ適宜ノ取締ヲ爲セシカ、明治十六年布告第五十號ヲ以テ古物商取締規則ヲ制定ス、此ノ規則ニ依レハ衣類、什器、書畫等一旦使用ニ供シタル物品ノ賣買ヲ營業トスル者ハ地方廳ノ免許ヲ要シ、讓渡人ニシテ身元詳カナラサル場合ニハ他ニ身元詳カナル保證人アルカ、警察官ノ認許アルニ非サレハ之ヨリ古物ヲ讓受クルヲ得ス、盜罪、詐欺取財、贓物故買等ノ罪ヲ犯シテ刑ニ處セラレタル者ヨリ古物ヲ買フトキハ警察官ノ許可ヲ要ス、劔刀類ハ身元詳カナラサル者及ヒ盜罪、賭博罪ヲ犯シタル者ニ讓渡シ又ハ露店路傍ニテ讓渡スコトヲ得ス、古物ヲ讓受クルニハ自己ノ住宅又ハ許可ヲ受ケタ

ル營業所及ヒ讓渡人ノ住宅ニ於テセサルヘカラス、古物商ノ讓受ケタル物品ニシテ贓品ナルトキハ警察官ハ之ヲ徵收シテ被害者ニ交付ス、警察官ヨリ贓物ノ品觸アルトキハ其ノ後一定ノ期間内ハ之ニ類似ノ物品ヲ所持シ又ハ讓受クル古物商ハ直チニ之ヲ警察署ニ届出ツヘシ、古物商物品ヲ賣買交換シタルトキハ警察官ニ於テ其ノ物品及ヒ讓渡人ヲ調査スルニ差支ナキ様帳簿ニ記入シ、且ツ讓受人ヲ詳カニスルヲ得タルトキハ之ヲモ記載シ、其ノ帳簿ハ一定年間保存スルコトヲ要ス、警察官ハ隨時古物商ノ店舗ニ立入りテ其ノ物品帳簿ヲ検査シ、時宜ニ依リテハ物品ヲ差押ヘ帳簿ヲ差出サシムルヲ得、古物商一年內ニ再度此ノ規則ニ違反シタルトキハ其ノ營業ヲ禁止又ハ停止スルヲ得ヘク、又此ノ規則中一定ノ條項ヲ犯シタル古物商ハ特別ノ監視ニ付セラレ、其ノ移轉、旅行、營業時間、帳簿ノ記載方法等ニ付テ一定ノ制限ヲ受ク、古物商ハ其ノ營業ニ付キテハ家族又ハ雇人ノ所爲ニ付キテモ其ノ責ニ

任スルモノトス

此ノ取締規則ハ明治二十八年三月法律第十三號ヲ以テ改正セラレタリ、其ノ改正ノ要點ヲ舉クレハ古物商カ營業免許ヲ受クルニハ其ノ營業物品ノ種類ヲ定ムルコトヲ要シ、古物商ハ何人ニ物品ヲ讓渡シ又ハ讓受クルモ自由ナレトモ讓受品ニシテ不正品ノ疑アルトキハ直チニ届出ツルコトヲ要ス、傳染病毒ニ汚染シタル物品ハ消毒シタル後ニ非サレハ之ヲ讓受クルヲ得ス、古物ノ市場ヲ開キ又ハ糶賣ヲ爲サントセハ其ノ時日場所ヲ届出テ、露店ヲ開キ又ハ行商ヲ爲スニハ鑑札ヲ受ケテ之ヲ携帯セサルヘカラス、古物商法令違反ノ所爲アリテ行政廳必要ト認ムルトキハ何時ニテモ其ノ營業ヲ禁止又ハ停止スルコトヲ得、其ノ效力ハ全國ニ及フモノトシ、特別監視ノ規定ヲ廢止セリ

質屋

質屋取締ニ關スル規則ハ明治十七年布告第九號ヲ以テ制定セラレ其

質屋取締

ノ規定ハ同十六年ニ發布セラレタル古物商取締規則ト大同小異ナリ、明治二十八年三月法律第十四號ヲ以テ之ヲ改定セシカ是レ亦同年發布ノ古物商取締法ト大體相類ス、今其ノ異ナル點ヲ舉クレハ質屋ハ店舗ノ外ニ於テ營業スルヲ得ス、店舗ニハ見易キ場所ニ於テ利子歩合、流質期限、質物ノ災難ニ罹リタルトキノ處辨方、及ヒ質物出入時間ヲ揭示スルコトヲ要ス、又利子ノ最高歩合ヲ二十五錢以下ハ一個月一錢、一圓以下ハ一個月百分ノ四五圓以下ハ一個月百分ノ三、十圓以下ハ一ヶ月百分ノ二半ト定メ之ヲ超過スル契約ハ超過部分ニ限リテ無効トス、古物商並ニ質屋條例制定以前ニ在リテハ贓物典賣容易ニシテ其ノ搜查頗ル困難ナリシカ本條例發布以後ハ當業者多少不便ヲ感セシモ贓物典賣ノ道容易ナラス、又贓物發見上頗ル便宜ヲ得取締上大ニ效果ヲ奏セリ

電氣事業

電氣事業取締

電氣事業ハ近時ニ至リ漸ク發達セシモノニシテ、之カ取締ハ地方廳ニ一任セシカ明治二十四年八月ヨリ地方廳ハ其ノ取締方法ヲ定メテ主務大臣ノ認可ヲ得タル後ニ非サレハ之ヲ許可スルコトヲ得ストシ、明治二十九年五月一般ノ取締規則ヲ定ム、此ノ規則ニ依レハ電氣事業ヲ爲サントスル者ハ營業用タルト自家用タルトヲ問ハス主務大臣ノ許可ヲ要シ、主務大臣ハ隨時吏員ヲ派シ又ハ地方長官ニ命シテ工事ノ實況ヲ監査セシメ、危害ノ虞アリト認ムルトキハ其ノ改修又ハ撤去ヲ命スルコトヲ得、起業者ハ學識經驗アル主任技師ヲ置キテ工事施行前ニ主務大臣ニ之ヲ届出ツルヲ要シ、主務大臣ニ於テ之ヲ不適任ト認ムルトキハ其ノ變更ヲ命スルコトヲ得、工事ノ一部又ハ全部ヲ終リテ之ヲ使用セントスルトキハ先ツ監督廳ニ届出テ、其ノ検査ヲ受ケサルヘカラス、企業者ニシテ正當ノ事由ナク許可ヲ得タル期限内ニ工事ヲ終ラス又ハ使用セザルトキハ認可ヲ取消スコトヲ得、尙ホ此ノ規則ニ依

特種ノ人ニ關スル警察

リ電燈、電氣鐵道其ノ他ノ電力事業ニ關シ各其ノ工事及ヒ運用方法ヲ細密ニ規定シ、地方長官ハ必要ト認ムルトキハ企業者ヲシテ線路ノ各要所ニ技術者又ハ工夫ヲ置キテ常ニ監視スヘキコトヲ命スルヲ得、送電中ノ架空電線ノ近傍ニ出火アルトキハ一定ノ方法ヲ以テ危險豫防ノ手續ヲ爲スヘキコトヲ規定セリ

第四款 特種ノ人ニ關スル警察

特種ノ人ニ關スル警察規則ハ明治十四年十二月布告第十七號ヲ以テ十五年一月ヨリ施行ノ刑法附則中ノ假出獄者ニ課スル特別監視ノ規定、明治二十年十二月勅令第六十七號保安條例中ノ公安ニ危險ヲ與フル者ノ居住移轉ノ自由ヲ制限スル規定及ヒ二十五年一月勅令第十一號豫戒令ヲ以テ主ナルモノトス

特別監視ハ刑法カ附加刑ノ一トシテ重罪輕罪ノ主刑處分ヲ了リタル

者ニ課スル監視トハ性質ヲ異ニスル警察處分ニシテ、重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者獄則ヲ謹守シ改悛ノ情アルトキ行政處分ヲ以テ假出獄ヲ許サレタル者ニ對シ本刑期限中科スル所ニシテ、特別監視ニ付セラレタル者ハ每週一度所轄警察署ニ到リテ其ノ謹慎ヲ表シ、凡テ集會群集ノ場所ニ會同スルヲ得ス、住所ヲ轉セントスルトキハ警察署ノ許可ヲ要シ、又往復一日程ヲ過クル地ニ旅行スルヲ得ス、監視中警察官ハ其ノ家宅ニ臨檢スルコトヲ得ルモノトス

保安條例ニ依レハ皇居ヲ距ル三里以内ノ地ニ居住スル者ニシテ内亂ヲ陰謀シ又ハ教唆シ若クハ治安ヲ妨害スルノ虞アリト認ムルトキハ地方長官ハ主務大臣ノ認可ヲ經テ退去ヲ命シ、三年以内同一ノ地域内ニ出入居住スルヲ禁スルコトヲ得

豫戒令ニ依レハ地方長官ニ於テ、一定ノ生業ヲ有セス平素粗暴ノ言行ヲ事トスル者又ハ他人ノ開設スル集會ヲ妨害シ又ハ他人ノ業務行爲

非常保安警察

ニ干涉シテ其ノ自由ヲ妨害スル者ト認ムルトキハ、之ニ對シテ一定ノ期限内ニ適法ノ生業ヲ求ムルヲ命シ、集會妨害ノ行爲又ハ他人ノ業務行爲ニ干涉シテ其ノ自由ヲ妨害セントスルノ行爲ヲ爲スヘカラサルコトヲ命ス、而シテ此ノ命令ニ反スレハ一定ノ刑ニ處シ、且ツ此ノ命令ヲ受ケタル者ハ居住ヲ轉スルトキハ豫メ警察署ニ届出ツヘク、之ヲ止宿同居セシメタル者モ亦一定ノ時間内ニ届出ヲ爲スコトヲ要ス

第二節 非常保安警察

第一款 非常保安

明治二十年十二月勅令第六十七號保安條例ニ依レハ、人心ノ動亂ニ由リ又ハ内亂ノ豫備若クハ陰謀ヲ爲ス者アルニ由リ治安ヲ妨害スルノ虞アル地方ニ對シ、内閣ハ臨時必要ト認ムル場合ニハ其ノ地方ニ限リ期限ヲ定メテ、警察官ノ許可ヲ得スシテ集會シ、新聞紙其ノ他ノ印刷物

ヲ發行シ及ヒ銃器、火藥、劍刀等ノ携帶、運搬、販賣ヲ爲スコトヲ禁シ及ヒ旅人ノ出入ヲ檢査シ旅券ノ制ヲ設クルコトヲ得トシタリ、此ノ條例ハ明治三十一年六月法律第十六號ヲ以テ廢止セラレタリ

戒嚴

第二款 戒嚴

凡ソ非常ニ際シテ非常ノ處分ヲ爲スハ必要避クヘカラサルノ事ナリ非常ノ時ニ當リ臨機ノ措置其ノ宜シキヲ制セントセハ平時ニ其ノ規定ナカルヘカラス而シテ一ハ軍事ノ活動ニ障礙ナカラシメ一ハ地方人民ニ其ノ由ル所ヲ得セシメ迭ニ矛盾超越ノ患ナカラシムル爲メ必要ナルヲ以テ明治十五年八月第三十六號布告ヲ以テ戒嚴令ヲ制定セラレ現ニ效力ヲ有ス其ノ規定ニ依レハ戒嚴ハ戰時事變ニ際シ必要ノ場合ニハ一定ノ軍司令官モ戒嚴ヲ宣告スルノ權アリトセシカ其ノ後憲法ノ發布セラル、ニ及ヒテ戒嚴ノ宣告ハ天皇ノ大權トセラレタリ

戒嚴ハ之ヲ要スル地域ヲ畫定シテ宣告スヘキモノニシテ戒嚴地境内ニ於テ軍司令官ハ必要ト認ムルトキハ集會出版ヲ停止シ交通ヲ斷チ信書ヲ開封シ銃器火藥等ノ危險物ヲ押收シ又戰狀ニ由リ已ムヲ得サルトキハ人民ノ財産ヲ毀壞スルコトヲ得戒嚴ハ分チテ臨戰地境及ヒ合圍地境ニ於ケルモノ、二トシ臨戰地境ニ於テハ地方行政事務及ヒ司法事務ニシテ軍事ニ關係アルモノニ限り、其ノ地ノ司令官ノ權限ニ委テ、合圍地境ニ於テハ地方行政及ヒ司法事務ハ凡テ司令官ニ委シ、地方官地方裁判官及ヒ檢察官ハ補助機關トシテ其ノ指揮ヲ受ケ、軍事ニ係ル民事及ヒ一定ノ刑事訴訟ハ軍衙ニ於テ裁判シ、若シ合圍地境内ニ於テ裁判所ナク又ハ其ノ管轄裁判所ト通路斷絶セシトキハ一切ノ訴訟ヲ軍衙ノ裁判ニ屬セシムルモノトス

## 第二章 民籍

## 第一節 國籍

我國ハ四邊海ヲ繞ラシテ外國ト境域ヲ接セス國土豊饒氣候温和ニシテ衣食ノ資ヲ外國ニ仰キ若クハ郷土ヲ去リテ居テ外國ニ求ムルノ必要ナク加フルニ徳川氏ノ如キ政治上ヨリ外國交通ヲ極度ニ制限シタルカ故ニ從來國籍ニ關スル問題ヲ生シタルコトナク從テ之ニ關シ特ニ規定ヲ設ケタルコトナシ、只子ハ父ノ國籍ニ從ヒ妻ハ夫ノ國籍ニ從フコトハ古來ノ原則ナルカ如シ外人ニ歸化ヲ許シタルノ例ハ上古ヨリ屢見ル所ナレトモ是亦特ニ規定ノ存スルヲ見ス、幕末開港以來外國交通漸次頻繁ニ赴キシモ尙ホ治外法權及ヒ居留地制度ノ存セシ爲メ國籍問題ノ起ルコト甚タ少ナカリキ、只タ明治二十三年ノ舊民法ニ於テ人事編中國民分限ノ章ニ國籍ニ關スル規定ヲ設ケシモ其ノ實施ヲ

見ルニ至ラスシテ廢止ニ歸シタリ、然ルニ新條約ニ依リ治外法權ヲ撤去シテ内地雜居ヲ許シ且ツ國際交通日ニ頻繁ニ赴クヲ以テ國籍問題ノ起ルコト益多カラントス、是ヲ以テ明治三十二年三月法律第六十六號ヲ以テ國籍法ヲ制定シタリ、

本法ニ依レハ國籍ヲ取得スル原因ハ第一血縁ニシテ父カ日本人ナルトキニ及ヒ父カ知レス若クハ國籍ヲ有セサル場合ニ母カ日本人ナルトキハ其ノ子モ日本人トス、第二ハ出生地ニシテ日本ニ生レタル子ハ父母共ニ知レサルカ又ハ國籍ヲ有セサルトキハ其ノ子ハ日本人トス、第三ニ自己ノ行爲ニ因リテ國籍ヲ取得スルハ日本人ノ妻、入夫又ハ養子トナル場合ナリ、三十一年七月法律第二十一號ニ依リ外國人ヲ養子又ハ入夫ト爲スニハ内務大臣ノ許可ヲ要シ、内務大臣ハ其ノ外國人カ一年以上引續キ日本ニ住所又ハ居所ヲ有シ且ツ品行端正ナルニ非サレハ許可スルヲ得ス、第四ニ他人ノ行爲ニ因リ國籍ヲ取得スルハ日本

人タル父又ハ母ニ依リテ認知セラレタルトキ及ヒ夫若クハ本國法ニ依リ未成年ナル子ノ父カ日本ノ國籍ヲ取得シタルトキナリ第五ハ歸化即チ政府ノ許可ニ依リ國籍ヲ取得スル場合ニシテ内務大臣ハ歸化ヲ請フ者カ日本國內ニ於ケル住居年齢品行及ヒ生計ニ關シ一定ノ條件ヲ具ヘ且ツ歸化ヲ許スモ爲ニ國籍ノ衝突ヲ生セス又妻ハ夫ト共ニ歸化スル場合ニ限り外國人ノ歸化ヲ許可スルコトヲ得但シ日本ニ住居スル外國人ニシテ父又ハ母カ日本人タリシ者又ハ現ニ日本人タル者夫カ日本人タル者妻カ日本人タリシ者日本ニ生レタル者引續キ十年以上日本ニ住居スル者及ヒ日本ニ特別ノ功勞アル者ハ輕易ノ條件ヲ以テ歸化ヲ許スコトヲ得ヘシ國籍ヲ取得シタル者ニシテ公法上ノ能力ヲ制限セラル、者アリ即チ歸化人歸化人ノ子ニシテ日本ノ國籍ヲ取得シタル者及ヒ日本人ノ養子又ハ入夫トナリタル者ハ國務大臣、樞密院ノ議長、副議長、又ハ議員、宮内勅任官、特命全權公使、陸海軍將官、大

審院長、會計検査院長、行政裁判所長官及ヒ帝國議會ノ議員ト爲ルコトヲ得ス、但シ日本ニ功勞アル爲メ輕易ノ條件ヲ以テ歸化ヲ許サレシ者ハ國籍取得ノ日ヨリ五年ノ後其ノ他ノ者ハ十年ノ後内務大臣ハ勅裁ヲ經テ此ノ制限ヲ解除スルコトヲ得ヘシ、日本人ニシテ國籍ヲ失フ場合ハ外國ノ男子ト婚姻シタルトキ婚姻又ハ養子縁組ニ由リ日本ノ國籍ヲ取得シタル者カ離婚又ハ離縁ニ因リ其ノ外國ノ國籍ヲ有スヘキトキ、自己ノ志望ニ依リテ外國ノ國籍ヲ取得シタルトキ、日本ノ國籍ヲ失ヒタル者ノ妻及ヒ子カ其ノ者ノ國籍ヲ取得シタルトキ、日本人タル子カ認知ニ因リテ外國ノ國籍ヲ取得シタルトキ、但シ滿十七歳以上ノ男子ハ此等ノ場合ニ於テモ既ニ陸海軍ノ現役ニ服シ又ハ之ニ服スルノ義務ナキトキニ非サレハ國籍ヲ失ハス、又現ニ文武ノ官職ヲ帶フル者ハ其ノ官職ヲ失ヒタル後ニ非サレハ國籍ヲ失ハス、而シテ明治三十二年三月法律第九十四號ヲ以テ國籍ヲ失ヒタル家族カ日本人ニ



非サレハ享有スルコトヲ得サル權利ヲ有スル場合ニ於テ一年內ニ之ヲ日本人ニ讓渡サ、ルトキハ其ノ權利ハ國庫ニ歸屬スルコトヲ定ム日本ノ國籍ヲ失ヒタル者カ之ヲ回復スルニハ一般ノ國籍取得ノ規定ニ從フコトヲ要セサル場合アリ、即チ婚姻ニ因リ國籍ヲ失ヒタル者カ婚姻解消後日本ニ住所ヲ有スルトキ、及ヒ自己ノ志望ニ依リ外國籍ヲ取得シ又ハ日本ノ國籍ヲ失ヒタル者ノ妻及ヒ子ニシテ其ノ者ノ國籍ヲ取得シタル者(但シ歸化人、歸化人ノ子ニシテ日本ノ國籍ヲ得タル者又ハ日本人ノ養子若クハ入夫ト爲リタル者ナラサルヲ要ス)カ日本ニ住所ヲ有スルトキハ內務大臣ノ許可ヲ得テ國籍ヲ回復スルコトヲ得ヘシ

### 第二節 身分

國民分限、親族制度、家族制度ハ從來法例及ヒ民法中ニ規定スルヲ以テ

國民分限制度

便宜上之ヲ民法ニ讓リ、此ニハ國民ノ階級制度ニ付キテ概論スヘシ、但シ國民分限取得ノ一タル歸化行政ハ舊民法ニ於テモ特別法ノ規定ニ讓ルコト、セシカ、今日未タ歸化法ノ制定ヲ見ルニ至ラス、憲法ノ實施ニ由リ國民分限ニ關スル事項ハ法律ノ規定ヲ要スルコト、ナリシカ、其ノ以前ニ在リテハ歸化ハ行政處分ニ一任セラレタリ、維新以前ニ於ケル國民ノ階級ハ甚タ錯雜ナリシト雖モ概テ左ノ諸級ニ分ツコトヲ得ヘシ

#### (一) 優等族

(1) 君主ノ直接ノ支配ヲ受クル者 此ノ階級ニ屬スル者ハ皇族及ヒ公卿即チ朝廷ニ仕ヘテ貴族ニ列セラレタル者及ヒ其ノ子孫ニシテ此等ノ者ハ朝廷カ政權ヲ幕府ニ委任セシ以來實權ヲ有セスト雖モ最モ榮譽ノ地位ヲ占メタリ

(2) 徳川將軍及ヒ諸侯 君主ハ位記ヲ與フルノ權ヲ自カラ行フノ

外政權ハ全ク將軍ニ一任シ、將軍ハ國內ニ於テ最モ重要ナル土地ヲ其ノ直轄トシ、其ノ他ハ盡ク諸侯ニ與ヘテ將軍ハ之カ監督權ヲ握リタリ、諸侯ノ中ニハ徳川氏ノ親族及ヒ譜代ノ臣ニシテ領地ヲ與ヘラレタル者アリ、又徳川氏ニ降服シテ其ノ固有ノ領地ヲ保有スルコトヲ許サレタル者アリ、何レモ小獨立國ノ姿ヲ有シテ其ノ領土ヲ統轄シ、大體ニ於テハ將軍ノ監督ニ服スト雖モ、其ノ領内ニ於ケル政權ノ行使ニ至リテハ其ノ制限ヲ受クルコト甚タ少ナシ

(3) 將軍及ヒ諸侯ニ隸屬スル武士 文武ノ政務ハ専ラ此ノ階級ヨリ任用シテ掌ラシメ、名譽ノ表章タル帶刀ヲ許サレ、世襲ノ俸祿ヲ受ケ、租稅ヲ免除セラレ、商業ニ從事スルコトヲ禁セラレタリ、而シテ武士ニ隸屬スル奴僕モ多少平民ヨリ優遇ヲ受ケタリ

(4) 神官僧侶 宗教上ノ監督モ將軍ノ權力ニアルコト勿論ナリト

雖モ、各宗僧侶ハ主トシテ其ノ宗ノ主長ノ支配ヲ受ケ、寺院ハ其ノ領地ヲ有シテ、政治ニ參與スルコトナシト雖モ、概シテ武士ト對等ノ優遇ヲ受ケ、神官亦僧侶ト略同様ノ地位ヲ有セリ

(二) 平民 農工商ノ業ニ從事シテ獨リ租稅ヲ負擔シ、夫役ヲ命セラレ、町村ノ自治ヲ認メラレタル地方ニ在リテ其ノ町村行政ニ參與スト雖モ此ノ外一切文武ノ政務ニ關係スルコトヲ得サルモノトス

(三) 劣等族 劣等族ニモ種々アリト雖モ大別シテ二種トスルコトヲ得ヘシ

(1) 他人ニ屬スル奴婢 是レ主トシテ貧困者カ富者ニ其ノ身ヲ寄セ、身體ノ束縛ヲ受クルモノニシテ、主人ハ之ニ對シテ無限ノ權力ヲ行フコトヲ得ス、又主人之ヲ解放セハ平民トナルコトヲ得ルモノナリ

(2) 非人 此ノ階級ハ元ト其ノ職業ノ賤劣ナルヨリ平民ト齒セス

別ニ一階級ヲ爲シタルモノニシテ、後ニハ刑罰トシテ平民ヲ此ノ階級ニ下タスコトアリ、他ノ階級ト結婚シ其ノ他對等ノ交通ヲ爲スコトヲ得ス、之ヲ支配スルニハ特ニ其ノ階級中ヨリ主長ヲ選ンテ之ニ委任セリ又穢多ナル者アリ粗ホ非人ニ同シ

維新後ニ至リ幕府及ヒ封建諸侯ハ其ノ封土ヲ返還シテ、公卿ト共ニ華族ニ列シ、其ノ封土收入額ニ對シテ一定ノ公債證書ヲ下附シ、尙ホ國家ニ功勞アル者又ハ其ノ子孫ハ勅旨ヲ以テ華族ニ列シ、種々ノ優遇ヲ受ケ皇族ニ亞テ名譽ノ階級ヲ爲ス、又武士ハ封建制ノ廢止、官吏任用法ノ變更及ヒ徵兵制度ノ設定ニ由リテ夙ニ政務ニ參與スルノ專有權ヲ失ヒ、舊祿高ニ對シ一定ノ割合ヲ以テ公債證書ヲ下付セラレ、其ノ他刑法民法等ニ依リテ享有セシ特典ハ漸々廢止セラレテ、今日ハ只士族ナル名稱ノ外法律上ノ特權ナシ、又劣等族ニ至リテハ明治四年八月布告ヲ以テ非人、穢多ノ制ヲ廢シテ平民トナシ、翌五年十月布告第二百九十五

皇族ノ特待

號ヲ以テ人身賣買類似ノ所爲ヲ禁シ、同年十月司法省達第二十二號ヲ以テ奴婢ヲ解放シテ從來主人ヨリ之ニ對スル貸借ノ訴訟ヲ認メス、一般ニ雇傭契約ノ年限ヲ制限シテ、普通雇人ハ一年、徒弟ハ七年間トシ、此ニ劣等族ハ全ク跡ヲ絶チタリ、故ニ現時我國ニ於テ國民ノ階級ハ皇族、華族、士族、平民ノ四種アルノミ、今左ニ皇族及ヒ華族ニ關スル制度ノ要點ヲ示スヘシ

第一皇族 皇族ニ關スル一般ノ規定ハ明治二十二年二月憲法ト共ニ發布セラレタル皇室典範ヲ以テ初メトス、此ノ規定ニ依レハ皇族中皇后ハ陛下其ノ他ハ殿下ノ敬稱ヲ受ケ、攝政ト爲リ、又皇族ノ男子ハ皇位ヲ繼承シ、皇族會議ヲ組織スルノ權アリ、皇族相互ノ訴訟ハ宮内省ニ於テ裁判員ヲ命ジ、勅裁ヲ經テ之ヲ執行ス、人民ヨリ之ニ對スル訴訟ハ特定ノ控訴院ノ管轄トシ、皇族ハ代人ヲ以テ訴訟ニ當ラシムル者トス、其ノ刑事訴訟ハ大審院ニ於テ之ヲ掌ル、凡テ皇族ハ勅許ヲ得ルニ非サレ

ハ拘引シ又ハ裁判所ニ召喚セラレ、コトナシ、皇族ハ天皇之ヲ監督シ、其ノ婚姻及ヒ國外ノ旅行ハ勅許ヲ要ス、皇族ノ幼年者ニシテ父ナキ者ハ宮内省ニ命ジテ其ノ保育ヲ司ラシメ其ノ父母ニシテ後見人ヲ選フトキハ成年以上ノ皇族ノ中ヨリスルコトヲ要シ、時宜ニ由リテハ天皇之ヲ認可シ又ハ勅選スルモノトス、皇族ニシテ其ノ品位ヲ辱カシメ又ハ皇室ニ對シ忠順ヲ缺クトキハ、天皇ハ皇族會議ニ諮詢シテ之ヲ懲戒シ、時トシテハ其ノ特權ノ一部又ハ全部ヲ停止剝奪スルコトヲ得ヘク、遺產ノ所行アルトキハ其ノ治産ヲ禁シテ管財人ニ托スルコトヲ得ルモノトス

華族ノ特權

第二華族 華族ニ關シ概括ノ規定ヲ見ルニ至リシハ明治十七年七月ノ華族令ニシテ、其ノ後多少ノ修正ヲ加ヘ、同年又華族就學規則ヲ定メ、二十五年八月宮内省達甲第五號ヲ以テ改正スル所アリ、又明治十八年一月華族懲戒例ヲ定メタリシカ同二十三年八月勅令第六十號ヲ以

テ廢止セラレ故ニ華族ノ懲戒ハ華族令ニ依ル此等ノ規定ヲ以テ華族ニ關スル現行法ノ主要ナルモノトス、左ニ其ノ要點ヲ示スヘシ  
 華族ニ與フヘキ爵位ハ公侯伯子男ノ五級ニ分ツ、華族ノ男戸主ハ爵位ヲ受ケ男子相續人ニ由リテ之ヲ世襲ス、有爵者ハ貴族院令ニ依リテ其ノ議員トナルコトヲ得、公ケノ儀式ニ於テ名譽ノ待遇ヲ受ケ、其ノ父母妻子等モ同様ノ待遇ヲ受ケ、華族ハ又許可ヲ得テ世襲財産ヲ設ケ家範ヲ定ムルコトヲ得、華族ノ禁錮以上ノ刑ニ處セラレヘキ犯罪ニ對シテ公訴ヲ提起スルニハ現行犯ヲ除クノ外勅裁ヲ經サルヘカラス、華族ノ戸籍及ヒ身分ニ關スル事務ハ凡テ宮内大臣ノ管掌スル所ニシテ、其ノ婚姻養子ヲ爲スニハ主務大臣ノ許可ヲ要ス、華族男子ノ就學義務ハ平民ヨリモ頗ル嚴重ニシテ、學齡ハ六歳ヨリ二十歳マテトシ、學齡男子ノ修學ハ特別ノ官設學校ニ於テシ、若シ他ノ方法ニ於テ修學セントスル者ハ許可ヲ要ス、何レノ方法ニ由リ修學スルモ常ニ主務大臣ノ監督ヲ

受クルモノトス、華族ノ女子モ皇后陛下ノ令旨ニ基キテ建設シ宮内省ノ管理ニ屬スル特別ノ學校ニ入學スルコトヲ得ヘシ、華族ニシテ一定ノ刑ヲ受ケ、破産ノ處分ヲ受ケ、就學義務ヲ忘リ、又ハ華族ノ體面ヲ汚カス者ハ其ノ榮典ヲ剝奪セラレ、又ハ其ノ禮遇ヲ停止セラル、華族ニシテ品位ヲ保ツ能ハサル者ハ其ノ榮典ヲ辭スルコトヲ得、而シテ此等重要ノ事項ヲ處分スルニハ特ニ華族中ヨリ一定ノ委員ヲ選ンテ評議セシメ、勅裁ヲ經テ行フモノトス、華族ノ戶主ニシテ除族セラレタル場合ニハ特旨ニ依ルノ外其相續人ニ襲爵セシメラレサルモノトス、士族ハ單ニ名譽ノ稱號ノミニテ別ニ特權ヲ有セス、實際平民ト異ナル所ナシ

### 第三節 戶籍

維新以前ニ在リテ平民ノ戶籍登錄事務ハ宗教上ノ關係ヨリ之ヲ寺院

戶籍事務ノ沿革

ニ司ラシメ(宗教ノ部參照)武士ノ戶籍ハ藩廳ニ於テ取扱ヒタリ、而シテ當時各藩ハ一小國ノ態ヲ有セシカ故ニ、其藩籍ヲ脱シテ他藩ノ籍ニ入ルニハ許可ヲ要シタリ、維新後モ暫ク舊制ニ由リ寺院ヲシテ戶籍事務ヲ取扱ハシメシカ、明治四年四月布告ヲ以テ戶籍法ヲ制定シ別ニ吏員ヲ置キテ其ノ事務ヲ司ラシメ、翌年之ヲ地方下級行政廳ニ移シタリ、此ノ戶籍法ハ、當初ハ戶籍事項ノ外現今警察統計等ニ屬スル種々ノ事項ヲ含ミシカ、此等ハ漸々削除セラレ、戶籍ニ關スル部分モ屢、修正セラレタリ、今其ノ要點ヲ舉クレハ各人ノ住所ハ土地又ハ家屋ニ據リテ番號ヲ付シ、出生、死亡、失踪、親族及ヒ家族關係ニ於ケル身分ノ變更等ヲ其ノ都度届出テシム、此ノ點ニ付キテハ明治十九年九月內務省令第十九號ヲ以テ更ニ各事項ニ付キテ届出ツヘキ期間及ヒ届出ツヘキ責任者ヲ定メ、届出ヲ怠ルトキハ一定ノ科料ニ處スルコト、セリ、又一管區ヨリ他ニ其ノ住所ヲ轉シ本籍ヲ移スニハ當初ノ規定ニ依レハ、地方廳ニ出

願シテ戶籍ニ關スル證狀ヲ得之ヲ新住所ノ下級行政廳ニ差出シテ其ノ籍ニ編入ヲ請フコト、セシカ其ノ後ノ修正ニ由リ轉籍スルニハ只退籍入籍ノ届出ヲ以テ足レリトシ、送籍ノ手續ハ直接ニ退籍地ノ下級行政廳ヨリ入籍地ノ下級行政廳ニ對シテ爲スコト、セリ、住所ヲ轉スルモ必シモ本籍ヲ轉スルコトヲ要セス、現住所ノ寄留籍ニ編入スルコトヲ得、蓋シ近時ノ法律ハ現實ノ住所ニ據リテ法律關係ヲ定ムルコト多シト雖モ、現行法中尙ホ種々ノ點ニ於テ本籍地ニ據リ法律關係ヲ定ムルモノアリ、下級行政廳ハ一定ノ体裁ヲ有スル戶籍簿ヲ具ヘテ届出事項ヲ登錄シ、其ノ副本ハ上級廳ニ納メ置キ、正本滅失ノ際ハ之ニ基キテ新ニ調製スルモノトス、戶籍簿ヲ改製セントスルトキハ上級官廳ノ許可ヲ要シ、調製ノ上ハ檢査ヲ受クルコトヲ要スト規定シタリ

民法(親族編、相續編)ヲ施行スルニ付テハ從前ノ戶籍法令ニ依リ難キモノ多ク且ツ補足ヲ要スル點少カラサルヲ以テ明治三十一年六月法律

第十二號ヲ以テ戶籍法ヲ改定シ同年七月十六日ヨリ實施セラレタリ

本法ニ依レハ戶籍及ヒ身分登記ニ關スル事務ハ戶籍吏(市町村長、區ヲ置キタル市ニ於テハ區長)之ヲ管掌シ、戶籍役場(町村役場又ハ市區役所)ニ於テ之ヲ取扱フ、戶籍事務ハ戶籍役場ヲ管轄スル區裁判所ノ一人ノ判事又ハ監督判事之ヲ監督ス、戶籍吏カ其ノ職務ノ執行ニ付届出人其ノ他ノ者ニ損害ヲ加ヘタルトキハ其ノ損害カ戶籍吏ノ故意又ハ重大ナル過失ニ因リテ生シタル場合ニ限り之ヲ賠償スル責ニ任ズ、身分登記又ハ戶籍ニ關スル事務ニ付戶籍吏ノ處分ヲ不當トスル者ハ管轄區裁判所ニ抗告ヲ爲スコトヲ得ト定メタル等ハ新ニ加ヘラレタル條項ノ著シキモノナリ、本法ハ九章二百二十三條ヨリ成立スルモノニシテ戶籍吏及ヒ戶籍役場、身分登記簿、登記手續、身分ニ關スル届出、戶籍簿、戶籍ノ記載手續、戶籍ニ關スル届出、抗告、罰則ニ付詳細ニ規定セラレタリ

衛生

衛生機關

衛生事務ノ沿革

### 第三章 衛生

#### 第一節 衛生機關

明治四年十月岩倉大使歐米各國巡回ノ際當時ノ大學教授長與專齋ヲ文部省理事官ニ隨行セシメ以テ衛生醫事ニ關スル文明制度ヲ調査セシム其ノ歸朝スルヤ則チ六年三月ヲ以テ文部省ニ醫務局ヲ設ケ同年八月醫制ヲ定ム(第一)衛生事務ハ醫務局ニ於テ統轄シ全國ヲ七衛生區ニ分チ每區衛生局ヲ置キ各地方ニ主任官ヲ置キ其ノ下ニ醫務取締ヲ置クコト(第二)各大學區ニ一ノ醫學校ヲ置キ醫師ヲ養成スルコト(第三)醫學教員ハ公私ノ學校ヲ問ハス衛生局ノ免許狀ヲ有シ外國教師ハ中學教授免狀若クハ外國ノ醫術開業免狀ヲ有スル者タルコト(第四)醫師ハ醫學卒業證書ヲ有スル者タルコト并ニ處方書ヲ出シテ診察料ヲ受クル者トシ調劑兼帶ノ醫師ニ非サレハ調劑スルコトヲ得サルコト

(第五)醫師傳染病ヲ診察スル時ハ即時届出ルコト(第六)産婆ハ産婆學ノ大意ニ通シ免許狀ヲ有スヘキコト(第七)藥舖ニハ試驗ノ上免狀ヲ與フルコト(第八)日本藥局方ヲ定メ該局方ニ適合スル藥品并ニ相當ノ器具ハ藥局ニ備付ケシムルコト(第九)司藥場ヲ置テ藥品ノ検査及ヒ營業ノ取締ヲ爲サシメ劇藥ノ販賣ニ制限ヲ設クルコト(第十)賣藥ハ検査ノ上許可スルコト等ノ七十六條ヲ規定ス此ノ規定タル專ラ歐米諸洲ノ制ヲ取レルモノタレハ未タ帝國當時ノ事情ニ適セサルモノアリト雖モ此ニ衛生行政ノ大方針ヲ示シテ將來據ル所ヲ知ラシメ文物ノ開明ニ伴ヒ漸次斟酌施行シテ其ノ歩ヲ進メントノ精神ニテ先ツ之ヲ三府ニ示シ置キ時期ヲ見計ラヒ其ノ一二ノ條項ハ舉ケテ之カ實施ヲ命セリ其ノ他ノ制度モ皆先ツ之ヲ三府ニ施シ然ル後之ヲ全國ニ及ホスノ方針ヲ取レリ八年五月右醫制ヲ刪正シ醫學教育ニ關スル條項ヲ削除シ此ニ始メテ衛生ト醫學トノ事務ヲ分割シタリ爾來種々ノ改更ヲ經テ

現時各般ノ制度ヲ見ルニ至レリ

衛生局

衛生行政ノ中央機關ヲ設クルハ明治六年三月文部省中ニ醫務局ヲ設置セルニ始マレリ、八年六月衛生事務ヲ内務省ニ移シ同年七月衛生局ヲ置ク、當時衛生局事務ノ分課ハ庶務、製表、賣藥、種痘、出納ノ五課ニシテ公衆衛生事務ハ賣藥、種痘ニ重キヲ置キシカ、其ノ後學術ト世運ノ進歩ニ伴ヒ現行法ニ於テハ保健、防疫、醫務ノ三課ニ分チ衛生醫事ノ事務ヲ分掌セシム

衛生試驗所

初メ西洋醫學ノ漸ク進歩スルニ從ヒ洋藥ノ需用亦隨テ増加シ來ルニ乘シ外國ノ奸商輩盛ニ贋敗藥ヲ船載セルヲ以テ各開港場ニ司藥場ヲ設ケ專ラ藥品ヲ検査シ兼テ衛生上諸般ノ試驗ヲ爲サシメンカ爲メ明治七年三月先ツ東京司藥場ヲ設立シ以テ其ノ端ヲ啓ケリ、之ヲ現今東

衛生行政

衛生試驗所

京横濱大阪ノ三衛生試驗所ノ始メトス、輸入藥品ノ検査ハ始メハ先ツ試ニ需用ノ最モ廣ク贋敗ノ最モ多キ規尼涅、沃度加里ノ二種ニ著手シ、容器ニ検査印紙ヲ貼付シテ其ノ性質ヲ保證セシニ速ニ贋敗品輸入防遏ノ實效ヲ認メタルヲ以テ明治九年三月ヨリ更ニ二十種ノ藥品ヲ加フルニ至リ、是ニ由テ藥業者ノ検査ヲ乞フ者日ヲ逐フテ増加シ一般ノ藥品モ司藥場ノ印紙ナケレハ價格ニ影響ヲ來スニ及ヘリ、爾來一層検査ノ方法ヲ密ニセルヨリ藥業者モ大ニ注意ヲ加フルニ至リ藥品市場ノ景況一變セリ、而シテ検査ノ目的タル贋敗藥輸入ノ禍害ヲ防制スルニ在ルヲ以テ始メハ検査シ證明スルニ悉皆無料ヲ以テセシカ、其ノ後最早保護ヲ與フルノ必要ナキニ至リタルヲ以テ十七年九月以來ハ相當ノ料金を徴ス乃チ現在衛生試驗所ハ一面ニハ國家ノ衛生審事機關トナリ、一面ニハ人民ノ依頼ニ應シ一定ノ料金を徴シテ分析鑑定審査及ヒ證明ヲ爲スモノナリ



中央衛生會

(製業業ヲ指導獎勵スル爲メ明治十一年一月東京製業所ヲ官設セシカ国民間ノ事業漸ク興ルニ至リ同十六年五月之ヲ廢ス)

中央衛生會

明治十二年七月虎列刺病ノ流行ニ對スル臨時防疫機關トシテ之ヲ設置シ流行終熄ノ後其ノ組織ヲ改メ諮詢機關トセリ

血清藥院

血清藥院

實布埜里亞ノ血清ヲ製造スル爲メ東京ニ之ヲ置ク傳染病研究所(北里博士所長トシ大日本私立衛生會ノ設立ニ係リ國庫ヨリ毎年一萬五千圓ヲ補助ス)ニ於テ研究ノ結果其ノ成績ノ確實ナルヲ認メ明治二十九年六月ヨリ開始ス

痘苗製造所

痘苗製造所

帝國ニ於ケル痘苗製造事業ハ明治七年十二月東京ニ牛痘種繼所ヲ官設セルヲ始メトス是レヨリ各地方ニ種苗トシテ春秋兩期ニ若干數ヲ配布シ十二年ヨリ代價ヲ徴シテ何人ノ所望ニモ應スルコトニセリ二十一年十一月ヨリ此ノ事業ヲ大日本私立衛生會ニ委附シ衛生局監督

地方衛生機關

地方衛生機關

ノ下ニ在テ全國痘苗普及ノ責ヲ負ハシム該會ハ其ノ製造ト研究トノ事業ヲ繼續シテ終ニ二十五年一月ヨリ人傳漿ヲ廢シテ純粹牛痘苗ヲ供給スルニ至リ是ニ於テ政府ニ於テモ種痘ニハ人體漿ヲ避ケテ牛漿ヲ用ヒシムルコトヲ獎勵セシカハ勢ヒ痘苗需要ノ數ヲ増加シ之ヲ營業トシ其ノ利益ノ少ナカラサルヨリ民間ニ於テ續々痘苗製造業者ヲ出シ其ノ極收利ノ一方ニ奔リ漸ク粗製濫造ノ弊ヲ生シ其ノ危害看過シ去ル能ハサルノ情況トナリシヲ以テ再ヒ國立痘苗製造所ヲ設立スルニ決シ明治二十九年六月ヨリ東京大阪ノ兩所ニ開始ス

明治七年八月各大區(今ノ郡市ニ準ス)ニ醫務取締ヲ置カシム之ヲ衛生主務官ヲ置クノ始メトス同十月地方廳ニ醫務掛ヲ置キ十一年五月更ニ衛生事務擔當吏員ヲ置キ十二年十二月終ニ專務衛生課及ヒ地方衛生會ヲ置ク十三年二月衛生官吏ヲ増置スル爲メ府縣判任官ノ定員ヲ

増加シ郡區ノ職務取締ヲ止メテ主任官吏ヲ置カシメ遂ニ町村衛生委員ヲ置ク是ニ於テ地方衛生機關大ニ備具セリ其ノ衛生委員ハ町村住民若クハ町村會ノ公選ト爲シ漸ク町村ノ自治機關タラシメントスルノ方針ヲ取リシカ十八年十二月ノ行政制度大革新ノ時ニ先チ之ヲ全廢シ二十六年十月地方官制ノ改正ニ際シ地方廳ノ衛生事務ハ舉テ警察部ニ移ス必竟比年傳染病ノ流行ニ遭遇シ防疫事務ハ地方衛生事務ノ主要ヲ占メ其ノ防疫事務タル多クハ衛生警察事務ニ屬スルカ故ニ暫ク之ヲ警察部中ニ移シテ全力ヲ防疫ノ事ニ注カシメンカ爲メナリ

保健行政

### 第二節 保健行政

傳染病豫防、種痘  
其他ノ保健行政

傳染病豫防

王政維新以前ニハ人カヲ以テ傳染病ヲ豫防シ得ヘキコトハ殆ント知ラレサリシナリ維新以後モ天然痘ノ外ハ著シキ傳染病ノ流行ナキカ

防疫制度沿革

故ニ豫防即チ防疫制度トシテハ明治八年二月ヨリ醫師傳染病ヲ診察シタルトキ其ノ届ヲ爲サシムルニ止マリ一般ニ豫防方法ノ規定ナカリキ

明治十年西南戰爭中清國厦門地方ヨリ痘列刺病毒傳播シ來リ最先ニ軍隊ヲ侵シ次テ各地ニ蔓延シタリ該病ハ從來數々本邦ニ慘毒ヲ流セシモ安政文久以來久シク其ノ侵襲ヲ受クサリシカハ上下共ニ殆ント豫防上ノ經驗ニ乏シク徒ニ恐怖スルノミナリシヨリ豫防心得書ヲ以テ之ヲ地方廳ニ訓示シタリ十二年大ニ流行ス同年六月布告第二十三號ヲ以テ痘列刺病毒豫防假規則ヲ公布ス此ノ流行ハ人命ヲ傷ヒ生産ヲ害スルコト少ナカラサリシヲ以テ大ニ上下ノ人心ヲ悚動シ實ニ本邦衛生制度ノ發達ヲ促ス一大原因トナレリ翌十三年七月布告第三十四號ヲ以テ痘列刺病毒扶私赤痢實布埜里亞發疹室扶私及ヒ痘瘡ノ六傳染病ニ對スル豫防規則ヲ設ケ之ヲ診察シタル醫師ハ二十四時間内ニ

戸長ニ通知スルコト、醫師並ニ戸長ニ於テ必要ト認ムルトキハ患者ヲ傳染病院ニ收容スルコト、當該官吏ハ傳染病アル家ノ門戸ニ病名票ヲ貼付シ外人トノ交通ヲ絶ツコト等ヲ以テ通則トシ、病毒汚染物ノ處置死體ノ埋火葬、掃除清潔法、船舶ノ檢疫檢疫委員ノ組織、群集ノ禁止等、各病性ニ應シテ之ヲ規定セリ。十四年布告第五十八號ヲ以テ部落交通遮斷ノ必要アリ之ヲ追加ス。又病名ヲ門戸ニ貼付スルハ大ニ人ノ嫌厭ヲ來シ爲ニ隱蔽ノ弊アルヲ以テ十五年布告第四十七號ヲ以テ之ヲ停止ス。十八年九月内務省達甲第三十一號ヲ以テ古著纏纒ヲ流行地外ニ搬出スルヲ禁ス。二十八年日清戰役ニ伴ヒ虎列刺ノ侵襲ヲ受ケントスルノ虞アリ且ツ前年來赤痢ノ流行益、盛ナルヲ以テ此ニ大ニ豫防ノ實效ヲ奏センカ爲メ同年四月勅令第四十三號ヲ以テ臨時防疫機關トシテ中央ニ臨時檢疫局、地方ニ臨時檢疫部ヲ隨時開設スルノ制ヲ設ク而シテ十三年七月豫防規則ノ制定以來傳染病學ノ進歩ト二十一年四月市

町村制ノ發布トニ由リ其ノ規則ハ實際ニ適セサルノ廉アリ乃チ數次豫防心得書ヲ出シテ規則ノ不備ヲ補ヒ以テ自治制度ノ熟スルヲ待チ且自治制度上ニ於ケル防疫事務實行上ノ事項ヲ實際ニ試ミ終ニ其ノ法案ノ調査ニ著手シ三十年四月法律第三十六號ヲ以テ傳染病豫防法ヲ發布ス。新法ニ於テハ「猩紅熱、ペスト」ノ二病ヲ加フ、醫師ノ届出ヲ十二時間以内トシ、個人ニハ發病者アルトキ醫師ノ診察ヲ受ケ又ハ届出ヲ爲シ及ヒ醫師又ハ當該吏員ノ指示ニ從テ消毒方法、清潔方法ヲ行フノ義務ヲ負ヘシメ、當該吏員ニハ患者ヲ傳染病院ニ收容シ、健康者ヲ隔離シ、患者ノ交通ヲ遮斷シ、患者死體ノ移轉ヲ許否シ、病毒汚染物件ノ使用授與等ヲ許否シ、及ヒ何時タリトモ家宅ニ入ルノ權力ヲ有セシメ、又死體ハ火葬ヲ本則トシ之ヲ土葬シ又ハ土葬シタルモノヲ三年以内ニ改葬スルトキハ警察官署ノ許可ヲ要スルコト、又市町村ハ地方長官ノ指示ニ從ヒ市町村ノ臨時豫防機關トシテ豫防委員ヲ組織シ、傳染病

院消毒所等ヲ設備シ市町村内清潔方法消毒方法ヲ行ヒ醫師人夫等ヲ雇入レ器具藥品等ヲ設備スルノ責務アリ又地方長官ハ其ノ地方ニ於ケル臨時豫防機關トシテ檢疫委員ヲ組織シ船舶瀉車檢疫ヲ施行シ海外ノ病毒ニ對スル海港檢疫ハ内務大臣ノ管掌トス及ヒ豫防上必要ト認ムル警察命令ヲ發スルコトヲ得其ノ市町村ト府縣トノ費用ノ分擔ヲ明カニシ且ツ防疫事務タル小ニシテハ市町村中ニシテハ府縣大ニシテハ國家ノ責務タルヲ以テ其ノ責務ヲ分擔スルノ精神ヲ以テ國庫ヨリ府縣費ニハ六分一府縣費ヨリ市町村費ニハ二分一乃至六分一ヲ補助スルモノトス

初メ明治十三年七月ニ傳染病豫防規則ノ制定アリテ船舶檢疫ノ法アリシト雖モ該規則タル專ラ内地ニ對スル豫防制度ニシテ外國船ニ應用スル精神ニ非サリシカ十五年六月布告第三十一號ヲ以テ虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶検査規則ヲ制定ス二十四年六月勅令第六十五

號ヲ以テ現ニ虎列刺ノ流行地ニ非サルモ該病傳染ノ虞アリト認ムル外國諸港ヨリ來ル船舶ハ凡テ檢疫シ得ルコト、シ二十七年香港ニ於テ「ベスト」流行ノ際「ベスト」モ亦虎列刺ト等シク檢疫スヘキモノトセラレタリ此ノ規則ニ依レハ内務大臣ノ指定セル外國諸港及ヒ臺灣ヨリ來ル船舶ハ檢疫ヲ爲シ無病船ハ船及ヒ人ニ對シテ直ニ自由ヲ與ヘ有病船ハ消毒方法ヲ施行シ九日以内適當ノ位置ヲ指定シテ停船セシム其ノ乗客乗組人ハ陸地停留所若クハ該船中ニ同時日間停留セシム患若クハ檢疫所附屬ノ病院ニ收容治療シ死者ハ引受人ニ渡シ引受人ナキトキハ火葬若クハ土葬ス

明治三十二年二月法律第十九號ヲ以テ海港檢疫法ヲ制定ス本法ニ於ケル改正ノ重ナル點ハ海外諸港及ヒ臺灣ヨリ來ル船舶ニ對シテ内務大臣ノ指定シタル海港ニ於テ檢疫ヲ施行ス檢疫港ニ來ル船舶ハ其ノ入港前ニ檢疫ヲ受ク許可證ヲ得タル後ニ非サレハ入港シ陸地又ハ他

船ト交通スルヲ得ス、若シ其ノ船舶ニシテ病疫傳播ノ恐レアル一定ノ事情アレハ入港前ヨリ許可證ヲ得ルマテ一定ノ檢疫信號ヲ掲ケサルヘカラス、内外國ノ軍艦ニシテ檢疫港ニ來ルモノニ對シテモ一定ノ制限内ニ於テ檢疫ヲ施行スルコト、セリ

種痘ノ強制

往時痘瘡ハ人生ノ全ク免カル、能ハサル厄トシ終ニ輕ク其ノ厄ヲ免カレンカ爲メ輕症ナル痘瘡患者ノ宅ニハ故ラニ小兒ヲ携ヘテ至リ其ノ輕キ毒ニ罹ランコトヲ希フカ如キ風トナルニ至レリ殊ニ痘瘡流行ノ爲メ人口ノ減少ヲ來ス地方モアリト云フニ至リシ際適、豫防法ノ完全ナル種痘術ノ外國ニ行ヘル、コトヲ知リタレハ其ノ法ノ傳來ハ有識者ノ渴望己マサル有様ナリシヲ以テ嘉永年間一旦其ノ法ノ傳來スルヤ速ニ全國ニ傳ハリ各藩中隨分嚴重ナル規則ヲ設ケテ之カ普及ヲ力メタリ明治政府トナルヤ三年四月布告ヲ發シテ更ニ其ノ普及ヲ促

敬毒検査

シ九年五月内務省布達甲第十六號ヲ以テ天然痘豫防規則ヲ定メ初生兒ハ必ス種痘セサルヘカラサルコト、シ明治十八年十一月布告第三十四號ヲ以テ種痘規則ヲ定メ強制主義ヲ取り小兒出生後一年以内ニ之ヲ行ヒ五年乃至七年ニ再種シ更ニ同期限内ニ三種セシメ痘瘡流行時ニハ掛官吏ハ此ノ期限ニ關セス種痘ヲ命スル等ノ規定トナレリ是レ即チ現行法ナリ

西洋醫術ノ漸ク盛ナルニ當リ漢法醫家ハ之ヲ夷法トシテ大ニ排撃ヲカメ遂ニ幕府ヲシテ西洋醫術ノ禁令ヲ發セシムルニ至ル其ノ禁令ヲ發スル際恰モ種痘術ヲ傳ヘ其ノ效ノ較著ナル亦之ヲ誣ユルコト能ハサルヲ以テ大ニ一般ノ人心ヲ動カシ西洋醫術ヲシテ其ノ氣力ヲ快復セシムルコトヲ得タルヲ以テ種痘術ノ傳來ハ醫學ノ進歩ニ一大利益ヲ與ヘタリト謂フ

敬毒検査

微毒病院ハ慶應三年九月幕府之ヲ横濱ニ設ケ次ヲ神戸長崎ニ設ケ娼妓身體検査ノコト實ニ此ノ時ヲ以テ始メトス明治九年四月内務省ハ右三港外ノ地方廳ニ檢徴施行ノ訓令ヲ發シ今日ハ各地方トモ地方長官ニ於テ娼妓營業免許地ニ在テハ適宜ノ檢徴法ヲ設ケ之ヲ施行セサルハナシ而シテ其ノ有毒者ハ所屬病院ニ收容シ身體検査ハ每週一回ヲ普通トス

賣藥

賣藥ハ古クヨリ行ハレ全國各地ニ其ノ製造者アリテ需要モ亦盛ナリシモ藥味分量等製造者ノ自由ニシテ各藩トモ何等取締法ヲ設クルモノナシ維新後明治三年十二月ニ至リ始メテ之ヲ大學東校ニ於テ管轄セシメ検査ノ上免許狀ヲ渡スコト、シ六年三月文部省ニ醫務局ヲ置キシヨリ之ヲ該局ニ管理セシメ八年六月之ヲ内務省ニ屬セシム又賣藥税金ヲ徴シテ衛生費途ニ供スヘキ目的ヲ以テ十年一月布告第七號

賣藥取締

ヲ以テ賣藥規則ヲ設ク其ノ後條項ノ改竄アリテ現行法トナレリ即チ賣藥ハ地方廳ニ於テ検査ノ上鑑札ヲ渡ス舊法ニテハ内務省ノ管掌ナリシカ十一年之ヲ地方廳ニ委任シ検査標準ヲ訓示シテ各地其ノ方法ヲ一定セシム又舊法ニテハ鑑札ノ有効期限ヲ六年トシ更ニ検査ノ上免許スルノ制ニテ其ノ主旨タル漸次改良セシメントスルニ在リシカ今ハ只無害ナレハ其ノ效ノ如何ハ問ハサルコト、シテ全ク其ノ期限ヲ廢セリ、毒藥劇藥ヲ配伍スルモノ及ヒ取扱上失誤ヲ生シ易キモノハ之ヲ許サス尤モ劇藥ト雖モ或ル品種ト分量トヲ限リテ許可スルモノアリ、免許ノ後有害ナルコトヲ發見シタルトキハ之ヲ禁止ス舊法ニテハ賣藥税金ハ一年一方ニ付二圓ノ營業稅ノミナリシカ其ノ負擔輕ク政府ノ鑑札ハ寧ロ有效ノ保證トナリ營業ヲ保護スルカ如キノ觀アリテ年一年ニ其ノ繁昌ヲ加フルニ至リタルヲ以テ終ニ一面ニハ其ノ繁昌ヲ制シ一面ニハ國庫ノ收入ヲ増加シ大ニ衛生事業ノ擴張ニ供セン

水道下水

カ爲メ營業稅ノ外二十五年十月布告第五十一號ヲ以テ賣藥印紙規則ヲ定メ定價十分一ニ相當スル印紙ヲ貼用セシムルコト、ナレリ然レトモ國費多端ニシテ賣藥稅ハ普通ノ國庫收入トナリ今ヤ目的稅ノ性質ナキニ至レリ

水道下水

帝國ニ於テ鐵管ヲ布設シ壓力ヲ有セル水道ノ設ケハ明治二十年ニ落成セル横濱水道ヲ以テ始メトス此ノ時ニ際シ給水法改良ノ必要ハ社會ノ認知スル所トナリ之ヲ企圖スル者續々出ツルノ勢アルヲ以テ明治二十三年二月法律第九號ヲ以テ水道條例ヲ制定ス即チ水道ハ市町村ノ公設トシ會社私人ニ於テ布設スルコトヲ許サス水道ヲ布設スルニハ內務大臣ノ認可ヲ受クルヲ要シ水道用地ハ租稅ヲ免除シ官有地ハ之ヲ拂下ケ又ハ貸付ス地方長官ハ隨時官吏ヲシテ檢査セシメ工事ノ改築修理ヲ要シ若クハ水質ノ不良水量ノ不足ナリト認メタルトキ

墓地及ヒ火葬

ハ地方衛生會ニ諮リ期ヲ定メテ改良ヲ命ス一家專用ノ給水用具ヲ設クル能ハサル者ノ爲ニ共用給水ヲ設ケ又消防用ノ消火栓ヲ設ケ無料ニテ水ヲ供給スルモノトス

下水ニ關シテハ未タ法律上ノ規程ナシ各地方ニ於テ市町村從來ノ習慣ニ從ヒ之ヲ管理セシム但シ其ノ敷地ニ付テハ明治二十二年七月法律第十九號土地收用法中ニ些ノ規定アルノミ

墓地及ヒ火葬

墓地ハ封建時代ヨリ各藩一定ノ制アリテ市街地ハ寺院内ノ外埋葬ヲ許サス村落ニ至テハ私有地内ニハ隨意ニ墓地ヲ設クルノ風アリシカ明治五年八月私有耕地ノ畔際ニ遺骨ヲ埋葬スルコトヲ禁シ六年十月太政官達第三百五十五號ヲ以テ私有地タリトモ墓地ノ新設ヲ止メタリ又火葬ハ宗教上古クヨリ行ハレ地方ニ在テハ之ヲ嫌フノ風アルモ東京ノ如キハ多クハ火葬スルノ風アリシカ今ヤ傳染病ノ死屍ノ如キ

ハ火葬ヲ強制スルノ制度ヲ設クルニ至レリ明治十七年十月太政官布達第二十五號ヲ以テ墓地及ヒ埋葬取締規則ヲ設ケ葬地及ヒ火葬場ハ地方廳ノ許可シタル一定ノ場所ニ限ル死體ヲ葬ルニハ死後二十四時ヲ經過スルヲ要シ共葬墓地ハ種族宗旨ヲ問ハス其ノ町村住民若クハ其ノ町村ニテ死シタル者ハ何人ニテモ葬ルコトヲ得火葬場ハ人家稠密ナル地ヲ距リ風上ニ位セサル地ヲ撰ミ臭烟ヲ防クノ装置ヲ要スルモノトス  
其ノ他塵芥汚物及ヒ河川道路ノ掃除繪具著色料飲食物ノ取締等ハ今日尙ホ地方警察規則ノ定ムル所ニ任ス

醫事行政

第三節 醫事行政

醫師、藥劑師、  
藥品取締、阿片

醫師

醫師ハ幕府時代ニ在テハ官祿アル者ハ世襲ノ姿ヲ爲シ其ノ他ハ何人

醫制ノ沿革

ニテモ隨意ニ之ヲ營ムコトヲ得其ノ資格ニ制限ナカリシナリ明治七年三月醫制ヲ定メシ後八年二月東京京都大阪ノ三府ニ令シテ從來開業醫ノ外新ニ醫術開業ヲ爲サントスル者ハ試験ノ上免狀ヲ交付スルコト、シ翌年一月之ヲ全國ニ及ホセリ其ノ試験ハ地方廳ニ於テ行ヒ免狀ハ内務省ヨリ交付ス而シテ其ノ試験科目ハ理化、解剖、生理、病理、内外科學等ナレハ千歳在リ來リタル漢法醫モ此ニ於テ從來開業者ノ外復タ新ニ開業スルコトヲ得サルコト、ナリ實ニ本邦醫制ノ一大革新タリ十二年二月内務省達甲第三號ヲ以テ醫師試験規則ヲ定メ試験科目ノ定度ヲ高メ問題ハ内務省ニ於テ撰ヒ封緘シテ受験人ニ交付セシメ内務省ニ於テ其ノ答案ヲ檢シ合格者ニ免狀ヲ交付シ又官立大學校歐米諸國ノ大學校ノ卒業證書ヲ得タル者ハ試験ヲ須ヒス免狀ヲ下付スルコト、シ十五年二月布達第四號ヲ以テ地方醫學校中相當ノ教師ヲ置キ教則試験法ノ完備セルモノハ無試験免狀ヲ下付スルコト、シ



同年八月布告第三十九號ヲ以テ醫師カ醫業ニ關シ犯罪不正ノ行爲アル者ニ對シ内務卿ニ於テ營業禁停ノ行政處分ヲ行フコト、シテ遂ニ十六年十月布告第三十五號ヲ以テ醫師免許規則ヲ發布ス是レ即チ現行法ニシテ醫師ハ醫術開業試驗ヲ受ケ内務卿ノ醫術開業免狀ヲ有スルヲ要ス、醫科大學、高等醫學校、醫學部、特許ヲ得タル府縣立醫學校、外國ノ大學醫學部若クハ醫學校ヲ卒業シ又ハ外國ノ開業免狀ヲ得タル者ハ無試驗ニテ免狀ヲ授與スルコト、シ、醫師ニ乏シキ島地若クハ山間ノ村落ニ於テハ地方長官ノ具狀ニ依リ無試驗ニテ限地開業醫ノ假免狀ヲ授與ス、其ノ業ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行爲アルトキハ内務卿ノ行政處分ヲ行フコト又舊法ト同シ開業試驗ハ内務卿ノ監督ノ下ニ於テ試驗委員之ヲ行フモノトス

藥劑師

藥劑師

帝國ニハ本ト醫師ノ外別ニ藥劑師ナク醫師ヲ以テ直ニ藥師ト稱セシ

藥品取締

位ニテ藥品ノ營業ヲ爲ス藥舖ハ他ノ商品ヲ商フ商買ト等シク有無ヲ通スルニ過キサル業體ナレハ昔時採藥師杯ノ稱アリシ、近代ニ至テモ猶ホ別ニ學科トシテ修ムルノ風ナカリシカ明治維新ノ後始テ藥學トシテ專修スルニ至レリ同八年十二月内務省達ヲ以テ始メテ簡易ノ藥舖開業ノ試驗法ヲ定メ二十二年三月法律第十號ヲ以テ藥品營業並藥品取扱規則ヲ定ム是レ即チ現行法ナリ本法ニ依レハ醫師ト同シク藥劑師試驗ニ及第シ内務大臣ノ開業免狀ヲ有スルヲ要シ、藥局ハ藥劑師ニ非サレハ開設スルコトヲ得サルコト、シ、而シテ藥劑師ノ外藥品ヲ販賣スル藥種商藥品ヲ製造販賣スル製藥者ハ地方廳ノ免許鑑札ヲ受ケ此等ハ毒藥劇藥ハ封緘ヲ開テ零賣スルコトヲ得サルモノトセリ

藥品取締

幕府時代ニ於テハ藥品ハ他ノ商品ト等シク何等ノ取締法ナシ而シテ西洋醫術ノ傳來スルヤ其ノ藥品ハ悉ク之ヲ外國ニ仰カサルヲ得ス醫

術ノ進歩ニ伴ヒ西洋藥品ノ需用益々多ク年一年ニ輸入額ノ増加スルニ  
 隨ヒ奸商輩粗製濫造品ヲ輸入スルモノ少カラサルニ至リタルヲ以テ  
 明治七年三月文部省達ヲ以テ同藥場即チ衛生試驗所ヲ東京ニ設置シ  
 輸入藥品ノ検査ニ著手シ同年九月同省達ヲ以テ毒藥取扱規則ヲ定メ  
 毒藥ハ醫師工業家等ノ外ニハ販賣スルコトヲ禁シ同年十二月規尼涅  
 沃度加里賈惡品取締規則ヲ定メ賈敗品ヲ嚮キ若クハ貯藏スル者ハ五  
 十圓以内ノ罰金ヲ科シ再犯以上ハ罰金ヲ倍加スルモノトシ十年二月  
 布告第二十號ヲ以テ毒藥劇藥取扱規則ヲ設ケ十三年一月布告第一號  
 ヲ以テ藥品取扱規則ヲ定メ藥品ヲ毒藥、劇藥、注意藥ノ三類ニ分チ販賣  
 取扱方法ヲ規定ス此ノ年日本藥局方編纂委員ヲ組織シ其ノ調査ニ著  
 手シ十九年六月内務省令第十號ヲ以テ日本藥局方ヲ發布シ二十二年  
 三月法律第十號ヲ以テ藥品營業並藥品取扱規則ヲ制定ス是レ即チ現  
 行法ナリ該法ニ依レハ日本藥局方ニ記載スル藥品ハ其ノ性狀品質該

阿片烟吸食ノ嚴禁

局方ノ所定ニ適合スルモノニ非サレハ販賣授與スルコトヲ得ストシ、  
 日本藥局方ニ記載セサル藥品ハ其ノ據ル所ノ外國藥局方ニ適合スヘ  
 キモノニ限リ新規ノ藥品ハ衛生試驗所ノ検査ヲ經テ其ノ試驗成績ヲ  
 記スヘキモノトシ、内務省令ヲ以テ定メタル毒藥劇藥ハ他ノ藥品ト區  
 別シ置キ毒藥ハ鎖鑰アル場所ニ貯藏スルモノトシ、職業上必要ナリト  
 ノ證書ヲ出スニ非サレハ毒藥劇藥ヲ販賣スルコトヲ得サルモノトシ  
 幼者又ハ不安心ト認メル者ニ交付スヘカラストセリ

阿片

阿片ハ幕府時代ヨリ國禁物トシテ各國條約中ニ之カ輸入ヲ禁セリ明  
 治元年更ニ阿片烟ノ嚴禁ヲ公布シ三年八月布告ヲ以テ阿片烟販賣律  
 ヲ設ケ販賣利ヲ度ル者ハ斬人ヲ誘引シテ吸食セシムル者ハ絞、以下犯  
 狀ニ因テ差等アリ徒一年ヲ最モ輕シトス同時ニ生阿片取扱規則ヲ設  
 ケ藥店中ニ現存スルモノハ官簿ニ登記シ醫藥用ノ爲メ販賣スルトキ

ハ買買者双方ヨリ數量ヲ届出テシメ其ノ缺乏ニ至リタルトキハ官ニテ輸入買下ルコト、シ爾來醫藥用阿片ハ政府ノ專賣トセリ而シテ阿片ノ原料タル罌粟ハ草花トシテ各地ニ栽培シ間々阿片製造ヲ試ムル者アルニ至リタルヲ以テ九年六月其ノ栽培製造方法ヲ示シテ之ヲ獎勵シ十一年八月布告第二十一號ヲ以テ賣買製造規則ヲ制定ス三十年三月法律第二十七號ノ阿片法即チ現行法ハ此ノ規則ノ改正法ニシテ阿片製造ハ地方長官ノ許可ヲ受ケ其ノ製品ハ政府ニ納メ政府ハ試験ノ上賠償金ヲ交付ス但不適當品ハ無償ニテ燒却シ醫藥用ニ限リ政府ノ封緘ヲ以テ特ニ卸賣人ヲ定メテ販賣セシム、醫師ノ處方箋又ハ醫師藥業者ノ證書アルニ非サレハ賣買スルコトヲ得サルモノトス

阿片烟ハ支那人ノ密輸入ヲ企ツル者嚴アリト雖モ本邦人ハ之ヲ嗜ム者ナシ其ノ輸入吸食ニ關スル禁制ハ現行刑法第二百三十七條乃至二百四十二條ニ規定ス而シテ新領地臺灣ニ於テモ亦三十年一月律令第

病院敷地ノ免租

二號ヲ以テ阿片令ヲ發布シ嚴格ノ制ヲ立テ只土人ノ老癯者ニ限り鑑札ヲ與ヘテ之ヲ特許シ烟膏ハ總督府ニ於テ製造シ之ヲ專賣ス

病院

明治八年九月以來公立病院ノ敷地ハ租稅ヲ免除ス同九年三月ヨリ公立病院ノ設立ハ内務省ニ出願スルノ制ナリシカ同二十年十二月之ヲ廢シ今ハ地方廳ヲシテ便宜之カ取締ヲ爲サシム傳染病院ノ規定ハ同三十年四月法律第三十六號傳染病豫防法中ニ在リ

其ノ他產婆ハ地方廳ニ於テ取締ヲ爲サシメ看護人等ニ對シテハ未タ何等ノ規定ナシ

農工商

農業

害蟲驅除

### 第四章 農工商

#### 第一節 農業

##### 害蟲驅除

害蟲豫防驅除ニ付キ一般ノ規定ヲ設ケシハ明治十八年ニシテ地方廳ニ準則ヲ與ヘテ田畑蟲害豫防規則ヲ設ケ主務省ノ認可ヲ得セシムルコト、セリ降テ明治二十九年三月法律第十七號ヲ以テ蟲害豫防法ヲ制定ス是レ即チ現行法ナリ

水利

水利

水利ニ關シテハ古來各地方ニ種々ノ慣例アリ又地方行政廳ノ規定スルモノ亦少カラスト雖モ一般ノ規定ハ明治二十三年六月法律第四十六號ノ水利組合條例ニシテ即チ現行法タリ其ノ規定ノ要點ヲ擧クレハ水利組合ハ水利土功ニ關スル事業ニシテ市町村ノ事業トスルニ不

便ナル場合ニ特ニ設クル公共團體ニシテ其ノ種類ニニアリ一ハ普通水利組合ニシテ專ラ土地ノ利益ヲ増進スル水利事業ヲ行ヒ組合事業ノ爲メ利益ヲ受クル土地ヲ組合區域トシ其ノ土地所有者ヲ組合員トス他ハ水害豫防組合ニシテ水害ヲ受クヘキ土地ヲ區域トシ其ノ區域内ノ土地家屋ノ所有者ヲ組合員トス普通水利組合ノ設置ハ組合員タルヲ得ヘキ者五名以上ノ請願又ハ關係地ノ郡市町村長ノ具狀アルトキハ府縣知事其ノ設置ヲ認メ之ヲ廢スルニハ組合會之ヲ議決シ知事ノ認可ヲ要ス又水害豫防組合ハ知事ニ於テ此等ノ者ノ意見ヲ聞テ自ラ設置廢止ヲ決ス

組合ノ機關ハ組合會ト管理者及ヒ其ノ補助機關トス組合會ハ組合員ヨリ選舉セル議員ヲ以テ組織シ管理者ハ組合區域ノ郡長又ハ市町村長一人ヲ以テ之ニ充ツ兩者ノ權限及ヒ關係ハ恰モ町村會ト町村長トニ類シ又組合ノ財政及ヒ監督ニ關スル規定モ市町村制ト大同小異ナ

養蠶ノ獎勵及  
ヒ取締

レハ此ニ述ヘス  
養蠶

維新後政府カ最モ力ヲ盡シテ獎勵セシハ養蠶製糸ニ在リ明治元年ヨ  
リ七年ニ至ルマテ蠶種ノ濫造ヲ防キ養蠶方法ノ改良ヲ計ル爲メ數多  
ノ取締規則ヲ定メ獎勵金ノ制度官設製絲場傳習規則蠶種製造組合條  
例等ヲ設ケシカ其ノ後民間ノ蠶業漸ク改良發達シ官ノ保護干涉ヲ要  
スル必要自ラ薄ラキタルヲ以テ十一年ニ至リ此等ノ制度ハ凡テ廢止  
ニ歸セリ明治十九年八月農商務省令第九號ヲ以テ蠶種微粒子病豫防  
ノ爲メ蠶種検査規則ヲ定メ同二十九年三月勅令第二十八號ヲ以テ蠶  
種講習所ヲ設ケ蠶業ニ關スル傳習及ヒ蠶種配布等ノコトヲ管掌セシ  
メ同三十年三月法律第十號ヲ以テ蠶種検査法ヲ制定ス是レ即チ現行  
法ナリ又同二十九年六月法律第三十二號ヲ以テ生糸検査所法ヲ制定  
シテ検査所ヲ横濱及ヒ神戸ニ置キ内外人ヲ問ハス本邦製産ノ生糸ヲ

耕地整理法ノ創  
定

賣買スル者ニ對シ無料ニテ検査スルコト、セリ  
耕地ノ整理

明治三十二年三月法律第八十二號ヲ以テ耕地整理法ヲ制定ス耕地整  
理トハ耕地ノ利用ヲ増進スル目的ヲ以テ其ノ所有者共同シテ土地ノ  
交換、分合、區畫形狀ノ變更及ヒ道路畦畔又ハ溝渠ノ變更廢置ヲ爲スコ  
トヲ云ヒ、耕地整理ヲ發起スルニハ整理地域内ノ土地所有者三分ノ二  
以上之ニ同意シ且ツ同意者ノ整理地域内ニ有スル土地ノ面積及ヒ其  
ノ地價カ整理地ノ總面積及ヒ總地價ノ三分ノ二以上ナラサルヘカラ  
ス、但シ御料地、國有地、建物アル宅地、鐵道用地等ハ其ノ所有者ノ承諾ナ  
ケレハ之ヲ整理地域ニ編入スルコトヲ得ス、而シテ發起人ハ其ノ設計  
ニ關スル一定ノ事項ヲ記載シタル設計書及ヒ整理總會ノ招集、議事方  
法、整理委員ノ數及ヒ其ノ職務執行方法、整理費用並ニ夫役ノ賦課徵收  
方法等ヲ定メタル假規約ヲ作り、地方長官ヲ經由シテ之ヲ農商務大臣

ニ差出シ發起ノ認可ヲ申請スルヲ要ス、發起ノ認可ヲ得タルトキハ發起人ハ速ニ創業總會ヲ招集シテ設計書及ヒ規約ヲ議決シ、之ヲ農商務大臣ニ差出タシテ整理施行ノ認可ヲ申請スヘシ、而シテ其ノ認可ヲ得タルトキハ發起人ハ創業總會ヲ招集シテ整理委員ヲ互選スヘシ、此ノ手續ヲ終リタル後ハ土地整理ノ事務ハ整理委員カ規約ニ從ヒ整理總會ノ決議ニ基キテ之ヲ執行スルノ責ニ任シ農商務大臣ハ數多ノ事項ニ付テ之カ監督ヲ行フ、創業及ヒ整理總會ハ御料地、國有地ヲ除キ整理地域内ニ土地ヲ所有スル者ノ集會ニシテ其ノ決議方法ハ整理發起ノ場合ト同一ノ條件ヲ有スル多數決ニ依ルモノトス、第三權利者ハ整理ノ施行ニ付テ異議ヲ述フルヲ得ス、整理ノ施行ニ依リテ得タル換地ハ從前ノ土地ニ關スル物權、債權ノ目的トナルコトヲ通則トスレトモ第三權利者ニ損害ヲ蒙ラシメサル爲メ種々ノ規定ヲ設ケ又規約ニ從ヒ整理費用ヲ完納セサル者アルトキハ市町村長ハ整理委員ノ請求ニ因

牧畜

獸疫豫防

リ市町村稅徵收方法ニ準シテ之ヲ徵收スルモノトス

第二節 牧畜

獸疫豫防

獸疫豫防ニ關スル一般ノ規定ヲ設ケシハ明治四年六月太政官布告第百七十六號ヲ以テ始メトス、即チ獸疫流行ノ地方ヨリ獸類皮革ノ輸入ヲ禁シ、又禽獸ノ死亡平日ヨリ増加スルトキハ速ニ地方官ニ申告セシメ、病死ノ禽獸ハ必ス燒棄ツヘキコトヲ命ス、明治九年二月内務省乙第二十號ヲ以テ疫牛處分規則ヲ制定ス、此ノ規則ニ依レハ牛疫ノ徵候アルトキハ所有者ヲシテ届出テシメ、病牛ハ凡テ之ヲ撲殺シ一頭三十圓以内ニ於テ賠償ヲ與ヘ、牛疫發生地方ハ一定ノ區域ヲ畫シテ牛ノ交通ヲ遮斷ス、明治十九年九月農商務省令第十一號ヲ以テ從來ノ諸規則ヲ廢シテ更ニ牛馬羊豚ノ傳染病六種ニ關シ獸類傳染病豫防規則ヲ設

ク、  
 明治二十九年三月法律第六十號ヲ以テ更ニ獸疫豫防法ヲ改定シ此ノ法律ヲ適用スヘキ畜類及ヒ獸疫ノ範圍ヲ擴メ地方長官ノ權限ヲ大ニシ又獸疫豫防上必要ト認ムルトキハ健獸ノ検査ヲ行ヒ外國ヨリ獸疫侵入ノ危險アリト認ムルトキハ有病地ヲ經テ輸入セル獸類物品ノ検査ヲ行ヒ若クハ其ノ輸入ヲ停止スルコトヲ得トシタリ  
 獸醫ニ關シテハ明治十八年八月布告第二十八號制定ノ獸醫免許規則同二十三年八月法律第七十六號改正ノ獸醫免許規則アリ蹄鐵工ニ付テハ同二十三年四月法律第三十一號制定ノ蹄鐵工免許規則アリ種畜ノ取締ニ關シテハ從來各地方ニテ之カ規定ヲ設ケシモノアリ政府ハ明治十年十月內務省號外達及ヒ同十五年二月農商務省達第二號ヲ以テ洋種ノ牛馬ヲ人民ニ貸渡シテ牛馬ノ改良ヲ獎勵セシカ同二十二年ニ至リ之ヲ廢止セリ而シテ一般ノ規定ハ明治三十年三月法律第

十二號ヲ以テ制定ノ種牡馬検査法ヲ以テ始メトス

### 第三節 山林

封建時代ニ在リテハ諸藩ノ中特ニ山方役人ヲ置キ熱心ニ山林ヲ愛養セシ者少ナカラス、從テ其ノ山林制度モ頗ル完備ノ域ニ達セシモノアリシカ、維新以來其ノ制弛ミ濫伐ノ弊少ナカラス、今森林ノ一大要部ヲ占ムル官林管理ノ制ハ漸々整備ノ途ニ向ヒシモ民林ニ在リテハ明治七年三月內務省布達甲第三號ヲ以テ山野ニ火入ヲ爲ス者ヲシテ豫メ之ヲ官ニ届出シメ同十七年二月太政官布達第三號ヲ以テ國土保安ニ關スル山林ノ伐採ハ政府之ヲ停止シ得ルコト、シ又明治二十一年三月農商務省訓令第五號ヲ以テ山野火入ニ關シ地方廳ノ設ケヘキ取締規則ノ準則ヲ定メテ、山野火入ヲ豫メ届出テシムルノ外火入ノ時間ヲ晝間風勢ノ穏カナル時ニ限リ、一定ノ防火線ヲ設ケシムルコト、セシ

カ如キ其ノ主ナルモノナリシカ、明治三十年四月法律第四十六號ヲ以テ森林法ヲ制定シテ營林ノ監督、保安林、森林警察、森林刑法等ニ關スル規定ヲ定ム、此ノ法律ニ於ケル營林監督ノ規定ニ依レハ私有林ニシテ荒廢ノ虞アルトキ及ヒ自治體林及ヒ社寺林ニシテ其ノ經濟ノ保續ヲ損シ又ハ荒廢ノ虞アルトキハ主務大臣ハ營林ノ方法ヲ指定シ、之ニ反シテ伐木スルトキハ其ノ伐木跡地ニ造林ヲ命スルコトヲ得、此ノ造林ノ命令ニ從ハサルトキハ政府ハ自カラ造林ヲ行ヒ所有者ヨリ其ノ費用ヲ徵收シ若クハ其ノ造林地ヲ部分林ト爲スコトヲ得、從來ヨリ已ニ無立木又ハ荒廢ニ屬シタル森林ニ對シテモ亦主務大臣ハ前ト同一ノ執行方法ニ由リ期限ヲ定メテ造林ヲ命シ、其ノ造林シタル部分ハ一定年限間地租其ノ他ノ公課ヲ免スルコトヲ得、原野荒蕪地等ニ造林シタル者ニ對シテモ同様ニ公課ヲ免除ス、凡テ森林ヲ開墾セントスル者ハ地方長官ノ許可ヲ要シ、又主務大臣ハ國土保安ニ危害ノ虞アリト認ム

ル個所ハ豫メ指定シテ其ノ開墾ヲ禁止スルコトヲ得、保安林ニ編入スルコトヲ得ヘキ森林ハ流砂、飛砂、水害、風害等ノ防備ニ必要ナルカ又ハ水源涵養、魚付、衛生、風致、航行ニ必要ナル個所タルヲ要シ、之カ編入解除ハ主務大臣カ地方森林會ノ議決ヲ經テ之ヲ決定ス、保安林ノ編入解除ニ直接ノ利害ヲ有スル者ニ於テ之ニ異議アルトキハ地方森林會ノ議決前ニ意見書ヲ提出スルコトヲ得ヘク、又主務大臣ノ決定後一定ノ期間内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得ヘシ、保安林ハ一方ニ於テハ其ノ營林上數多ノ制限ヲ受ケ、又其ノ所有權ヲ徵收セラ、コトアリト雖モ他ノ一方ニ於テハ公課ヲ免除セラレ、又其ノ伐木ノ禁止ニ由リテ生スル直接ノ損害ハ補償ヲ求ムルコトヲ得、此ノ補償ノ費用ハ保安林編入カ政府ノ命令ニ依ルトキハ政府之ヲ負擔シ、利害關係人ノ申請ニ依ルトキハ申請者之ヲ負擔シ、政府ハ其ノ一部ヲ補助スルコトヲ得



森林警察

森林警察ニ關シテハ山野火入ノ制限ノ外、森林内ニ濫リニ火ヲ用フルコトヲ禁シ、又林業者ノ林產物ニ用ユル記號印章ノ取締特ニ伐木造林業者ニ付テハ其ノ帳簿器具等ノ検査ニ關スル規定ヲ設ケ、森林ノ火災蟲害又ハ森林犯罪ヲ覺知シタル者ヲシテ之ヲ官ニ告知スルノ義務ヲ負ハシム、又ハ森林ノ犯罪ニ關シテ從來ノ刑法ノ規定ト著シク異ナル點ハ刑法ハ森林竊盜ニ對シテ重禁錮ヲ科セシカ、森林法ハ之ヲ贓額二倍以下ノ罰金又ハ重禁錮ニ處シ尙ホ竊盜ニシテ犯狀ヲ重カラシムル一定ノ所爲アルトキハ罰金禁錮ヲ併科スルコト、シタル點ニアリ

第四節 狩獵

狩獵取締法ノ沿革

狩獵ヲ爲スハ禁制ノ場所ヲ除ク外自己ノ地内ナルト他人ノ地内ナルトヲ問ハス古來各人ノ自由ニ任セリ明治元年四月妄リニ發砲鳥打等ヲナシ農事ヲ妨クル者ノ取締ヲ爲セリ同三年五月郭内外諸邸宅中ニ

於テ發砲スルヲ禁ス同五年一月布告第二十八號銃砲取締規則六則ヲ以テ銃獵ノ取締ヲ爲ス同六年一月布告第二十五號ヲ以テ鳥獸獵免許規則ヲ定メテ幼者、瘋癲及ヒ規則違反者ニハ免許ヲ與フルヲ得ス、人家ニ接スル地禁獵地等ニハ銃獵スルヲ得ストシ、獵期ハ九月ヨリ翌年三月マテトシタリ其ノ後同年三月布告第一百號同七年十一月布告第一百二十二號同十年十一月布告第十一號等ヲ以テ再三改メラレタリト雖モ、銃獵時間ヲ日出ヨリ日没マテトシ、作物アル他人ノ地内ニ狩獵スルヲ得ス、又土地所有者ハ其ノ地内ニ他人ノ銃獵ヲ有害トスルトキハ其ノ周圍ニ圍ヲ設ケ禁止ノ制札ヲ立ツルヲ得トセシカ如キ其ノ主ナル點ナリ

明治二十五年十月勅令第八十四號ヲ以テ舊法ヲ廢シ狩獵規則ヲ定ム、此ノ法ハ舊法ト頗ル異ナリ宅地外ニ於テ爲ス狩獵ハ銃獵ノ外網撲等ヲ用ユルモノモ許可ヲ要シ、又獵區ノ制ヲ設ケ規定ノ免許料ヲ納メテ

一定ノ地域内ニ於テ獨專狩獵權ヲ與フルヲ得トシ鳥類繁殖及ヒ害蟲除却ノ目的ヲ以テ全ク狩獵スルヲ得サル鳥獸及ヒ或期間狩獵スルヲ得サル鳥獸ノ種類ヲ定ム明治二十八年三月法律第二十號ヲ以テ狩獵法ヲ制定ス是レ即チ現行法ニシテ舊法ト異ナル要點ハ獵區ノ制ヲ變シテ從來一定ノ區域内ニ共同狩獵ヲ爲ス慣習アル者ニ共同獵區ヲ與フルコトヲ得トシ狩獵保護期間内ニ於ケル保護鳥獸ノ販賣ニ關シ制限ヲ設ケ而シテ保護鳥獸ノ種類及ヒ保護期間ハ別ニ主務大臣之ヲ定ムルコト、シタリ

### 第五節 礦業

維新以前ニ在リテハ地中ノ金屬銀銅ノ所有及ヒ探掘權ハ概テ幕府ノ特權トセラレタリ明治元年四月鑛山ノ銅ヲ初メ古銅地銅等大坂銅會所ニ廻送セシメ坑業者私ニ賣捌キ仕用スルヲ禁ス明治二年二月一日

礦業取締法ノ沿革

鑛業者ノ掘取セル鑛物ヲ自由ニ賣買スルコトヲ認メシモ新貨幣鑄造ノ必要ニ由リ同年十一月再ヒ之ヲ禁シテ大藏省ニ買收スルコトヲ定メ明治四年四月以來全ク此ノ禁ヲ解キ五年三月第百號ヲ以テ鑛山心得書ヲ發シテ尋常土石等ノ外地ノ鑛物ハ一切國有タルコトヲ示シ、又此ノ心得書ニ於テ探掘權ハ地方官ノ證印ヲ得テ外國人以外ノ債權者ニ質入スルヲ許シ翌六年七月第二百五十九號布告ヲ以テ日本坑法ヲ制定シ初メテ鑛業行政ノ法律ヲ見ルニ至レリ

明治二十三年九月法律第八十七號ヲ以テ舊法ヲ廢シ鑛業條例ヲ制定ス、是レ即チ現行法ニシテ其ノ規定頗ル精密ナリ、特ニ舊法ヲ改良シタル著シキ點ハ鑛業人ヲシテ監督官廳ノ認可ヲ得タル施業豫算案ニ基キテ施業セシメ鑛業警察ニ關スル規程ヲ密ニシ、特ニ鑛夫ニ對シ契約ノ解除、貸錢支拂、罹災ノ救恤等ノ規定ヲ設ケタルニ在リ、又此ノ法律ニ依リ主務大臣ハ十二時間以上ノ鑛夫就業ノ時間、女工ノ工役ノ種類、十

砂鑛

四歳以下ノ男女職工ノ就業時間及ヒ工役ノ種類ニ關シ鑛夫工役規程ヲ定ムルヲ得ルコトヲ定メタリ

砂鑛

從來砂鑛採取業モ一般鑛業ト區別セザリシカ、明治二十三年九月現行鑛業條例ノ發布セラル、ヤ之ヲ區別シ、二十六年三月法律第十號ヲ以テ砂金砂錫砂鐵ノ採取ニ適用スヘキ砂鑛採取法ヲ制定ス、是レ即チ現行法ナリ

### 第六節 漁業

漁業取締法ノ沿革

漁業ニ關シテハ從來屢、地方廳ニ令シテ各地方ノ狀況ニ從ヒ適宜ノ制ヲ設クヘキコトヲ命シ、近時ニ至リテ漁業ニ關スル地方廳ノ命令ハ主務大臣ニ經伺ノ上施行スヘキコトヲ命シタリト雖モ中央政府ノ發布セル一般ノ規定ハ甚タ少ナシ、今此ニ其ノ主ナルモノヲ擧クレハ明治

十七年五月布告第十六號ヲ以テ北海道ニ於ケル臘虎及ヒ臘鹿ノ獵獲ヲ特許業トシ、北海道廳ヲシテ獵獲ノ時期及ヒ區域ヲ定メ、其ノ取締ヲ爲サシメ、同十九年十二月勅令第八十號ヲ以テ臘虎及ヒ臘鹿ノ生皮ヲ賣却セントスル者ハ取締官吏ノ檢印ヲ受ケシメ、此ノ檢印アルモノ及ヒ外國ニテ獵獲シタルモノハ其ノ國ノ官吏又ハ其ノ國駐在ノ本邦領事ノ證明書ヲ有スルモノニ非サレハ之ヲ國內ニ輸入シ販賣スルヲ得ストシ、明治二十八年三月法律第十號ヲ以テ舊法ヲ廢シ臘鹿臘鹿獸獵法ヲ定メ、該獸ヲ獵獲セントスル者ハ主務大臣ノ免許ヲ要シ、勅令ヲ以テ禁獵ノ時期及ヒ區域ヲ定メ、獵船獵具、獵法ヲ制限シ、牝牡及ヒ年齡ニ由リテ其ノ獵獲ヲ禁スルコトヲ得トシ、軍艦長、警察官吏、收稅官吏ハ當然取締權ヲ有スルモノトセリ

明治三十年四月法律第四十五號ヲ以テ遠洋漁業獎勵法ヲ制定シ、翌年ヨリ十五个年間施行スルコト、セリ

### 第七節 度量衡

度量衡取締法ノ沿革

度量衡ノ制度ハ古ヨリ一定シ其ノ製作販賣モ官ノ許可ヲ得タル者ノ專業トシタリシカ度量衡ニ關スル法律ヲ制定セシハ明治八年八月達第三百三十五號度量衡取締條例ヲ始メトス此ノ法律ハ度量衡ノ基本名稱ヲ一定シ其ノ製作ハ一人一器ニ限リ地方廳ニ於テ人員ヲ限リテ之ヲ許可シ製作人ハ製作ノ外一切ノ修繕及ヒ販賣ヲ兼スルコトヲ得其ノ販賣モ政府ハ人員ヲ限リテ許可ヲ與ヘ一人三器ヲ兼スルコトヲ得セシメ且ツ販賣人ハ一定ノ修繕ヲ爲スコトヲ得製作人ハ政府ヨリ下付セル原器ニ基キ製作シテ一々地方廳ノ檢印ヲ受ケ其ノ價格ハ一定ノ標準ニ據リテ定メ之ヲ地方廳ニ届出テ私ニ高下スルヲ許サス政府ハ隨時検査官ヲ派シテ製作所販賣所及ヒ一般人民營業用ノ度量衡ヲ検査セシムルコトヲ定メタリ其ノ後此ノ規則ハ多少修正ヲ加ヘ明治

二十四年三月法律第三號ヲ以テ前法ヲ廢シ更ニ度量衡法ヲ制定ス是レ即チ現行法ニシテ其ノ改正ノ要點ハ「メートル法」度量衡ヲ認メ原器ノ構造原器副原器ノ保管免許ヲ得タル者ノ身元保證等ニ關スル規定ヲ設ケ製作人ハ一人一器ニ限ルノ制及ヒ價格ヲ制限スルノ規定ヲ廢シタルニ在リ

### 第八節 貨幣

貨幣制度ノ沿革

徳川氏カ海内ヲ統一シテ貨幣制度ヲ立ツルヤ金銀產出地ヲ其ノ所領ニ歸シ貨幣鑄造ノ特權ヲ握リテ金本位ヲ採リ銀貨銅貨モ鑄造セシト雖モ法定貨幣トセス市價ヲ以テ之ヲ流通セリ然ルニ其ノ後屢粗惡ノ貨幣ヲ發行シ特ニ文政天保ノ頃ニ至リ當時世界ニ於ケル金銀比價ヨリモ遙カニ高キ法定比價ヲ有スル數種ノ銀貨ヲ鑄造シテ複本位制ニ變セリ又安政元年米國トノ條約ニ依リテ外國貨幣ヲ同種ノ日本貨幣

ト同量ノ割合ヲ以テ流用シ開港通商後一年間ハ無手数料ニテ外國貨幣ト日本貨幣ト交換スヘキコトヲ定メタルヲ以テ金貨ノ海外ニ流出スルコト夥シク幕府ヘ之ヲ防ク爲ニ新ニ金銀貨幣ヲ改鑄セリ維新後ニ至リテ政府ハ幣制改革ニ著手シ明治四年五月新貨條例ヲ發シテ二五<sup>五</sup>グレイン七二九百位ノ金本位貨及ヒ銀銅ノ補助貨幣ヲ造リ一定ノ量目公差ヲ定メ算則ハ舊來ノ四進一位ヲ改メテ十進一位トシ銀貨銅貨ノ通用制限高ヲ定メ又外國貿易ノ便宜ノ爲メ開港場限り通用スヘキ銀貨ヲ造リ後之ヲ貿易銀ト稱ス政府ハ同時ニ造幣規則ヲ制定シテ一定ノ手数料ヲ以テ人民ノ依頼ニ應シ地金銀又ハ磨損貨幣ヲ本位貨幣ニ鑄造スヘキコトヲ定ム

明治四年五月太政官ヨリ頒布シタル諭告ニ曰ク、皇國往古ヨリ他邦貿易ノ事少ナク貨幣之制度イマタ精密ナラス其品類各種ニシテ其價位モ亦一定セス今其概略ヲ舉ムニハ慶長金アリ享保金アリ文字金アリ

太政官ヨリ貨幣鑄造ニ關スル諭告

大小判金アリ一分金アリ二分金アリ三朱金アリ一分銀アリ一朱銀アリ當百錢アリ大小數種ノ銅錢アリ其他一時通用ノ貨幣ハ枚舉ニ遑アラズ甚シキハ一國一郡限ノ貨幣アリテ今ニ至ルマテ僅ニ其一部ニ通用シ他方ニ流通セサルモノアリカク其品類區々ニシテ方圓大小其價ヲ異ニシ混合雜駁其質ヲ同ウセス抑貨幣ノ眼目タル最目ト性合トニ至リテハ殆ント辨知スヘカラス新舊互ニ雜用シ品位自ラ低下シ其間或ハ賈造ノ幣アリテ竟ニ今日ノ甚シキニ馴致セリ偶良性ノ貨幣ハ徒ラニ富家庫中ノ寶物トナリ或ハ外國ヘ輸出セシモ亦少ナカラス遂ニ諸品換用ノ能力ヲ失ヒ日用便利ノ道ヲ塞キ流通ノ公益殆ント絶エントスルニ至ル實ニコレ天下一般ノ窮厄ニシテ萬民ノ痛心更ニ之ヨリ大ナルモノナシ今其緣由ヲ尋繹スルニ全ク一定ノ價位ナクシテ善惡良否ヲ雜用スルノ舊弊ヨリ生スル事ナリ方今貿易ノ道彌盛ムナル時ニ當リテ舊弊ヲ改メ精良ノ新製ヲ設ケスンハ何ヲモツテ流通ノ道ヲ

開キ富國ノ基ヲ立ンヤ是政府ノ責任ニシテ然モ焦眉ノ急務タリ故ニ去ル明治元戊辰ノ年ヨリ早クソノ功ヲ起シ莫大ノ經費ヲ厭ハヌ大坂ニオイテ新ニ造幣寮ヲ建置シ壯大ナル器械ヲ備ヘ廣ク宇内各國貨幣ノ眞理ヲ察知シ金銀ノ性質量目ヨリ割合ノ差等鑄造ノ方法ニ至ルマテ詳カニ普通ノ制ヲ比較商量シ以テ精密ノ通用貨幣ヲ鑄造シ在來ノ貨幣ニ加ヘテ一般ノ流通ヲ資ケントスルノ都合ヲ謀リ既ニ開寮ノ儀典ヲ完了セリサレトモ前ニ言ヘルコトク區々各種ノ貨幣多クレハ現場諸品ノ價直ヲ錯亂シ萬民ノ迷惑ナルコトナレハ漸々新舊ヲ交換シテ在來ノ通寶ハ悉トク改鑄シ都テ品類ヲ一定セシメントノ御趣意ナリ且貨幣ハ天下萬民ノ通寶タル主旨ニ基キ地金ヲ持參シテ引換ヲ望ムモノヘハ速カニ改鑄シテ通用貨幣ヲ渡スヘシサレハ今人々古來ノ舊習ヲ襲ヒ重代ノ寶物トセル古金銀ノ類モ數年ナラスシテ全ク地金一様ノモノトナルヘケレハ早々交換流通シテ貨幣ノ眞理ヲ失ハサル

様注意スヘキ事肝要ナリ斯ク新タニ造幣寮ヲ設ケシモ偏ニ萬民ノ保護ヲ任スルノ職分ヲ盡スノ外他アルニアラサレハ萬民亦能ク此理ヲ會得シ各ソノ務ヲ勉勵シテ天賦ノ職ヲツクスヘシ仍テ今爰ニ其次第ヲ揭示シ并セテ新貨幣ノ眞形ヲ摹シ其量目品位表ヲ添ヘ且地金引換ヘノ規則等詳細ニ附録シ普ク國內ニ頒布諭告スルモノ也

其ノ後明治十一年十一月ニ至リ開港場ノミニ適用スヘキ貿易銀ヲ一般通用ノ本位貨幣トシテ爲ニ幣制一變再ヒ復本位トナリ兩種貨幣ノ法定比價ハ一ト十六ノ割合ナリ當時巨額ノ不換紙幣流通シ硬貨ハ殆ント流通セザリシカ十九年二月兌換制ヲ回復セシトキモ銀貨ト引換フルコト、シ又中央銀行ノ兌換券モ銀貨ヲ以テ兌換スルニ至リ實際上幣制ハ銀單本位トナレリ

明治三十年三月法律第十六號ヲ以テ貨幣法ヲ發シ本位ヲ改メテ金貨トシ九百位、四「グラム」一六六六ヲ單位トシテ五圓十圓二十圓ノ貨幣ヲ

造リ補助貨ハ銀及ヒ銅ヲ以テシ純分公差量目公差及ヒ通用最輕量目ヲ定メ磨損貨幣ハ無手数料ニテ引換フルコト、セリ

取引所

第九節 取引所

取引所ハ古ヨリ存在シテ盛ニ米穀金銀等ノ取引ヲ爲セシト雖モ之ニ關スル規定ヲ設ケシハ明治七年十月布告第七號株式取引所條例ヲ以テ初メトシ一時此ノ條例ヲ米穀取引所ニ適用シ他ノ商品ノ取引ヲ禁止セシカ明治九年八月布告第五號ヲ以テ別ニ米穀取引所條例ヲ定メ其ノ後此ノ兩條例ハ多少ノ修正ヲ經テ明治二十年五月ニ至ルハテ存立セリ此ノ兩條例ニ依レハ取引所ハ政府ノ許可ヲ得テ設立シタル有限責任ノ株式會社ニシテ其ノ資本金額ノ三分ノ二ハ保證金トシテ政府ニ預ケ入ル、ヲ要ス取引所ニ於テ取引スルコトヲ得ル者ハ丁年以上ノ日本臣民ニシテ取引所ノ承認ヲ得一定ノ身元保證金ヲ之ニ

差入レ且ツ大藏卿ノ許可ヲ得タル仲買人ナラサルハカラス取引ハ現場取引及ヒ三個月以内ノ定期取引ノ二種トシ仲買人ハ其ノ取引ヲ取引所ノ帳簿ニ記入シテ取引金額ニ應スル一定ノ證據金及ヒ手数料ヲ納ムヘシ仲買人ニシテ其ノ取引上ノ債務ヲ盡サ、ルトキハ取引所ハ身元金及ヒ證據金ヲ沒收シテ自カラ取引ヲ結了スルノ責ニ任ス明治二十年五月勅令第十一號ヲ以テ制定ノ取引所法ハ取引所ヲ以テ其ノ會員ノ相會シテ取引スル所トシ取引所ニ仲買人ヲ置クト雖モ仲買人ハ會員タラサルヘカラス而シテ一定ノ資格ヲ有スル商人ハ身元保證金ヲ納メテ當然其ノ會員タルコトヲ得ヘシ取引所ニテ取引シタル相場ハ公定相場トシ又取引所カ其ノ取引ニ付テ下シタル仲裁ノ決定ハ法律上ノ見解ニ關スルモノ、外ハ裁判所ニ上訴スルヲ得ス主務大臣ハ取引所ノ取引カ法令ニ反シ又ハ公安ヲ害スト認ムルトキハ取引ヲ禁止又ハ停止シ又必要ト認ムルトキハ取引所ノ規約ヲ改正セシ

メ、其ノ決議及ヒ處分ヲ取消スコトヲ得トシタリ、明治二十六年三月法律第五號ヲ以テ更ニ取引所法ヲ改定ス是レ即チ現行法ニシテ會員組織及ヒ株式會社組織ノ二種ノ制度ヲ認メ、其ノ設立ハ一地域内ニ一箇所ノ外許可セス、取引ノ種類ヲ五日又ハ百五十日以内ニ於テ當事者ノ約定期限ニ由ルモノ及ヒ三個月以内ノ限月取引ノ三種トシ、其ノ他兩種ノ取引所ニ關シテ從來法律ノ缺漏ヲ補フテ詳密ノ規定ヲ設ケタリ、明治三十二年三月法律第五十八號ヲ以テ外國人モ取引所ノ株主タルコトヲ許セリ是レ新條約ニ於テ外國人ノ株式取得ヲ認メタル結果ナリ

### 第十節 銀行

我國ニテハ古ヨリ爲替座兩替店等ノ名義ヲ以テ個人ノ銀行類似ノ業ヲ營ム者アリ、又維新後ニ至リ八個ノ紙幣發行權ヲ有スル銀行設立セ

銀行取締法ノ沿革

ラレシモ銀行ニ關スル一般ノ規定ヲ見ルニ至リシハ明治五年十一月第三百四十九號布告國立銀行條例ヲ初メトス、此ノ條例ニ依リ銀行業ヲ營マントスル者ハ凡テ官ノ認可ヲ要シ、又此ノ條例規定ニ從テ國立銀行トスルニ非サレハ紙幣及ヒ一切ノ手形ヲ發行スルコトヲ得ストシタルヲ以テ國立銀行以外ノモノハ殆ント跡ヲ絶ツニ至レリ、而シテ國立銀行ハ株式組織ニシテ之ヲ設立セントスル者ハ政府ノ認可ヲ得テ其ノ資本金額ノ十分ノ六ニ相當スル公債證書ヲ政府ニ預ケ入レ、同額ノ紙幣ノ下付ヲ受ケ、之ヲ發行スルトキハ發行額ノ三分ノ二ハ常ニ硬貨ヲ以テ其ノ引換ノ準備トシ、若シ國立銀行ニシテ引換ノ義務ヲ盡シ能ハサルトキハ、政府ハ其ノ預ケ入レタル公債證書ヲ沒收シ、テ自カラ引換ヲ爲ス、國立銀行ハ貸付ヲ爲スニ方リ一口ノ金額資本金ノ十分ノ一ニ超ユルヲ得サルヲ原則トシ、預金ノ二割五歩ハ常ニ其ノ引出準備トシテ貯ヘサルヘカラス、又國立銀行ハ大藏卿ノ命令ニ由リ金庫事



務ヲ執ラサルヘカラストシタリ、明治九年八月布告第百六號ヲ以テ此ノ條例ヲ改定セラレ、國立銀行ノ紙幣發行額ハ資本金ノ十分ノ八マテトシ紙幣引換準備ハ發行額ノ四分ノ一ノ硬貨又ハ紙幣ヲ以テスルヲ得、但シ主務卿ハ新ニ國立銀行ノ設立ヲ願フトキハ其ノ資本額ヲ減シテ願ハシメ又ハ許可セサルコトヲ得トシタリ、蓋シ此ノ改正ヲ來シタルハ當時巨額ノ不換紙幣流通セシカ故ニ硬貨ヲ以テ紙幣ノ引換ヲ爲サシムルコト難キト、條例ノ改正ニ由リ銀行ノ設立ヲ願フ者非常ニ増加セシトニ由ル、又國立銀行ハ設立ノ日ヨリ二十年ヲ以テ營業滿期トシ滿期後更ニ國立銀行トシテ繼續ヲ許スコトヲ得トセシヲ改メテ、期限後ハ私立銀行トシテ繼續ヲ許スコトヲ得ルモ國立銀行トシテ紙幣發行ノ特權ヲ有スルコトヲ得ストシ、明治十三年後ハ實際其ノ設立ヲ許可セザリシヲ以テ今ヤ全ク國立銀行ノ消滅ヲ見ルニ至レリ、普通銀行ノ外ニ日本銀行(兌換券ヲ發行スル我國ノ中央銀行ニテ明治十五年

六月布告第三十二號日本銀行條例ニ依リテ成立シ、制限屈伸主義ニ依リテ一億二千萬圓以内ニ保證準備ノ發行ヲ爲スコトヲ得、橫濱正金銀行(外國貿易ニ關スル主タル金融機關ニシテ二十年七月勅令第二十九號橫濱正金銀行條例ニ依リテ成立ス)日本勸業銀行及ヒ農工銀行(農工業ノ改良發達ヲ資クルカ爲ニ設ケタル金融機關ナリ、而シテ前者ハ中央銀行ニシテ二十九年四月法律第八十二號日本勸業銀行法ニ依リテ成立シ、後者ハ地方銀行ニシテ同年同月法律第八十三號農工銀行法ニ依リテ成立セリ、兩者共ニ一定額以内ニ債券ヲ發行スルコトヲ得)貯蓄銀行(積利ノ方法ヲ以テ公衆ノ爲ニ預金事業ヲ營ム特種ノ銀行ニシテ二十三年法律第七十三號ニ依リテ成立ス)アリ、此ノ外尙ホ臺灣ニハ臺灣銀行(臺灣ニ於テ銀貨兌換券ヲ發行スル銀行ニシテ三十年法律第三十八號臺灣銀行法ニ依リテ成立シ、日本銀行ト同シク制限屈伸主義ニ依リ五百萬圓以内ニ保證準備ノ發行ヲ爲スコトヲ得)北海道ニ拓殖銀

行(北海道ノ拓殖事業ニ資本ヲ供給スルコトヲ目的トスル銀行ニシテ三十二年二月法律第七十六號ニ依リテ成立シ一定額ヲ限リ債券ヲ發行スルコトヲ得)アリ、各其ノ法律ニ從ヒテ業務ヲ營メリ

### 第十一節 同業組合

同業組合

同業組合ノ制ハ封建時代ニ在リテハ徳川氏ノ直轄領タル都會ノ地ニ最モ盛ニ行ハレ、諸藩ニ於テモ亦之ニ倣ヒシモノ少ナカラス、而シテ其ノ制度ノ特色ハ特權主義ナルニ在リ、即チ當時重要ノ商業ハ官ノ特許ヲ要シ、特許商人ハ組合ヲ立テ相團結シ、内ニ對シテハ同業者ノ取締ヲ行ヒ、外ニ對シテハ其ノ特權ヲ利用シ、特ニ官ノ特許ヲ得テ新ニ同業者ヲラントスル者ニ對シ組合加入金ヲ徵シテ、成ルヘク同業者ノ數ヲ制限シタリ、而シテ政府ハ組合ニ是等ノ特權ヲ與フルト同時ニ税金ヲ徵收シテ少ナカラサル財源ヲ得タリ

維新ノ改革ニ伴ヒ是等特權的制度ハ凡テ廢止ニ歸シ一時ハ全ク自由ニ放任セシカ、漸々組合ノ必要ヲ感スルニ至リ再ヒ組合ノ發生ヲ見ルニ至レリ、然レトモ當初ハ地方長官ノ適宜處分ニ一任シ、一般ニ通スルノ規定ナカリシカ、明治十七年十一月農商務省達第三十七號ヲ以テ訓令ヲ發シ地方長官カ組合ヲ認許スルニ當リテ準據スヘキ標準ヲ示シ且ツ認許ノ都度之ヲ主務省ニ届出テシムルコト、セリ  
尙ホ政府ハ茶業組合、蠶糸業組合、漁業組合ニ關シテ特別ノ訓令ヲ發シ、二十年十二月農商務省令第四號ヲ以テ更ニ茶業組合法ヲ制定シテ茶業ノ盛ナル地方ニ適用シ、三十年四月法律第四十七號ヲ以テ重要輸出品組合法ヲ制定シ、此ノ法律ハ同業者ニシテ必要ト認ムルトキハ輸出品外ノ營業ニモ準用スルコトヲ得トシタリ、

交通

### 第五章 交通

#### 第一節 郵便

郵便制度ノ沿革

維新以前ニ在リテ幕府及ヒ諸侯ノ通信ニハ特別ノ機關ヲ設ケ、一般人ノ通信モ之ニ托スルコトアリシカ別ニ私ノ營業トシ或ル主要ナル市府ノ間ニハ定期ニ私人ノ通信ヲ運送スル者アリキ、明治元年九月驛遞規則ヲ定ム、同三年三月驛遞法ヲ改正シ郵傳規則等ヲ定ム、四年一月郵便切手ノ發行ヲ令ス又郵便開設ヲ以テ繼立場驛々取扱規則ヲ定メ各地方官ニ令シテ各驛書狀ノ遞傳及ヒ切手賣捌所等ノコトヲ監督セシム、又郵便書狀差出人ノ心得書及ヒ各地時間貸錢表(里程ノ遠近ニ)ヲ頒布ス是ヲ公私通信便法開設ノ創業トス、五年三月郵便規則並差立方規則ヲ定メ新聞紙雜誌書籍見本品書留郵便ノ差出方及ヒ官廳ニ宛タル公益ニ關スル建白又ハ願書等開封ノモノハ無料トシ貨幣封入書狀

有機物、危險物等ヲ郵便禁制品トシ、外國ニ送ル郵便ニシテ其ノ外國文字ヲ以テ名宛ヲ書スル能ハサル者ノ爲メ其ノ送達ヲ願出ツヘキ手續等ヲ定メ、又信書送達業ヲ國家ノ專業トス、六年三月又新ニ郵便規則ヲ設ケ國內ノ郵便稅ハ距離ノ遠近ニ拘ハラヌ目方ノ輕重ニ應シテ額ヲ定メ、郵便局留置書狀、金子入書狀、私書函、沒書ノ公示方法等ヲ定メ、同時ニ郵便犯罪罰則ヲ設ケ、大藏司法兩卿ハ一般ノ信書ヲ驛遞頭ハ沒書ヲ開封スルノ權アリトシタリ、同年十一月郵便端書及ヒ封裝ヲ發行シ、七年九月郵便爲替規則ヲ設ケ、同年十二月貯金預リ規則ヲ定ム、同年六月米國トノ郵便交換條約ヲ締結シ、同十年六月萬國郵便條約加盟ノ公布ヲ爲シ、明治十五年十二月布告第五十九號ヲ以テ從來ノ諸法ヲ綜合修正シテ郵便條例ヲ設ク是レ即チ現行法ニシテ何人モ信書ノ秘密ヲ侵スヲ得サルコトヲ定ム、此ノ點ハ憲法ノ制定ニ由リ更ニ確認セラレタリ、明治二十五年六月法律第二號ヲ以テ小包郵便法ヲ新設シ、小包郵便

物ノ毀損紛失ニ付テハ不可抗力、差出人ノ過失等ニ由ルノ外一定ノ範圍内ニ於テ政府ニ賠償ノ責任アリトシタリ

### 第二節 電信

電信事務ノ沿革

我國ニ於テ電信ノ初メテ開設セラレシハ明治二年十一月ノ官設線ニシテ、爾來官設線ハ漸々國內ニ擴張セラレ、十二年十月ニ至リ萬國電信條約ニ加盟セリ今電信ニ關スル法令ノ沿革ヲ觀ルニ明治五年三月距離ト音信字數トニ應シテ金額ヲ異ニスル電信料ヲ定メ、六年八月電信取扱規則ヲ制定シテ、追尾、同文、照校、返信料前拂電報等ノ取扱ヲ定メ、電信取扱ノ過失ヨリ損害ヲ生スルトキハ電信料ヲ還付シ、又受信人ニ發信原文ト對照ヲ請フノ權ヲ與ヘタリ、七年、九月日本帝國電信條例ヲ以テ電信事務ヲ妨害スルノ罪ヲ定メ、同年八月私設電信規則ヲ設ケ官設線未開ノ地方ニ於テハ私設營業ヲ許シ、私線ハ必ス便宜ノ地ニ於テ官

線ニ接続スヘキコトヲ命ス、十一年三月海外電機通信ハ萬國電信公法ニ依ラシム、十二年五月電信取扱規則ヲ改定シ受信電報書留電報等ノ取扱ヲ設ケ、電報ノ要旨ヲ祕密ニシ送達ヲ迅速ニスト雖モ國法ニ反シ秩序ヲ害スト認ムル電報ヲ受理セサルコトヲ規定ス、十三年三月布告第九號ヲ以テ電信萬國公法改正ヲ公布ス、十六年二月布告第五號ヲ以テ水底電信線路ニ於テ投錨漁業採藻等ノ禁ヲ犯ス者ノ罰例ヲ定ム、十八年五月布告第八號ヲ以テ舊法ヲ廢シ電信條例ヲ制定ス、是レ即チ現行法ニシテ同字數ノ電信料ハ一市内ヲ除ク外里程ノ遠近ニ拘ラス全國等一トシ、電信局長ハ私報ニ用フル暗號ノ說明ヲ求ムルノ權アリトシ、私設電線ハ他人ノ爲ニ通信ヲ爲スコトヲ得ス、電信事務ヲ奉スル者電報ノ旨意ヲ漏泄シタルトキハ一定ノ刑ニ處スルコトヲ定メタリ、明治二十一年十一月勅令第七十八號ヲ以テ逕信大臣必要ト認ムルトキハ、一定ノ手数料ヲ交付シテ官設又ハ私設鐵道所屬ノ電信電話線ヲ

公衆ノ通信ニ供用セシムルヲ得トシ、二十七年六月法律第五號ヲ以テ軍用電信法ヲ設ケ、軍用電線ハ最寄私設ノ電信取扱所ニ連接シ、又私設電線ノ柱木ニ添架スルヲ得、事變演習ノ際遊動軍用電線ヲ建設スル爲ニ、徵發令ニ依リ民有ノ營造物ヲ徵用シテ之ニ必要ノ工事ヲ施スコトヲ得ルコトヲ定ム

電話線ハ明治二十三年八月法律第五十八號ヲ以テ建設條例ヲ定メ、政府之ヲ架設シ、人民ハ一定ノ使用料ヲ以テ電話交換ニ加入シ及ヒ電話所ニ於テ電話ヲ使用スルコトヲ得トセリ

### 第三節 道路

#### 道路行政ノ沿革

道路行政ハ主トシテ地方行政廳ノ掌ル所ニシテ各地方ノ慣例及ヒ地方官廳ノ制定スル法規ニ依ルモノ多ク、其ノ一般ニ亘ル規定ヲ舉クレハ明治四年十二月人民自費ヲ以テ道路ヲ開キ橋梁ヲ架スル者ニ對シ

地方行政廳ハ相當ノ制限内ニ於テ通行錢ノ徵收ヲ許ルスコトヲ得ト定メ、又時々ノ法令ヲ以テ警察官、軍隊郵便電信配達人等ニ對シテ通行料ヲ徵收スルコトヲ得サルコトヲ定ム、明治五年十月布告第三百二十五號道路掃除法ヲ設ケテ沿道市町村ニ道路整理ニ關スル義務ヲ負ハシメ、翌年八月道路ノ等級ヲ三等ニ分チ其ノ修築維持ノ費用負擔及ヒ工事ニ關スル地方官ノ權限ヲ定メ、明治九年六月太政官達第六十號ヲ以テ更ニ線路重要ノ度ニ應シ道路ヲ國道、縣道、里道ノ三種トシテ各之ヲ三等ニ分チ、各道路ノ幅員ヲ定ム、同十八年一月太政官達第一號ヲ以テ國道ノ等級ヲ廢シ更ニ其ノ幅員ヲ定ム、同二十年七月勅令第二十八號ヲ以テ東京ヨリ鎮守府ニ鎮守府ヨリ各師團ニ達スル道路ヲ國道ニ編入ス、我國ノ首府タル東京市ノ市區改正ニ關シテハ明治二十一年八月勅令第六十二號ヲ以テ東京市區改正條例ヲ制定シ市區改正委員會ヲ組織シテ內務大臣ノ監督ノ下ニ市區改正事業ヲ議決セシメ東京府

知事之ヲ執行シ其ノ費用ニ充ツル爲メ特別ノ資金ヲ設ケ又五十年以  
内ノ公債ヲ募集シテ著々其ノ歩ヲ進メツ、アリ

#### 第四節 鐵道

鐵道制度ノ沿革

鐵道ノ初メテ我國ニ敷設セラレシハ明治二年ヨリ著手シ五年ニ成功  
セル東京横濱間ノ官設線ニシテ政府ハ五年二月布告第六十一號ヲ以  
テ鐵道略則ヲ制定シ同年五月布告第四百十六號ヲ以テ前令ニ改正ヲ  
加ヘ旅客荷物ノ取扱及ヒ鐵道警察ニ關スル規定ヲ設ケ同六年三月布  
告第一百號ヲ以テ鐵道犯罪罰例ヲ定メ十六年七月布告第三十三號ヲ  
以テ略則及ヒ罰例ハ私設鐵道ニモ一般ニ適用スルコト、シ其ノ後二  
十年五月勅令第十二號發布ノ私設鐵道條例ニ依リ變更セラレシ部分  
ノ外ハ今尙ホ效力ヲ有ス左ニ其ノ大要ヲ摘記スレハ鐵道ハ旅客及ヒ  
荷物ノ運送ノ請求ニ應スルノ義務アリ運賃ノ變更ヲ爲サントセハ二

週日前ニ之ヲ公告セサルヘカラス荷物ノ毀損紛失ニ付テハ手荷物及  
ヒ駄類ノ場合ニハ一定ノ金額以内ニ於テ賠償シ證券其ノ他一定ノ高  
價物ハ荷主カ其ノ品質及ヒ價格ヲ告ケテ増賃金ヲ拂ヒタルニ非サレ  
ハ賠償ノ責ナシトセリ

明治二十年五月制定セラレタル私設鐵道條例ノ要點ヲ舉クレハ鐵道  
ヲ敷設シテ運送業ヲ營ムコトヲ得ルモノハ政府ノ許可ヲ得タル株式  
會社ニ限り軌道ノ副員ハ特許ヲ得タルモノ、外ハ三呎六吋トシ工事  
ハ政府ノ監督ヲ受ケ完全ト認メサレハ開業免許ヲ與ヘス鐵道用地ニ  
必要ノ土地ハ公用徵收法ニ依リ會社ニ下付セラル政府ハ軌道車輛等  
ヲ隨時検査シテ危險ト認ムレハ改築修理ヲ命シ從ハサレハ營業ヲ停  
止ス又條約定款ニ違反ノ行爲アルトキハ會社ノ役員ヲ改選セシメ若  
クハ政府自ラ之ヲ運轉スルコトヲ得旅客荷物ノ運賃額及ヒ運輸規程  
ハ政府ノ認可ヲ受ケタルモノヲ以テシ下等旅客運賃ハ一哩一錢五厘

ノ割合ヲ超過スルヲ得ス、又此ノ範圍内ニ於テ運賃ノ増額ヲナスニハ少クトモ二週日前ニ之ヲ公示スヘシ、鐵道會社ハ政府ノ郵便及ヒ電信ノ送達ヲ爲シ、又此等交通行政ノ爲ニ其ノ設備物ノ一部ヲ無償ニテ使用ニ供シ、一定ノ官吏及ヒ公用物件ニ對シテハ無料、又ハ減額ノ送達ヲ爲シ、軍事上必要ト認ムル設備ハ實費ヲ與ヘ之ヲ作ラシム、政府ハ營業期限アル鐵道ハ滿期後、其ノ他ハ免狀下付ノ日ヨリ二十五年ノ後ハ鐵道及ヒ附屬物件ヲ買上ルノ權利ヲ有シ、買上價格ハ前五年間平均ノ株式價格ヲ以テ定ム。

明治二十五年六月法律第四號ヲ以テ鐵道敷設法ヲ發シ、全國各地方ニ於ケル重要ノ線路ヲ一定シ、此ノ線路ニ於ケル鐵道ハ議會ノ協賛ヲ經テ公債ヲ募集シ、政府自ラ之ヲ敷設シ、此ノ豫定線ニ於テ既成ノ私設鐵道アルトキハ議會ノ協賛ヲ經テ買收シ、又此ノ豫定線ニ私設鐵道ヲ許可スルニモ議會ノ協賛ヲ經ヘキコトヲ定メタリ。

河川ノ修理

第五節 河川

河川ヲ修メ水理ヲ調フルハ國土保安ノ爲メ、就中農業上ノ關係ニ由リ古來頗ル力ヲ盡シ、封建時代ニ於テハ主要ナル河川ハ幕府ノ費用ヲ以テ之ヲ修理セシコト多ク、各藩ニ於テモ其ノ領内ノ河川ヲ修メ、一地方ニ關係スルモノハ其ノ地方人民ノ負擔ヲ以テ修理シ、人民ハ之カ爲メ臨時ニ費用ノ徵收夫役ノ徵發ヲ受クルコト多カリシ、維新後モ河川ノ管理ハ一ニ地方廳ノ權限ニ屬シ、明治六年八月河川ヲ三級ニ分チテ其ノ經費ノ中央國庫ト地方稅トノ負擔比例ヲ定メシカ、其ノ後此ノ規定ハ廢セラレ、一般ニ地方稅ノ負擔トシテ國庫ヨリ臨機補助ヲ與フルコト、シ、又一個人ニシテ官ノ許可ヲ得テ河川ヲ修理シ、通過料ヲ徵收スルコトヲ得タリ、此ノ如ク河川ハ各地方廳之ヲ管理シ、其ノ行政モ亦區區ナリシカ、明治二十九年四月法律第七十一號ヲ以テ河川法ヲ制定ス。

ルニ至レリ此ノ河川法ハ主務大臣カ公共ノ利害ニ重大ノ關係アリト認定シタル河川ニ適用スヘキモノニシテ河川ノ管理ハ地方行政廳ニ屬スルヲ原則トシ只其ノ利害ノ關係他府縣ニ及フモノハ主務大臣之ヲ管理ス、河川ノ特別使用ヲ爲スニハ行政廳ノ許可ヲ要シ、河川ノ危險ヲ防キ若クハ之ニ工事ヲ施コス爲メ必要ナルトキハ土地ノ使用、諸材料ノ徵收、夫役ノ課賦及ヒ其ノ賠償費用等ニ付キ沿岸ノ土地所有者住民及ヒ公共團體ハ一定ノ負擔ヲ爲サ、ルヘカラス、此ノ外本法ニ依リ河川行政費ニ付キ地方各團體間ノ分擔ノ割合及ヒ國庫ノ補助ニ關スル規定ヲ設ケタリ

砂防

砂防行政ノ制定

砂防行政ハ從來各地方ニ於テ山林及ヒ河川行政ニ伴フテ施行シ來リシカ、明治三十年三月法律第二十九號ヲ以テ別ニ砂防法ヲ制定ス、本法ニ依レハ砂防設備ヲ要スル土地又ハ砂防ノ爲メ伐木、開墾等一定ノ行

爲ヲ禁止若クハ制限スヘキ土地ハ主務大臣之ヲ指定シ、此ノ指定地内ニ於ケル砂防行政ハ一般ニ地方行政廳ニ屬シ只其ノ利害ノ關スル所一府縣ニ止マラサル場合ニハ主務大臣ノ直轄トス、尙ホ本法ニ於テ砂防工事ノ爲メ必要ナル土地ノ使用、材料ノ徵收及ヒ其ノ賠償地方團體及ヒ國庫ノ砂防行政費ノ負擔ニ關スル規定ヲ設ケタリ

第六節 領海

港 水先案内 航路標識

港

幕府カ領國ノ主義ヲ採ルヤ長崎港ニ於テ一定ノ數ヲ限リ和蘭及ヒ支那船舶ノ出入ヲ許スノ外、一般ノ港ハ外國船ノ出入ヲ許サス、然ルニ其ノ後各國ト通商條約ヲ締結シテ五個ノ港ヲ開キ、外國貿易ヲ爲ス内外船ノ出入ハ凡テ此ノ港ヲ經山セシメシカ、明治二十二年七月法律第二十號ヲ以テ特別輸出港規則ヲ設ケ一定ノ港ヨリハ日本臣民カ石灰殼

開港通商條約ノ締結

領海



類等ノ貨物ヲ輸出スルヲ得ルコト、シ、其ノ後數多ノ特別輸出港ヲ開設セリ、又明治二十三年一月法律第二號ヲ以テ軍港要港ヲ設ケ、其ノ區域内ニ出入スルニハ海軍大臣ノ定ムル軍港要港規則ノ制限ニ從ハサルヘカラス

水先案内

水先案内

水先人ニ關スル規定ヲ設ケシハ明治九年十二月布告第百五十四號水先免狀規則ヲ始トス、法ノ指定スル一定ノ區域ニ於テ西洋形船舶ノ水先業ヲ爲ス者ハ一定ノ經歷ヲ有シ且ツ一定ノ試験ヲ經テ免狀ヲ得タル者ニ限ル其ノ試験ニハ内外人共ニ之ニ應スルコトヲ得ヘク、外國人ニシテ水先人タル場合ニハ其ノ職務ノ爲メ自由ニ海陸ヲ旅行シ得ヘシ、水先船ニハ一定ノ表章ヲ施サ、ルヘカラス、主務卿ハ水先人カ其ノ職務ヲ怠リ又ハ職務ニ堪ヘスト認ムル一定ノ事由アルトキハ之ヲ審問シテ其ノ免狀行使ヲ停止又ハ禁止スルコトヲ得トセリ、降テ明治十

航路標識

航路標識

一年十二月布告第三十七號ヲ以テ前法ヲ改定シ水先料最高額ヲ定メ、免狀ヲ得タル水先人ハ免狀ヲ得サル者ニ其ノ職務ヲ讓ラシムルノ權アリ、又船舶ヨリ一定ノ信號ヲ爲シテ水先ヲ要求スルトキハ水先人ハ其ノ需メニ應セサルヘカラストセリ、明治三十二年三月法律第六十三號ヲ以テ水先法ヲ公布ス、其ノ規定頗ル詳密ニシテ改正ノ重ナル點ヲ舉クレハ水先人ハ水先免狀ヲ有スル者ニ限り、水先免狀ヲ得ルニハ帝國臣民ニシテ一定ノ試験ニ合格シ且ツ年齡健康等ニ付キ一定ノ條件ヲ要スルコト、シ、水先人カ其ノ業務ヲ行フニ付キ種々ノ規定ヲ設ケ、一定ノ場合ニハ海員審判所ハ海員懲戒法ヲ準用シテ水先人ヲ懲戒スルコト、シ、其ノ他水先人ニ對スル罰則ヲ詳定セリ

航路標識ハ舊來主要ノ場所ニハ政府自カラ之ヲ設置シ來リシカ、往々人民ノ私設ニ係ルモノモ存セリ、明治五年十月内外船ノ航路及ヒ開港

場以外ノ地ニ於テハ政府ノ許可ヲ得テ地方廳又ハ人民ニ之ヲ私設スルコトヲ許シ、其ノ構造點火方法等ハ全國統一ノ規則ニ從ハシメ、各地ノ狀況ニ應シ相當ノ税金取立ノ權ヲ與ヘ、其ノ後外國ノ艦船及ヒ官船ヨリ税金徴收ヲ禁シ、十八年六月太政官布達第十一號ヲ以テ自今燈標ノ私設ヲ禁シ、從來ノモノニシテ税金ヲ徴收セサルモノハ、明治二十八年限り之ヲ廢止スルコト、シ、又之ヲ徴收スルモノニシテ免許年限ナキモノハ相當ノ年限ヲ定メテ願出テシム降テ明治二十一年十月勅令第六十七號ヲ以テ航路標識條例ヲ制定ス是レ即チ現行法ニシテ航路標識ハ遞信大臣ノ許可ヲ得テ地方廳又ハ自治體ニ設置セシムルコトヲ得ルモ、若シ遞信大臣ニ於テ不完全ト認ムルトキハ之カ變更撤去ヲ命スルコトヲ得、又相當ノ價格ヲ與ヘテ之ヲ買上クルコトヲ得トセリ、翌年三月遞信省令第二號ヲ以テ私設航路標識ノ取締規則ヲ設ケ、其ノ地位性質ヲ變更セントスルトキハ主務大臣ニ願出テ、其ノ廢止停止モ

船舶  
船籍

二个月前ニ届出テシムルコト、シ、其ノ看守ヲシテ燈臺局官吏ノ教示ニ從ハシムルコト、セリ

### 第七節 船舶

船籍、検査、航海及ヒ造船獎勵、衝突豫防、水難救助、海員

船籍  
明治三年一月商船規則ヲ以テ初メテ船籍ノ規定ヲ定メ、西洋形商船ヲ買入ル、者ハ政府ノ検査許可ヲ得テ登簿船免狀ノ下附ヲ受ケ、平時及ヒ國祭日ニ國旗ヲ掲クルノ規定ヲ設ケ、明治十二年二月布告第五號ヲ以テ西洋形船舶ハ船主又ハ船舶ノ事務ヲ代理スル者ノ所在ノ地ニ定繫所ヲ定メシメ、其ノ沿岸管轄地ノ船籍ニ編入スルコトヲ定ム、十四年二月布告第十二號ヲ以テ西洋形商船ニシテ十噸以下ノ蒸氣船二十噸以下ノ風帆船等ハ登簿免狀ヲ受クルニ及ハストセリ、降テ明治二十三年四月法律第二十三號ヲ以テ制定ノ商法ニ依レハ日本人ニ專屬シ又

ハ日本ニ主タル營業所ヲ有シテ日本裁判權ニ服スル會社其ノ他ノ法人ニシテ、合名會社ハ總社員、合資會社ハ社員ノ半數以上、株式會社ハ取締役ノ總員其ノ他ノ法人ハ代表者總員カ日本人ナル者ノ所有ニ專屬スル商船其ノ他ノ海船ハ日本ノ船舶トシ、同年十月勅令第二百十九號ヲ以テ更ニ船籍規則ヲ制定ス、此ノ規則ニ依レハ日本船舶ハ凡テ船籍港ヲ定メ其ノ地ノ船籍ニ編入スヘク、其ノ編入ヲ受クルニハ積量測度規則ニ依リ其ノ測量ヲ受ケサルヘカラス、而シテ入籍シタル船舶十五噸以上ノ西洋形船舶百五十石以上ノ日本形船舶ナルトキハ船名、船籍港、構造等ノ一定ノ事項ヲ記入セル船籍證書ヲ受ケサルヘカラス、船籍證書ヲ有スル船舶ハ其ノ外部ニ一定ノ記表ヲ爲シ、船籍港ニハ船主又ハ代理人ヲ置クハキコトヲ定ム、

明治三十二年三月法律第四十六號ヲ以テ船舶法ヲ制定ス、蓋シ本法ノ制定ハ舊法ノ不備ナリシト新商法ニ於テ船籍ニ關スル規定ヲ特別法

船舶検査

ニ讓リタルトニ因リ其ノ必要ヲ見ルニ至リシナリ、本法ノ規定ハ頗ル明細ナリト雖モ其ノ大體ニ於テハ舊商法及ヒ二十三年ノ船籍規則ト多ク異ナル所ナシ、但シ本法ニ定ムル罰則以外ノ規定ハ總噸數二十噸又ハ積石數二百石未滿ノ船舶ニ付テハ適用セサルモノトス

検査

明治十七年十二月布告第三十號船舶検査規則ノ制定マテ船舶検査ニ關シ一般ノ規定ナク、又官吏カ船舶ニ臨檢スルハ主トシテ徵稅上ノ目的ニ出テタリ、此ノ検査規則ハ西洋形船舶ニ適用スルモノニシテ所々ニ検査所ヲ置キ、検査官航行ニ適當ト認ムルトキハ航行シ得ヘキ場所ノ定限、六個月又ハ十二個月ノ検査有効期間、最大汽壓、旅客定員等ヲ記入セル検査證書ヲ交付ス、検査證書有効期限内ト雖モ検査官必要ト認ムレハ臨檢スルヲ得、船舶ノ要部ヲ修理變更セシトキハ検査ヲ請フヘシ又検査官航行ニ不適當ト認ムルトキハ其ノ航行ヲ停止シ又ハ修理ヲ

航海及ヒ造船ノ獎勵

命ス明治二十九年四月法律第六十七號ヲ以テ前令ヲ廢シテ船舶検査規則ヲ定ム是レ即チ現行法ニシテ前令ト異ナル要點ハ検査ノ範圍ヲ一定積量以上ノ和船ニモ及ホシ航行シ得ヘキ場所ノ制限ヲ立ツルニ流船ハ遠洋近海沿海平水ノ四種帆船ハ遠洋近海ノ二種トシ検査有效期間ハ一定ノ範圍内ニ於テ検査官之ヲ定メ検査處分ニ不服ナル者ハ逕信大臣ニ再検査ヲ請フコトヲ得トシタリ

航海及ヒ造船ノ獎勵  
我國ノ航海業ハ太古ニ在リテハ三韓トノ交通ニ於テ非常ノ盛況ヲ呈シ中古ニ在リテハ亞細亞大陸及ヒ南洋ノ間ニ頗ル盛ナリシカ幕府ハ國安ヲ維持スルカ爲メ鎖國主義ヲ採リ海外ノ航海ヲ殆ント禁止シ巨大ノ船舶ヲ造ルヲ禁シ爲ニ航海業大ニ衰ヘ外國ト通商ヲ開クニ及ンテ沿海ノ航業モ主トシテ外國船ニ依ラサルヲ得サルニ至レリ是ヲ以テ維新後政府ハ頗ル力ヲ航海獎勵ニ盡セシカ其ノ方法ハ主トシテ特

定ノ個人又ハ會社ニ資金ヲ與ヘ船舶ヲ給シ或ハ利子ヲ補給スルニ在リテ一般ノ獎勵法ヲ設ケシハ明治二十九年三月法律第十五號航海獎勵法同法律第十六號造船獎勵法ヲ以テ其ノ主ナルモノトス  
航海獎勵法ノ利益ヲ享クル者ハ日本臣民又ハ日本臣民ノミヲ社費若クハ株主トスル商會社ニシテ自己ノ所有ニ屬シ帝國船籍ニ登録シタル船舶ヲ以テ帝國ト外國諸港ノ間ニ航海業ヲ營ム者ニ限り又其ノ船舶ハ總噸數一千噸以上最強速力十海里以上ノ鋼製又ハ鐵製汽船ナラサルヘカラス獎勵金額ハ總噸數一千噸最強速力十海里ノ船舶ニ對シ總噸數一噸航海里數一千海里ニ付キ二十五錢ニシテ噸數速力ヲ増ス毎ニ一定ノ増額ヲ給スルヲ通則トス但シ明治三十二年三月法律第九十六號ヲ以テ同年十月一日以後帝國船籍ニ登録スル外國製造ノ船舶ニハ獎勵金ノ半額ヲ給スルコト、シ且ツ航海獎勵法ハ其ノ實施ノ時ヨリ向フ十八個年之ヲ施行スルコト、セリ而シテ獎勵金ヲ受ケン

トスル船舶ハ左ノ義務ヲ有ス

- (一) 遞信大臣ノ命ニ應シ相當ノ金額ヲ受ケテ船舶ヲ公用ニ供スルコト
  - (二) 遞信大臣ノ命令ニ依リ船舶ノ大サニ應シ一定ノ航海修業生ヲ乗込マシムルコト
  - (三) 遞信大臣ノ許可ヲ得サレハ通則トシテ外國人ヲ其ノ本支店又ハ船舶ノ職員トスルコトヲ得ス
  - (四) 遞信大臣ノ命令ニ從ヒ無料ニテ郵便物ヲ遞送セサルヘカラス
  - (五) 獎勵金ヲ受ケシ日ヨリ若干期間其ノ船舶ヲ外國人ニ讓渡、貸渡、擔保トスルコトヲ得ス
- 造船獎勵法ノ利益ヲ受クル者ハ帝國臣民又ハ帝國臣民ノミヲ社員若クハ株主トスル商事會社ニシテ遞信大臣ノ定ムル資格ヲ有スル造船所ヲ設ケ、同大臣ノ定ムル造船規程ニ從ヒテ鐵製又ハ鋼製ノ七百噸以

衝突豫防

衝突豫防

上ノ船舶ヲ造ル者ニ限り、其ノ船舶ノ構造ニハ同大臣ノ定ムル規程ニ依ルノ外ハ外國製品ヲ供用スルヲ得ス、而シテ獎勵金額ハ七百噸以上一千噸未滿ノ船舶ニテハ一噸ニ付キ十二圓、千噸以上ノ船舶ニテハ一噸ニ付キ二十圓ニシテ、其ノ機關ヲ併セテ製造スルトキハ一馬力ニ付五圓ヲ増給ス

明治三年一月ノ商船規則中、夜間ハ三色ノ舷燈ヲ掲ケ、船舶込合ノ際衝突ニ注意スヘキコトヲ定ム、是レ衝突豫防ニ關スル成文法ノ嚆矢ナリ、降テ明治五年七月船燈規則ヲ制定シ、蒸氣船及ヒ帆船ノ船燈ノ構造及ヒ掲ケ方ヲ定メ、又之ヲ一ノ和歌ニ仕組ミテ海員ノ記憶ニ便ナラシメ、霧中信號霧中速力、兩船相衝突セントスルトキ避クヘキ方向等ヲ規定シ、若シ此ノ法令ニ違反シテ災害ヲ生スルトキハ凡テノ船員其ノ過失ニ付テ責任アリトシタリ、明治七年一月布告第五號ヲ以テ前法ヲ廢シ

水難救助

海上衝突豫防法ヲ定メテ規定ヲ詳密ニシ、明治九年二月布告第十一號ヲ以テ副則ヲ設ケテ衝突豫防法違反ノ罰則ヲ定メ、一定ノ積量以上ノ日本形ノ船ニモ此ノ法律ヲ適用スヘキコトヲ定ム、其ノ後明治十三年七月布告第三十五號ヲ以テ海上衝突豫防法ヲ改正シ、十四年五月布告第三十號ヲ以テ副則ヲ廢シ、二十五年六月法律第五號ヲ以テ再度ノ改定ヲ經テ現行ノ海上衝突豫防法ト爲レリ、其ノ大體ハ七年一月ノ法律ト異ナル所ナシト雖モ凡テノ點益詳密トナレリ

水難救助

幕府カ領國ノ制ヲ布クヤ、外國船舶ノ日本國沿岸ニ立寄ルヲ禁シタリト雖モ難破船ノ場合ニハ相當ノ救助ヲ與ヘテ之カ送還ノ手續ヲ爲セリ、其ノ後各國ト條約ヲ結フニ及ヒ條約中相當ノ救助ヲ與ヘ本國領事ノ所在地タル開港場ヘ送届クヘキコト等ヲ定メ之ヲ實行シ來リシモ、特ニ之カ行政法規ヲ設ケシハ明治三年二月(布告節錄)不開港場規則難

破船救助心得方ヲ定ム、此ノ規定ニ依レハ不開港場ト雖モ外國船難破スルトキハ人民ヲシテ速ニ官ニ届出テシメ、難船ノ乗組人ニ衣食住ヲ給シ、死者ハ埋葬シ、船舶ヲ修繕セントスルトキハ材料工匠ヲ給シ、乗組員開港場ニ赴クコトヲ請フトキハ充分ノ保護ヲ與ヘテ送届クヘシ、又難破ノ船貨ヲ殘シテ立去ルトキハ其ノ處分方ニ付キ決定セシムルヲ得ヘク、救助費用ハ船主ノ負擔トスル原則ナレトモ其ノ一部ハ國庫ノ負擔トスルコトヲ定タリ

明治八年四月布告第六十六號ヲ以テ内國難破船及ヒ漂流物取扱規則ヲ定ム、其ノ難破船取扱ニ關スル規定ノ要點ヲ述フレハ、難破船ヲ發見スル者ハ直チニ浦役人ニ通知シ、又自カラ救助ノ手段ヲ盡サ、ルヘカラス、浦役人ハ必要ニ應シ人夫船舶ヲ徵發シテ救助スルヲ得、而シテ船舶貨物ヲ保安シタル者及ヒ其ノ救助ノ爲ニ徵用セラレタル者ハ一定ノ保安料貨錢其ノ他ノ賠償ヲ受クルノ權アリ、救助費用ハ之ヲ二種ニ

分チテ船主荷主ノ負擔ト地方税ノ負擔トノ割合ヲ定ム、但シ船體荷物ノ全部沈没ノ場合ニハ官ノ負擔トス

明治三十二年法律第九十四號ヲ以テ水難救護法ヲ制定ス、本法ノ規定ハ頗ル詳密ニシテ遭難船舶漂流物及ヒ沈没品罰則ノ三章ニ分チ、遭難船舶ノ規定ハ條約ニ別段ノ定アル場合ノ外之ヲ外國船舶ニモ適用スルモノトス、本法ニ依レハ遭難船舶ノ救護事務ハ最初ニ之ヲ認知シタル市町村長之ヲ行フヘキモノニシテ、救護シタル物件ハ市町村長之ヲ保護シ、船長又ハ船舶所有者ヨリ救護費用ヲ納付セサルトキハ之ヲ公賣ニ付シ、其ノ代金ヲ以テ救護費用ヲ支辨スルニ足ラサルトキハ國庫ヨリ之ヲ補給シ、殘餘アレハ之ヲ還付ス、漂流物及ヒ沈没品ヲ拾得シタル者ハ直チニ之ヲ市町村長ニ引渡スヘシ、但シ其ノ所有者分明ナルトキハ三日以内ニ之ヲ所有者ニ引渡シテ一定ノ報酬ヲ請求スルコトヲ得ヘシ、市町村長ハ引渡ヲ受ケタル物件ヲ保管シ且ツ之ヲ所有者ニ引

海員

渡ス旨ヲ公告スヘシ、但シ所有者知レタルトキハ之ニ其ノ旨ヲ告知スヘシ、所有者ハ此ノ公告又ハ告知ノ日ヨリ一年以内ニ拾得者ニ與フヘキ報酬、保管費等ヲ納付シテ其ノ引渡ヲ受クルコトヲ得、所有者ニシテ其ノ引渡ヲ得サルトキハ拾得者ヲシテ保管公告等ノ費用ヲ納付セシメテ之ニ引渡スヘシ、若シ拾得者其ノ引渡ヲ受ケサルトキハ之ヲ公賣ニ付シ、其ノ代金ヲ以テ諸費用ヲ支辨シ、殘餘アレハ之ヲ國庫ニ取得シ、不足ナレハ國庫ヨリ之ヲ補給ス

海員

船舶職員ニ關スル規定ハ明治九年六月布告第八十二號ヲ以テ西洋形船舶長運轉手機關手試験規則ヲ制定シ、十四年十二月布告第七十五號ヲ以テ從前ノ改正増補ニ係ル布告ヲ廢シ更ニ西洋形船舶長運轉手機關手免狀規則ヲ制定ス而シテ前ノ二規則ハ船舶職員ノ資格ニ關スル規定ト懲戒ニ關スル規定トヲ合セテ定メシカ二十九四年四月法律第六

十八號船舶職員法ヲ以テ各別ニ規定セリ、船舶職員ノ資格ニ關スル點ハ漸々詳密ニ趣キシモ職員ヲ船長、運轉手、機關手ニ分チテ各等級ヲ設ケ各職員ハ一定ノ試験ヲ受ケテ免狀ヲ有セサルヘカラス、又各種ノ船舶ヲシテ法ノ指定スル職員ヲ有セシムルカ如キ大體ノ點ハ異ナルナシ、只九年六月ノ布告ハ航洋船ノミニ適用シタルモ二十九年四月ノ法律ハ之ヲ一定積量以上ノ凡テノ船舶ニ適用セリ

職員懲戒ニ關シ明治九年六月布告第八十二號ノ規則ハ懲戒ノ種類ヲ免狀行使ノ禁止、停止及ヒ罰金ノ三トシ、裁決ノ機關ヲ司法裁判所若クハ行政官トシタレトモ其ノ行政官ハ未タ特別ノ組織ヲ有セス、十四年十二月布告第七十五號ノ規則ハ懲戒ヲ免狀行使ノ禁止及ヒ停止ノ二トシ、又懲戒ヲ裁判所ノ裁判ニ付スルコトヲ止メ、二十九年四月法律第六十九號海員懲戒法ハ懲戒ヲ免狀行使ノ禁止、停止及ヒ譴責ノ三トシ、又數個ノ地方海員審判所ヲ船舶司檢所内ニ、一個ノ高等海員審判所ヲ

遞信省内ニ置キ、共ニ合議體組織ニシテ之ニ理事ヲ付ス、地方海員審判所ノ決裁ニ不服ナル被告又ハ理事ハ高等海員審判所ニ控訴スルヲ得トシテ、各其ノ審判ニ關スル手續ヲ定メ、尙ホ此ノ法律ニ規定ナキモノハ刑事訴訟法ノ規定ヲ準用スルコト、セリ

海員雇傭ニ關シテハ明治十二年二月布告第九號ヲ以テ西洋形船舶海員雇入雇止規則ヲ制定ス、此ノ規定ハ西洋形船舶ノ海員ニ適用スヘキモノニシテ、雇傭期間ハ内海航船ニ在リテハ六個月以内ニ限り、雇傭契約ノ締結及ヒ終了ハ共ニ浦役場ニ於テ一定ノ用紙ヲ以テ證書ヲ作成シ其ノ公認ヲ受ケサルヘカラス、新ニ海員ト爲ル者ノ外ハ必ス解傭證書ヲ有セサルヘカラス、解傭ハ期限經過後ト雖モ雇入地ニ達スル迄ハ之ヲ行フヲ得ス、又一定ノ事由アルトキハ雇入地外ニ又ハ雇傭期限内ニ於テ雇主及ヒ傭人ハ契約解除ヲ爲スヲ得ルモ雇主カ解約ヲ爲スニ方リ傭人ニ過失ナキトキハ傭人ハ雇入地迄ノ旅費ヲ請求スルヲ得ヘシ、



此ノ海員雇入雇止規則ハ明治三十二年三月公布ノ法律第四十七號船員法ニ依リテ廢止ニ歸セリ

此ノ船員法ハ海洋ヲ航行シ且ツ總噸數二十噸又ハ積石數二百石以上ノ船舶ノ職員ニ適用セラル、モノニシテ總則、船員手帖、船長、海員、船長以外ノ乗組員ヲ云フノ紀律及罰則ノ六章ニ分チテ規定ス、本法ニ依レハ日本ニ於テ船員、船長及ヒ其ノ他一切ノ船舶乗組員ヲ云フダラントスル者ハ管海官廳ニ申請シテ船員手帖ノ交付ヲ受ケサルヘカラス、船員手帖トハ管海官廳カ船員ノ氏名、本籍、身分、年齢、船員トシテ就職退職等ヲ記入スル帖簿ナリ、船長ハ船舶ノ港ニ出入スル場合ニハ其ノ港ノ管海官廳ニ對シ一定ノ事項ヲ報告スルコトヲ要シ、人命、船舶、及ヒ積荷ヲ保護スル爲メ種々ノ責任ヲ有ス海員ノ雇傭ニ關スル事項ハ凡テ海員名簿ニ之ヲ記入シテ管海官廳ノ公認ヲ受ケサルヘカラス、船長ハ一定ノ場合ニ於テハ海員ヲ監禁、上陸禁止、加役又ハ減給ノ懲戒ニ付スルヲ

得ヘク又船内ニ在ル者カ危險物ヲ所持シ若クハ危險ノ行爲ヲ爲ストキハ其ノ物件ヲ處分シ若クハ其ノ自由ヲ拘束スルコトヲ得ヘシ、而シテ船長ノ命令ニ服セサル者アルトキハ船長ハ軍艦、地方官廳又ハ管海官廳ニ援助ヲ求ムルコトヲ得ルモノトス

### 第六章 教育

教育行政ノ沿革

維新以前ニ在リテ幕府以ヒ各藩ハ高等ノ學校ヲ設ケテ學問ヲ獎勵シ文學モ頗ル高度ノ發達ヲ爲セシト雖モ其ノ獎勵セシ所ハ主トシテ士族ノ階級ニ限リ其ノ教育モ武藝ト德育トニ偏シ平民ノ教育ハ之ヲ私ノ事業ニ一任シタリ維新後政府ハ國民發達ノ基礎ハ教育ニ在リトシ各種ノ學校ヲ開設シテ一般人民ノ就學ヲ獎勵シ又一方ニハ公費ヲ以テ多數ノ學生ヲ歐米諸國ニ留學セシメ明治三年二月大學ニ於テ大中小學ノ規則ヲ定メ明治五年八月自今華士族平民ノ學齡兒ヲシテ必ス就學セシムヘキ旨ヲ布告シ尋テ文部省ハ學制ヲ定メ全國ヲ大中小學區ニ區分セリ爾來屢改良ヲ加ヘテ著々教育行政ノ發達ヲ計リ十二年九月布告第四十號ヲ以テ前ノ學制ヲ廢シテ更ニ教育令ヲ制定セリ而シテ教育ノ方針ニ關シテハ數次ノ訓告アリテ其ノ主義前後一貫シ特

教育ニ關スル勅語

ニ最後ニ發セラレタル明治二十三年十月ノ教育勅語ハ最モ切要ナルヲ以テ茲ニ其ノ全文ヲ掲ケテ我カ教育制度ノ精神ノ在ル所ヲ明ニセントス

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己ヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ斯ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘ

キ所、之ヲ古今ニ通シテ謬ラハ、之ヲ中外ニ施シテ悖ラハ、朕爾臣民ト  
俱ニ塗々服膺シテ成其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

### 第一節 普通教育

普通教育

明治三年二月ノ學制ニ依レハ各府縣ニ小學校ヲ設クヘキコトヲ定ム  
レトモ其ノ定數ヲ定メス、又兒童ノ就學年齡ハ八歳ヨリ十五歳マテト  
シタレトモ其ノ就學ヲ強制スルコトナシ尋テ明治五年八月學制ヲ定  
メ、全國ヲ五萬有餘ノ小學區ニ分チ、毎區一個ノ小學校ヲ設クルノ計畫  
ヲ立テ、又教育事務ニ關スル特別機關ヲ置キテ地方長官ニ屬セシメ諸  
般ノ教育事務ヲ執行ス、兒童ノ學齡ハ六歳ヨリ初マリテ小學校全科ヲ  
終ルマテトシ、學齡兒童ハ正當ノ理由アルノ外ハ公立小學校又ハ私塾  
若クハ家宅ニ於テ成規ノ學科ヲ修業スヘキモノトシ、私塾ヲ開カント  
スル者ハ其ノ教則等ヲ届出テシム、學校維持ノ費用ハ各小學區ノ負擔

ニシテ、小學區ハ授業料ヲ徵シ其ノ經費ノ一部ニ充テ、又國庫ヨリ一定  
ノ補助金ヲ交付ス、小學校教員ハ二十歳以上ニシテ師範學校(特ニ小學  
校教員養成ノ目的ヲ以テ設立セラレタル公立學校)又ハ中學校ノ卒業  
生ヲ以テ充ツルヲ本則トシ、公立學校ト私立學校トヲ問ハス其ノ教員  
タルモノ違法ノ行爲又ハ不行狀アルトキハ之ヲ譴責シ又ハ其ノ職ヲ  
禁止スルヲ得トシタリ

明治十二年九月第四十號布告ヲ以テ明治五年ニ定メラレタル學制ヲ  
廢シ更ニ教育令ヲ定ム當時文部ノ議ニ曰ク、學制頒布以降五閱年教育  
ノ途漸ク開ク奎文ノ景象ヲ社會ニ現シ、ハ固ヨリ氣運ノ然ラシムル  
所ト雖モ畢竟其功ヲ學制ノ力ニ歸セサルコトヲ得ス願フニ世ノ開明  
ニ赴クヤ百般ノ事徒ニ株守ヲ用非ス措置時ニ隨フハ施政上缺ク可ラ  
サルノ緊務タリ今學制ノ條款ニ就キ反覆審査シテ之ヲ目下ノ情況ニ  
照シ之ヲ將來ノ進度ニ測レハ往々加除訂正ヲ要スヘキモノアリ於是

嘗テ實驗セシ所ヲ參シ更ニ教育法ノ要領七十八項ヲ掲出シ且名稱ノ妥當ナランコトヲ欲シ改メテ教育令ト題ス。其ノ翌年十二月第五十九號ヲ以テ教育令ヲ改正セリ同令ノ舊學制ト異ナル要點ハ各町村ヘ地方長官ノ指示ニ從ヒ獨立又ハ聯合シテ小學校ヲ設置スヘシ但シ地方長官ノ認可ヲ經テ私立小學校ヲ代用シ及ヒ學齡兒童ニ普通教育ヲ授クルニ足ルヘキ巡回授業ノ方法ヲ設ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス、各小學校區域ニ町村長其ノ他ノ者ヲ以テ組織スル學務委員ヲ置キ地方長官ノ指揮ヲ受ケテ其ノ區内ノ教育事務ヲ執行ス、小學校ノ學期ハ三個年以上八個年以下トシ、其ノ數則ハ主務卿ノ定ムル綱領ニ基キ地方長官之ヲ編成シテ主務卿ノ認可ヲ經テ施行ス、兒童ノ學齡ハ六歳ヨリ十四歳迄ニシテ、學齡兒童ノ父母又ハ後見人ハ小學校ノ尋常課程ヲ卒ハラサル間ヘ已ムヲ得サルノ事故アルニ非サレハ毎年一定日數以上兒童ヲ就學セシムルノ責任アリ、若シ公ケノ授業ニ依ラスシテ普通

教育ヲ兒童ニ與ヘントスルトキハ郡區長ノ認可ヲ要シ、其ノ試驗ハ公ケノ學校ニ於テ行フ、學齡兒童ニシテ種痘又ハ天然痘ヲ經サル者又ハ傳染病ニ罹ル者ハ入學ヲ許サス、而シテ學校ハ生徒ニ體罰ヲ加フルコトヲ得ス、私立學校、幼稚園、圖書館ノ設置ハ地方長官ノ認可ヲ要シ、其ノ廢止ハ之ヲ届出ツヘシ、公立小學校ノ經費ハ府縣及ヒ町村ノ負擔トシ、授業料ノ徵收ハ各學校ノ便宜ニ任ス、凡テ學事ニ供スル寄附財產ハ其ノ寄附人ノ指定スル目的外ニ支消スルヲ得ス、公立小學校教員ハ男女トモ十八歳以上ニシテ官立師範學校卒業生若クハ地方長官ヨリ教員免許狀ヲ受ケタル者ヲ以テ之ニ充ツ、其ノ後小學校令ハ再度ノ改定ヲ經テ、現行法ハ明治二十三年十月勅令第二百十五號ヲ以テ制定セラレ、其ノ規定頗ル詳細ナリ、其ノ舊法ト異ナル主要ノ點ヲ舉クレハ、先ツ小學校教育ノ本旨ヲ定メ、兒童身體ノ發達ニ留意シテ道德教育及ヒ國民教育ノ基礎並ニ其ノ生活ニ必須ナル

普通ノ智識技能ヲ授クルニ在ルコトヲ明言シ、小學校ヲ尋常及ヒ高等ノ二種ニ分チ、市町村又ハ其ノ組合若クハ市町村ノ一部ハ尋常小學校ヲ設立スルノ義務アリ、高等小學校及ヒ徒弟學校、實業補習學校ハ地方長官ノ許可ヲ得テ之ヲ設クルコトヲ得、各市町村又ハ町村組合ハ教育事務ニ關スル特別機關ヲ置キテ市町村長又ハ組合長ヲ補助セシム、小學校教科用圖書ハ主務大臣ノ檢定シタルモノニ就キ小學校圖書審査員カ地方長官ノ許可ヲ得テ決定シタルモノニ限ル、學齡兒童ハ尋常小學校ノ教科ヲ卒ハラサル間ハ就學セシムル義務アリテ、市町村長カ貧窮疾病等ノ事情ノ爲メ就學義務ヲ猶豫又ハ免除スルトキハ監督官廳ノ許可ヲ得サルヘカラス、公立小學校ノ經費ハ其ノ設備義務者タル市町村又ハ其ノ組合ニテ之ヲ負擔シ、其ノ資力堪ヘサルトキハ上級團體之ヲ補助ス、而シテ設備義務者ハ一定ノ場合ヲ除キテ就學義務者ヨリ授業料ヲ徵收スヘシ、若シ其ノ徵收ヲ免除セントスルトキハ地方長官

中等及ヒ高等教育

中學校

ハ之カ爲メ市町村ノ負擔ヲ過重ナラシムルノ虞ナシト認ムル場合ニ限り之ヲ認可ス、小學校教員ノ給料ハ地方長官之ヲ定メテ主務大臣ノ許可ヲ受ク、又一定ノ場合ニ於テ小學校教員一時又ハ終身ノ退職料ヲ受ク、其ノ遺族ハ扶助料ヲ受クルノ權アリ、此等ノ給與ハ市町村及ヒ教員ヨリ定期ニ府縣ニ納入シタル基本金ノ利子ト國庫ノ下附金トヲ以テ之ニ充テ尙ホ不足ノ場合ニハ府縣之ヲ負擔スヘキモノトス

### 第二節 中等及ヒ高等教育

普通又ハ専門ノ學術技能ヲ教育スル公立學校ハ一々列舉シテ其ノ沿革ヲ述フルノ煩ヲ避ケ茲ニハ其ノ最モ主ナル二三ヲ舉クルニ止メン  
トス

中學校

中學校ハ高等ナル普通學科ヲ教授スルモノニシテ、明治五年八月ノ學

制ニ依レハ全國ヲ二百有餘ノ中學區ニ分チ、每區其ノ負擔ト國庫ノ補助トニ依リ一校ヲ設クルノ計畫ヲ立テシカ、其ノ後十三年十二月布告第五十九號教育令ヲ以テ各府縣ハ其ノ必要ニ應シテ中學校ヲ設置スヘキコトヲ定メ、十九年四月勅令第十五號ヲ以テ中學校令ヲ布キ、明治二十四年勅令第二百四十三號ヲ以テ更ニ中學校ハ各府縣ニ一校ヲ設置スルヲ通則トシ、特ニ主務大臣ノ許可ヲ得テ全ク設置セス又ハ數校ヲ設置スルコトヲ得トシ、郡市町村カ之ヲ設置スルニハ土地ノ情況ニ由リ須要ニシテ且ツ其區域内小學教育ノ施設上妨ケナキ場合ニ限り之ヲ認メ、又中學校ハ農工商等ノ專修科ヲ設クルコトヲ得トシ、女子ノ爲ニ高等ノ普通教育ヲ施ス中學校モ凡テ同一ノ規程ニ從ヘシムルコト、セリ

高等學校

高等學校

專門學科ヲ教授スル學校ニシテ兼テ帝國大學ニ入ラントスル者ノ爲

師範學校

師範學校

ニ豫科ヲ設クルコトヲ得ヘシ、此ノ學校ハ明治十九年四月勅令第十五號ヲ以テ定メラレ、大學ノ豫科ヲ授クルヲ以テ目的トシ、高等中學校トシテ設立セラレシモノニシテ、明治二十七年六月勅令第七十五號高等學校令ヲ以テ之ヲ現今ノ制ニ改メ、全國ヲ五區ニ分チ、每區ニ一校ヲ設置シ、其ノ經費ハ國庫又ハ國庫ト該學區トノ分擔トス

師範學校ハ明治五年八月ノ學制ヲ以テ、小學校教員ヲ養成スル爲ニ設ケタルモノニシテ、當時未タ定數ナク、其ノ經費ハ國庫ヨリ支出セシカ、十三年十二月布告第五十九號ヲ以テ各府縣ニ一校ヲ設置スヘキコトヲ定メ、十九年四月勅令第十三號ヲ以テ師範學校令ヲ定メ、尋常師範學校ノ校長及ヒ教員ヲ養成スル爲メ、中央ニ一ノ高等師範學校ヲ設ケ、各府縣ノ設置セルモノヲ尋常師範學校ト改稱シ、師範學校生徒ノ學資ハ其ノ學校ヨリ支給スヘキコト、セシカ、三十年十月勅令第三百四十

大學設備ノ沿革

六號ヲ以テ更ニ師範教育令ヲ定メ尋常師範學校ヲ單ニ師範學ト改ム  
 大學  
 大學校ノ基礎ハ既ニ明治初年ニ在リ、二年六月大學ナル名稱ヲ設ケ教  
 育行政ノ主務省ト開成醫學兩校トヲ包括セシカ、後此ノ名稱ヲ廢シ兩  
 校ヲ合シテ大學校ト名ツケ、明治五年八月學制ヲ改メテ全國ヲ八大區  
 ニ分チ、每區ニ一ノ大學校ヲ設置スルノ計畫ヲ立テシカ、其ノ後此ノ制  
 ハ廢セラレ中央ニ一校ヲ設置シ科程モ漸々高尚ニ赴キタリ、十九年三  
 月勅令第三號ヲ以テ帝國大學令ヲ定メ帝國大學ハ大學院及ヒ法醫工、  
 文理科ノ五分科大學ヲ以テ構成シ、分科大學ハ學術ノ理論及ヒ應用ヲ  
 教授シ、大學院ハ分科大學卒業生又ハ之ト同等ノ學力ヲ有スル者ノ入  
 學スル所ニシテ學術ノ繙與ヲ攻究スルモノトシ、其ノ後二十六年九月  
 農科大學ヲ加ヘテ六分科トシ、三十年六月勅令第二百九號ヲ以テ更ニ  
 京都帝國大學ヲ設立シテ二個ノ帝國大學ヲ見ルニ至レリ

宗教管理法ノ沿革

第七章 宗教

我國ハ古代宗教ヲ保護シ社寺ニ特權ヲ與ヘシモ國民ノ信仰ニ關シテ  
 ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ強制シタルコトナシ然レトモ近古ニ至リ外教  
 ノ信仰ハ嚴ニ之ヲ禁シタルコトアリ、足利氏ノ末造葡萄牙國ノ商船鎮  
 西ニ來リ貿易ヲ請ヒ西海ノ諸侯悉ク港ヲ開キ之ヲ招ク、當時基督教始  
 メテ我國ニ入り諸國ニ弘布セリ、豐臣氏大ニ之ヲ愛ヒテ防禁ノ令ヲ下  
 シ、モ未タ全ク滅セサリキ、繼テ徳川氏ノ世トナリ慶長十六年蘭人書  
 ヲ幕府ニ呈シ外教ノ徒皆異志ヲ抱クト告ク、是ニ於テ教禁ヲ嚴ニシ外  
 國宣教師ヲ逐ヒ信者ハ賞ヲ懸ケテ之ヲ官ニ發カシム、終ニ島原ノ亂ア  
 リ、是ヨリ益嚴禁トナリ耶穌ノ畫像ヲ鐵函ニ鋼シ毎年人民ヲ集メテ之  
 ヲ踏マシム、名ケテ繪踏ト云フ、以テ其ノ信否ヲ驗シ拒ンテ踏マサル者  
 ハ罪死ニ當ス、幕府ハ是ノ如ク嚴酷ノ令ヲ行フト同時ニ各開港ヲ封鎖

シ外國ノ交通ヲ絶チ國民ヲシテ古來傳流ノ佛教諸派中ニ就キ孰レカ其ノ一派ニ歸依セシム、其ノ寺ヲ宗門寺ト稱ス、葬祭共ニ寺ニ囑シテ行ハシメ死者アレハ屍體ヲ檢シ法號ヲ授ケ、生者アレハ宗門帳ニ登記シ戸籍檢括法ヲ以テ之ヲ禁遏セリ、猶ホ當時佛教中二三ノ宗派モ等シク其ノ信仰ヲ禁セラレシモノアリ、又神道ハ一派ノ國學者間ニ唱道セラレシモ未タ以テ之ヲ宗教トシ樹立スルニ至ラザリシナリ

維新ノ後基督教ノ禁制ハ猶ホ依然トシテ存續セシモ其ノ施行漸ク弛ミ、明治六年二月ニ至リ各地ニ揭示セル禁制榜札ヲ撤去シ、信仰ノ自由ヲ默認シ、佛教歸依ノ強制ヲ解キ、寺院及ヒ僧侶ノ種々ノ特權ヲ奪ヒ、從來陋習ノ神佛混淆ヲ禁シタリ、明治三年一月大教宣布ノ詔ヲ發シ、祭政一致宜シク治教ヲ明ニシ、惟神ノ大道ヲ宣揚スヘシト宣ラセ玉ヒ、宣教使ヲ各地ニ派シテ汎ク教ヲ天下ニ布カシム、明治五年更ニ教憲三箇條ヲ發布シ、第一敬神愛國ノ旨ヲ體シ、第二天理人道ヲ明ニシ、第三皇上ヲ

大教宣布ノ詔

奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムヘキ旨ヲ示シ、神官僧侶等ヲ教導職ニ補シ專ラ教憲ヲ説カシム、中央ニ大教院ヲ設ケ布教事務所トシ、各地方ニ小教院ヲ置キ神社寺院説教所ヲ以テ之ニ充テ、布教官ハ布教ノ外人民ノ葬祭式ヲ行フノ權ヲ有ス、僧侶ニシテ教院ニ入り教導職タラントスル者ハ入院ノ時先ツ神殿ニ於テ各其ノ門戶ノ見ヲ去テ同心協力本教固守ノ誓言ヲ爲サシメシモ、其ノ衆生ニ説ク所ノ法ハ佛教各派ノ教義ヲ交説スルヲ認メラレ、又神官ニシテ排佛ノ事ヲ説クコトヲ禁セラレタリ、是レ當時維新大業ノ成就者タル勤王家ハ多クハ國學者ナリシヲ以テ、皇業ハ祭政一致ニ復スヘシトノ大主義ナリシニ由ルナランカ、明治十四年十二月内務省達乙第四十八號ヲ以テ教院教會所説教所ニ於テ葬祭式ヲ執行スルコトヲ禁シ、翌十五年一月内務省達乙第七號ヲ以テ神官ハ教導職ヲ兼スルコトヲ得ストシ、且ツ葬儀ニ關係セサルモノトス

十七年八月太政官布達第十九號ヲ以テ教導職ノ制ヲ廢止シ、同年十月



布達第二十五號ヲ以テ埋葬規則ヲ制定シ法律上埋葬ト宗教トノ干係ヲ解キ明治二十三年十一月憲法ノ實施ト同時ニ日本臣民ハ國家ノ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有スルコトヲ保障セラレタリ

宗教ノ制度ヲ攸スルニ先チ之ト混同シ易キ神官神職及ヒ神社ノ制度ニ付キ一言セン、神官神職トハ皇室ノ祖宗及ヒ國家功臣ノ靈ヲ祭祀セラル神社ニ奉仕スル官吏ニシテ、神社ハ神靈ヲ鎮祀シ兼テ祭典ヲ執行スル神殿ニシテ財産上ノ關係ニ付テハ從來法人タルノ性格ヲ有セリ、其ノ起原ハ或ハ宗教ニ關係ヲ有シ或種ノ人民ハ今日猶ホ宗教視スルノ觀念ナキニ非サルヘシト雖モ法律上全ク宗教ト關係ナシ、尤モ神道ナル一種ノ宗教ニ付テハ別ニ其ノ制度ヲ定ムト雖モ但タ神社ハ神靈ヲ鎮祀シ神官神職ハ之ニ奉仕スルノ外又宗教上ノ行爲ヲ爲サ、ルモノトス今左ニ神官神職及ヒ神社ノ沿革ヲ掲クレハ

神官及ヒ神職

上古祖先ニ對スル祭事ハ政務ノ最モ重要ナルモノニシテ、政ヲまつりことト訓スルハ即チ祭事ノ義ニシテ所謂祭政一致ナリ、故ニ中央政府ニ祭祀機關ヲ設ケ、神祇官ハ八省ノ上ニ居リ各地方長官亦祭祀ノ職ヲ兼ヌ、神社ヲ各地ニ建設シ皇祖及ヒ國家功臣ノ靈ヲ鎮祀シ常ニ神官ヲ附シテ之ニ奉仕セシム、市町村各神社アリ、是等ノ神社ハ古來皇室政府及ヒ封建時代ノ武門ノ寄進其ノ他人民ヨリ寄附ニ係ル財産ヲ有シ、特ニ其ノ土地ハ免除地トナリ、神官ハ子孫其ノ職ヲ世ニシ、封建ノ世ニ在リテモ其ノ監督權ハ之ヲ幕府ニ委任セスシテ朝廷親カラ之ヲ行ハセラレシハ國體ノ然ラシムル所ニ由ルナラン、維新後、神社ノ沿革ハ寺院ト同シキ所尠ナカラサルヲ以テ左ニ其ノ異ナル點ノミヲ示シ餘ハ寺院ノ部ニ讓ラントス

神官及ヒ神職

神宮司廳ニ神官ヲ置キ他ノ神社ニ神職ヲ置ク、神官神職ハ共ニ國ノ祭

祀ヲ司トル官吏ニシテ同時ニ神社ノ管理者タリ、其ノ組織ハ維新以後  
 屢、變更アリシカ、現今ハ神宮及ヒ官、國幣社ニハ宮司、禰宜、主典アリ中ニ  
 ハ特ニ宮司ノ下ニ權宮司、主典ノ下ニ宮掌ヲ置クモノアリ、府縣郷社ニ  
 ハ社司、社掌、村社以下ノ神社ニハ社掌ヲ置キ、宮司ハ内務大臣、禰宜、主典  
 ハ地方長官之ヲ任シ、靖國神社ノ神官ハ陸海軍大臣之ヲ任シ、府縣社以  
 下ハ氏子總代ヲシテ數名ヲ推薦セシメ、其ノ内ニ就キ地方長官之ヲ任  
 ス、而シテ明治四年五月マテハ神官ハ世襲ニシテ社入ヲ以テ家祿トシ  
 神社ノ財産ヲ一巳ノ私有ノ如ク處分セシカ、同年一定ノ賠償ヲ與ヘテ  
 之ヲ廢シ、更ニ適當ノ者ヲ選任セシメ、明治二十五年内務省訓令第四號  
 ヲ以テ任用資格ヲ定メ、多年神職ヲ奉セシ者、或等級以上ノ官吏タリシ  
 者等ノ外ハ一定ノ試験ニ合格シタル者ナラサルヘカラストセリ、又二  
 十八年八月内務省第十號ヲ以テ神社神職登用規則ヲ定ム、現今官國幣  
 社ノ神職ハ一定ノ俸給ヲ受クト雖モ、其ノ他ノ神職ハ人民各個ノ任意

神社

ノ出捐ヲ受クルコトヲ許シ別ニ俸給ヲ下附セス、神職ハ國家ノ祭祀事  
 務及ヒ神社ノ事務ヲ執行スルト同時ニ明治十五年一月迄ハ布教官ヲ  
 兼テシモ、同年ヨリ全ク宗教上ノ關係ヲ絶チ、教導職ノ兼補ヲ廢シ、府縣  
 社以下ノ神職ノミハ教職ヲ兼補スルヲ得セシム、神官ハ又人民ノ請求  
 ニ應ジ祈禱ヲ行ヒ神符ヲ授與スルコトヲ得タリシモ、現今ハ官ノ許可  
 ナクシテ神符ヲ授與スルコトヲ得サルノミナラス、之カ爲ニ人民ノ醫  
 藥ヲ妨ケ若クハ財物ヲ食ルコトヲ禁シ、且ツ妄リニ吉凶禍福ヲ説キテ  
 人民ヲ惑スコトヲ禁ス、凡テ此等ノ規定ニ違反スルトキハ官吏懲戒法  
 ニ依リ處分セラル、モノトス

神社

神社ハ神靈ヲ鎮祀シ兼テ祭典執行ノ用ニ供スル社殿ニシテ、人民各個  
 ノ禮拜ニ供シ、又人民相會シテ古來慣行ノ祭典ヲ行フノ場所ヲ云フ、是  
 等ノ目的行爲ハ祖宗及ヒ國家ノ功臣ニ對スル崇敬ヲ表スルニ止マリ

法律上宗教ト關係スル所ナシ、各神社ハ概テ其ノ地方一定ノ區域ニ於ケル人民ヲ氏子トシ、氏子ノ外又信徒アリ、神社一切ノ事務ハ神職之ヲ管理スルノ外、氏子若クハ信徒中ヨリ選出シタル總代アリテ、神社財産處分其ノ他重要ナル事項ニ付キ、神職ト協議シテ之ヲ定ムルモノトス、明治五年神社ヲ區別シテ、神宮、大中小別格官幣社、大中小國幣社、府縣社、郷村社トシ、別ニ無格社ナルモノアリテ、各之ニ附屬スヘキ神官神職ノ組織及ヒ其ノ監督者ヲ定メタリ、人民ノ執行スル祭典ニシテ定期以外ノモノハ明治五年ニハ地方廳ノ許可ヲ要ストシ、明治二十四年八月ニハ單ニ地方廳及ヒ警察署ニ届出テシムルコト、セリ、而シテ神社ノ財政ハ國家ノ補助、人民任意ノ寄附及ヒ其ノ所有財産ヲ以テ維持スルモノナルカ、財産ニ關スル事項ハ概シテ寺院ト同シキ故之ヲ省略シ、茲ニハ國家ノ補助ニ付テ沿革ヲ陳ヘンニ、明治四年一月社領ハ神社ノ境内地及ヒ神社ノ直作又ハ小作地ニシテ一般私有地ノ如ク地租其ノ他ノ

宗派ノ分立

義務ヲ負擔スルモ外ハ盡ク之ヲ沒收シテ官國幣社ニハ年々一定ノ經費ヲ支給シ、尙ホ一般神社ニ對シテ舊領地收入額ニ比例シテ一定ノ補助金ヲ十年間交付スルコト、シ、明治二十年三月内務省訓令第十五號ヲ以テ更ニ官國幣社ニ對シ十五年間一定ノ保存金ヲ下付シ、明治三十年配付ノ年限ヲ明治二十年度ヨリ三十年間トセリ、明治二十八年七月内務省令第七號ヲ以テ古社寺保存金出願規則ヲ設ケ、明治三十年六月法律第四十九號ヲ以テ古社寺保存法ヲ定メ、歷史上保存ヲ要スヘキ神社ニハ一定ノ保存金ヲ下付スルコト、ナレリ

宗派ノ分立ハ何レノ宗教ヲ問ハス、其ノ發達上ニ於ケル自然ノ結果ナリトス、佛教ニ在リテモ早ク既ニ宗派ノ分立セルアリテ、八宗古義、真言、淨土、禪、臨濟、曹、洞、黃蘗、眞宗トナリ、十一宗法相、眞言、天臺、禪、淨土、眞宗、融通、念佛、日蓮、時宗、眞宗トナリ、各宗又種々ノ流派ヲ有セリ、是等ノ諸宗派各、本寺本山門跡アリテ各、其ノ末寺ヲ統ヘ、宗門事務ヲ管轄セリ、古來我國ニ在リテハ信仰ニ束縛ヲ置カザリシ

ヲ以テ別ニ宗派ノ新立ヲ制限セス、徳川時代ニ至リ基督教ヲ嚴禁セルト佛教ノ二三派ヲ禁セルトノ外別ニ何等ノ規定ヲ見ス、然レトモ現存セル宗派ノ外ニ新義ヲ立ツル事ヲ許サ、リシナリ維新ノ後ニ至リテモ又是ニ關スル一定ノ法規ヲ有セス、明治五年諸宗ノ内別派獨立本山及ヒ無本寺等相當望ノ宗内總本山ノ所轄ニ屬スルコトヲ許セリ、當時二三宗派ヲ廢合セル外明治七年ヨリシテハ反テ各宗諸派ノ分立スルモノ多シ

神道ニ在リテハ神佛混合ノ兩部神道久シク行ハレ後チ惟一神道垂加神道等起リシモ未タ宗教トシテ樹立スルニ至ラス、維新ノ後ニ至リ廢佛論ニ伴フテ神道大ニ興リ教導職ヲ置キ神官ヲシテ其ノ教義ヲ宣布セシメシヨリ一種ノ宗教トシテ立ツニ至レリ、當時ハ單ニ神道ノ一派ナリシカ明治九年黒住派ノ別派以來續々トシテ別派ヲ爲セリ、明治十七年八月神佛教導職ヲ廢スルニ及ヒ神佛各教宗派ヲシテ其ノ立教開

宗ノ主義ニ由テ教規宗制、寺法ヲ規定シテ認可ヲ請ヒ神道各派、佛道各宗ニ管長ヲ定メシメ各宗派妄リニ分合ヲ唱へ或ハ宗派ノ間ニ爭論ヲ爲スコトヲ禁セリ是ヨリ特ニ分合ノ止ミ難キ理由アルモノニ限リ政府ハ是ヲ許可シ之カ告示ヲ爲スコト、ナレリ、而シテ神佛各教宗派共ニ管長教規、宗制、寺法ノ範圍ニ於テ各、其ノ教宗派内ノ宗教事務ヲ統ヘ内務省之カ監督權ヲ有ス、其ノ他公認ヲ經サル宗教ニ在リテハ別ニ何等ノ法規ヲ有セサルナリ

憲法ニ於テハ日本人民ハ國家ノ秩序ヲ害セス又臣民タルノ義務ニ反セサル限リハ信仰ノ自由ヲ有スルコトヲ保障スト雖モ、特ニ宗教ニ關スル規定ヲ設ケシハ佛教及ヒ神道ノ二宗ニ止マリ未タ一般ニ通スルノ規定ナシ、故ニ此ノ外ノ宗教ヲ信スル者ハ一般警察法ノ範圍ニ於テ信仰ヲ表シ、組合ヲ組織シ布教ニ從事スルコトヲ得ルモノトス、今左ニ神佛二教ノ沿革ヲ掲クレハ

僧侶及ヒ教師

僧侶及ヒ教師

徳川氏時代ニ在リテハ僧侶ハ種々ノ特權ヲ有シ一種特別ノ階級ヲ爲セシカ、維新後ハ漸々之ヲ廢シテ明治七年七月布告第七十四號ヲ以テ平民ノ列ニ加ヘ但タ一寺ノ住職ハ士族ト同様ニ取扱ヲ爲スコト、爲セリ、維新前ニハ僧侶ノ身分ニ關スル事項ハ專ラ其ノ所屬宗派ノ本山ニテ監督ヲ行ヒ他ノ人民トノ關係特ニ訴訟ノ如キハ寺社奉行之ヲ司トリ、其ノ宗派内ノ規則ニ依リテ制限ヲ受クルノ外、眞宗ヲ除キテハ盡ク肉食妻帯ヲ禁シ若シ之ニ反スレハ處罰セラル、又凡テ僧侶ハ還俗セントセハ官ノ許可ヲ要セシカ、明治五年ニ至リ僧侶ハ自由ニ還俗シ又肉食妻帯スルコトヲ得トセリ、又維新前ニハ出家セントスル者ハ官ノ許可ヲ要シ維新後ニ至リテモ明治四年更ニ此ノ制ヲ復シ地方長官ノ許可ヲ要ストセシカ、明治八年之ヲ廢シテ單ニ届出テシムルコト、セリ、僧侶ノ監督ハ主ニ其ノ所屬宗派ノ本山ニアリシカ、維新後僧

侶ヲ教導職ニ補シ、特ニ明治九年ニハ教導職ニ補セラレタル者ノミヲ公認ノ僧侶トスルコト、セシヨリ其ノ監督權ハ殆ント政府ノ司トル所トナリタリ、明治十七年八月太政官布達第十九號ヲ以テ神佛ノ教導職ヲ廢シ、佛教及ヒ各宗派ニ於テ管長一人ヲ選ハシメ、各其ノ立教開宗ノ主義ニ由テ教規宗制寺法ヲ規定シテ内務省ノ認可ヲ請ハシメ、凡テ寺院ノ住職ヲ任免シ及ヒ教師ノ等級ヲ進退スルコトハ之ヲ管長ニ委任シ、之カ最上ノ監督權ハ内務省ニ屬セリ、明治二十七年二月内務省訓令第四號ヲ以テ管長ニ於テ僧侶教師ニ對シ懲戒處分ヲ行ヒシトキハ其ノ都度事由ヲ付シテ官ニ届出シムルコト、セリ、又僧侶教師ニハ公權上ノ不能力アリ即チ明治二十一年四月法律第一號市町村制、同二十二年二月法律第三號衆議院議員選舉法、同二十三年五月法律第三十六號郡制、同十三年四月布告第十五號府縣會規則等ニ依リ議員ト爲ルノ權ナク、又同二十六年僧侶教師ハ政治上ニ容喙スルコトヲ禁セラレタ

リ  
 德川氏ノ寺院ニ關スル制度ハ數多ノ大ナル寺院ニ付テハ夫レ々々法令ヲ定メ、且ツ一般寺院ハ本山末寺ノ區別ヲ立テ、宗教ニ關スル事項ハ主ニ本山ニ委任シテ末寺ヲ監督セシメ、其ノ他ノ事項ハ幕府ニ於ケル寺社奉行之ヲ司トレリ、而シテ數多ノ寺院ハ寺領ヲ有シ其ノ治ハ主トシテ寺院處分ニ係リ恰モ諸侯ノ其ノ領内ニ於ケルカ如シ、又各寺院ハ其ノ所屬檀徒ノ戶籍事務ヲ司トリ及ヒ葬祭ヲ行フノ權利ヲ有セリ、明治四年マテハ概テ舊制ヲ存セシカ同年寺院ノ領地ヲ回收シ其ノ特權ヲ奪ヒタリ、此ノ後ノ法制ノ沿革ハ概シテ神社ニ關スルモノト同シキカ故ニ左ニ二者ノ沿革ヲ併セ示ス

社寺ノ設立廢合

社寺ノ設立廢合

社寺ノ設立ハ舊來許可ヲ要シ容易ニ之ヲ許サ、リシカ維新ノ始メ其ノ制弛ミシヲ以テ明治五年六月教部省達第六號ヲ以テ社寺ノ設立及

ヒ廢合モ許可ヲ要スルコト、シ從來氏子等ヲ有セスシテ頽敗ニ赴ク神社及ヒ本山ヲ除ク外無檀無住ノ寺院ニシテ堂宇破壞シ小社小寺等永續ノ目途ナキモノ、廢合ヲ許シ、明治七年六月教部省達第二十三號ヲ以テ神社ハ到底維持ノ見込ナキ場合ノ外ハ容易ニ合祀ヲ許サス明治十一年九月内務省達乙第五十七號ヲ以テ社寺ノ設立、移轉、廢合、改稱ハ神官、住職、氏子、檀徒若クハ信徒協議ノ上戸長ノ稟書ヲ以テ願書ヲ呈出スヘク、而シテ其ノ設立ハ社寺タルノ體裁ヲ備ヘ且ツ維持ノ見込アルモノニ限リ許可スルコト、セリ、明治十五年一月内務省達戊第一號ヲ以テ神道教師又ハ信徒ヨリ祠宇建設ヲ願出ツルトキモ同様ノ手續條件ヲ要ストセリ、蓋シ祠宇ハ神社ト異ナリ奉教ノ主義ヨリ其ノ主神ヲ鎮祭シ衆庶ニ參拜セシメ其ノ教徒ノ葬祭ヲ執行スル等佛教ニ於ケル寺院ト異ナラス、只之ニ關スル規定ハ今日甚タ不備ナルヲ免レサルナリ

社寺ノ機關

社寺ノ機關

神社ノ機關ハ既ニ之ヲ述ヘタルヲ以テ茲ニハ寺院ノ機關ノミヲ説クヘシ維新以前ニ在リテハ寺院ノ機關ハ概シテ住職ノミニシテ檀家ノ權利ハ多ク認メラレス、而シテ住職ハ妻帯ヲ許ス宗派ニ在リテハ世襲ニシテ、其ノ他ノ宗派ハ各其ノ宗制ニ由リテ定メ、末寺住職ノ進退ハ本山ニテ之ヲ行ヒタリ、維新後僧侶ヲ教導職ニ補スルノ制ヲ設ケテヨリ末寺ノ住職ハ地方長官ニ於テ、本寺ノ住職ハ主務卿ニ於テ教導職ニ補セラレタル僧侶ノ中ヨリ任命スルコト、爲シ明治十二年ニ至リ住職ハ各宗派ノ舊慣ニ依リテ住職候補者ヲ推薦セシメテ政府之ヲ認可スルコト、爲シ明治十七年八月教導職ノ廢止ト共ニ住職ノ任免ハ内務卿ノ認可ヲ得テ各宗管長ノ制定シタル規則ニ依リテ之ヲ定ムヘキモノトセリ、此ノ外明治四年ヨリ個々ノ法令ヲ以テ檀家若クハ信徒總代トノ協議ヲ要スルコト・セシカ、明治十四年七月内務省達乙第三十三

社寺ノ財産

社寺ノ財産

號ヲ以テ此ノ總代人ハ相當ノ資産ヲ有シ兼望アル者ノ中ヨリ三名以上ヲ選出シ戶長役場ニ届出シム、總代ハ寺院ヨリ官ニ呈出スル凡テノ書面ニ連署シ且ツ寺院ノ一切ノ收入ニ付キ其ノ寺有ニ屬スヘキモノト住職ニ付スヘキモノトヲ住職ト總代人トノ間ニ豫約セシム而シテ此ノ總代人ハ三年毎ニ改選スヘキモノトセリ

社寺ノ財産

明治四年迄ハ社寺ヘ一般ニ領地ヲ有スルモノ多カリシカ同年一月社寺境内ヲ除クノ外ハ一定ノ賠償ヲ與ヘテ之ヲ回收セリ、而シテ社寺財産ノ管理ニ付テハ個々ノ法令ヲ以テ規定シ其ノ重モナルモノヲ舉クレハ、明治六年三月布告第八十九號ヲ以テ寺院ノ財産ハ一定ノ什物帳ニ記入シ檀家總代法類等之ニ連署シ兼テ其ノ寺院ヘ備置カシム、明治十年神社ニ於テモ府縣社以下ニ在リテハ同様ノ財産目録ヲ作り神職並氏子惣代二名以上其ノ地ノ區戶長連署調印一部ハ區戶長役所ニ一

部ハ其ノ社ニ備置カシム明治六年七月布告第二百四十九號ヲ以テ社寺ノ財産ニシテ古來傳來ノ什物寄附及ヒ積立財産等ノ處分ハ政府ノ許可ヲ要スルコト、シ、九年二月敎部省達第三號ヲ以テ一切ノ財産ノ處分ヲ同一ノ規定ニ從ヘシム、但シ境内地及ヒ寶物古文書ヘ之ヲ處分スルコトヲ得ス、而シテ境内ノ樹木ニ就テハ特別ノ規定アリ明治六年七月布告第二百三十五號ヲ以テ其ノ伐採ハ地方廳ノ許可ヲ要スルコト、シ、十五年八月内務省番外示達ヲ以テ更ニ境内樹木ヲ五種ニ分チ風致ニ關係ヲ有スル樹木及ヒ一定ノ大サニ達セシ大木又ハ幼樹ハ全ク伐採ヲ許サス、其ノ他ノ樹木ハ社寺建物ノ用ニ供スル場合ニ限り伐採ヲ許可スルコト、セリ、又明治十年五月布告第四十三號ヲ以テ社寺ニシテ負債ヲ起ストキハ總代ノ連署ヲ要シ、境内地及ヒ寶物古文書ハ抵當トスルヲ得ス、其ノ他ノ財産ヲ抵當トスルトキハ總代ノ連署ヲ要スルコト、シ、尙ホ十二年七月内務省達乙第三十九號ヲ以テ抵當ト爲

スニハ先ツ地方廳ニ届出テシメ地方廳ハ其ノ財産ニシテ境内地寶物又ハ古文書ニ屬セザルトキハ之ヲ認可スルコト、セリ、明治三十年六月法律第四十九號ヲ以テ古社寺保存法ヲ制定シ古社寺ニシテ其ノ建物其ノ他ノ財産ノ中歴史上特別ノ關係ヲ有シ美術ノ模範トナリ又ハ風致美觀ニ關係アルモノニ對シテ相當ノ保存金ヲ下附スルコト、セリ



專用權ノ特許

### 第八章 專用權ノ特許

#### 第一節 版權

版權保護ノ沿革

官ノ許可ヲ得テ出版シタル圖書ハ本人ノ承諾ヲ得ヌシテ之ヲ出版スルハ古ヨリ禁スル所タリ明治元年六月開版書類改所ヲ置キ犯則者罰例ヲ定メタリト雖モ專賣權ヲ認メタルハ明治五年一月文部省布達出版條例ヲ以テ初メトス此ノ條例ニ依レハ版權ノ讓渡ハ自由ナリト雖モ未タ版權ノ年限等ニ關スル規定ナシ明治八年九月布告第三百三十五號ヲ以テ更ニ出版條例ヲ發シ彫畫類以外ノ著譯圖書ニ版權ヲ與ヘ其ノ年限ハ通例三十年ナリト雖モ特ニ世益ヲ爲スモノハ仍ホ十五年ノ延期ヲ許ス明治二十年十二月勅令第七十六號ヲ以テ出版法ト分チテ別ニ版權條例ヲ定ム舊法ト異ナル主要ノ點ハ官廳會社學校等ノ名義ニテ出版スル圖書ニモ版權ヲ認メ版權ノ年限ヲ通例版權登錄ノ月ヨ

リ三十五年トシ、一個人ノ著作ニ在リテハ著作者ノ終身ニ五年ヲ加ヘタル期間ヲ與ヘ特ニ世ニ有益ナルモノニシテ期限内ノ利益カ損失ヲ償ハサル事情アルトキハ版權者ノ願出ニヨリ十年間延期スルコトヲ得トシ、明治二十六年四月法律第六十四號ヲ以テ舊法ヲ廢シテ版權法ヲ制定シ頗ル詳密ノ規定ヲ設ケシカ、更ニ三十二年三月法律第三十九號ヲ以テ著作權法ヲ制定シタリ蓋シ舊法ニ尙ホ不備ノ點アルノミナラス萬國版權同盟ニ加入シタルヨリ其ノ改正ノ必要ヲ見ルニ至リシナリ本法ハ著作者ノ權利、偽版及ヒ罰則ノ三章ニ分チ其ノ規定頗ル詳密ニシテ從來別ニ規定ヲ設ケタル寫真ノ版權及ヒ脚本樂譜ノ興行權モ著作權ノ一トシテ本法ニ併セテ規定シタリ、抑モ寫真ノ版權ヲ認メシハ明治九年六月布告第九十號寫真條例ヲ以テ初メトス、該例ニ依レハ版權ノ年限ハ五年ナリシカ、明治二十年十二月勅令第七十九號寫真版權條例ヲ制定シ版權年限ヲ十年トシタリ、又脚本及ヒ樂譜ハ明治八

年九月ノ出版法制定以來版權ノ保護ヲ受ケシト雖モ其ノ興行權ヲ認メシハ明治二十年十二月勅令第七十八號脚本樂譜條例ヲ以テ初メトシ、版權ヲ得タル脚本樂譜ハ其ノ版權年限間興行權ヲ有スルモノトセリ、而シテ此等ノ特別規定ハ本法ノ實施ト共ニ廢止ニ歸シ將來寫眞寫眞術ト類似ノ方法ニ依リ製作シタル著作物及ヒ脚本樂譜ノ興行モ一般著作物ト同様ノ保護ヲ受クルニ至レリ、又本法ニ於テハ著作權ノ年限ヲ改メ著作人カ其ノ實名ヲ表ヘシテ生存中ニ發行シ又ハ興行シタル著作物ノ權利ハ著作人ノ生存中及ヒ其ノ死亡後三十年間繼續シ寫眞ノ著作權ハ舊法ノ如ク十年間トセリ、又外國人ノ著作權ニ付テハ條約ニ別段ノ規定アルモノヲ除ク外本法ノ規定ヲ適用ス但シ著作權保護ニ關シ條約ニ規定ナキ場合ニハ帝國ニ於テ始メテ其ノ著作物ヲ發行シタル者ニ限り本法ノ保護ヲ享有スルコト、セリ

發明ノ保護

第二節 發明

發明保護ノ制ヲ設ケシハ明治四年四月新發明品專賣略規則ヲ以テ嚆矢トス、此ノ規則ニ依レハ特許ヲ得ヘキ發明ハ器具器械織物其ノ他總テ有益ノ新發明及ヒ在來ノモノニ一層便益ナル工夫ヲ加ヘシモノニシテ未タ世間ニ公ケニ流布セザルモノニ限ル、特許年限ハ十五年、十年、七年ノ三等ニ分ツ、期限中ノ利得ニシテ發明人ノ損失ヲ償ハサルトキハ其ノ發明ノ要否ニ應シ延期スルコトヲ得、翌年三月布告第百五號ヲ以テ當分ノ內專賣略規則ヲ廢シ、同時ニ地方官ニ命シテ將來發明ヲ爲ス者アルトキハ其ノ明細品及ヒ其ノ工夫ノ手續等取調ヘ工部省ニ報告セシム、其ノ後十八年四月布告第七號ヲ以テ更ニ專賣特許條例ヲ制定ス

明治二十一年十二月勅令第八十四號ヲ以テ特許條例ヲ發布ス其ノ主

要ノ點ヲ舉クレハ、特許ヲ得ヘキ發明ヲ限定シテ新規有益ナル工術機械製造品及ヒ合成物ノ發明又ハ此等在來ノ物ニ施シタル改良ノ發明ニ限り、特許ノ年限ヲ五年、十年、十五年ノ三種ニ分チ、特許ノ許否ハ特許局審査官之ヲ査定シ、其ノ査定ニ不服ナルモノハ再査定ヲ請求スルコトヲ得ヘク、其ノ再査定ニ不服ノ者ハ審判ヲ請求スルコトヲ得ヘシ、審判ハ特許局長及ヒ二人以上ノ審判官ヲ以テ組織スル合議機關ニ由リテ行ヒ、其ノ審判ニ對シテハ不服ヲ申立テ又ハ訴訟スルヲ得ス、而シテ故意ニ特許權ヲ侵害シタル者ハ罰ニ被害者ニ對シテ損害賠償ノ責任アルノミナラス一定ノ自由刑又ハ罰金ニ處ス

明治三十二年三月法律第三十六號ヲ以テ舊法ヲ廢シ特許法ヲ制定ス本法ニ依レハ特許ノ年限ハ凡テ十五年トシ、特許ニ關スル代理ヲ常業トスル者ハ特許局長ニ願出テ登録ヲ受クルコトヲ要シ、其ノ業務ニ關シテ犯罪又ハ不正ノ行爲アリタルトキハ特許局長ハ其ノ代理業ヲ停

止又ハ禁止スルコトヲ得ヘシ、工業所有權保護同盟條約國ニ於テ發明ノ特許ヲ出願シタルトキ及ヒ政府各府縣ノ開設シタル博覽會若クハ共進會ニ出品シタル者ニシテ後日其ノ物品ニ付キ特許ヲ出願セントスル旨ヲ特許局長ニ届出テタル者カ其ノ後一定ノ期間内ニ特許ヲ出願シタルトキハ其ノ出願ハ最初ノ出願又ハ届出ノ日ニ於テ爲シタルト同一ノ效力ヲ有セシム、又特許ニ關スル審判ハ審判官三人又ハ五人ヲ以テ審判スルコト、シ、一定ノ場合ニハ其ノ審判ニ對シ不服ナル者ハ其ノ審判カ法律ヲ適用セス又ハ不當ニ法律ヲ適用シタルコトヲ理由トシテ大審院ニ出訴スルコトヲ得ヘク、大審院ニ於テ出訴ノ理由アリト認ムルトキハ原審判ヲ破毀シ、更ニ其ノ事件ヲ特許局ニ差戻シテ審判セシム、而シテ大審院カ裁判ヲ爲スニ當リ法律ノ點ニ付キ表シタル意見ハ其ノ事件ニ關シ特許局ヲ縛束スルモノトス

意匠

意匠保護

### 第三節 意匠

意匠保護法ハ明治二十一年十二月勅令第八十五號ヲ以テ初メテ制定セラレ、二十九年ニ至リ一ニノ個條削除セラレシノミ、其ノ要點ヲ舉クレハ登録ヲ得ヘキ意匠ノ實體ハ工業上ノ物品ニ應用スヘキ形狀、模様又ハ色彩ニ關スル新奇ノ意匠ニシテ農商務大臣ノ定ムル物品類別ニ於テ出願人ノ指定シタル物品ニ限リ、且ツ風俗ヲ害シ、又ハ登録出願前公ニ知ラレ、又ハ公ニ用ヒラレタルモノニアラサルコトヲ要ス、意匠專用權ノ年限ハ三年、五年、七年及ヒ十年ノ四種トシ、意匠專用權ヲ侵害セシ者ハ三年間損害賠償ノ義務アルノミナラス一定ノ刑罰ヲ科セラルルモノトス、意匠專用權ノ許否ニ關スル審査、再審査審判、審査審判ノ機關及ヒ其ノ組織ニ關シテハ發明ノ特許ニ關スル規定ヲ準用ス

明治三十二年三月法律第三十七號ヲ以テ意匠條例ヲ廢シ意匠法ヲ制

商標ノ專用保護

定ス本法ニ於ケル改正ノ重ナル點ヲ舉クレハ菊花御紋章ト同一若クハ類似ノ形狀、模様ヲ有スルモノハ意匠ノ登録ヲ受クルヲ得ス、意匠專用ノ年限ハ凡テ十年トス、意匠ノ出願ニ關スル代理業、意匠專用ノ許否ニ關スル手續及ヒ機關ノ組織ニ付テハ本法ト同時ニ公布セラレタル特許法ノ規定ヲ準用ス

### 第四節 商標

商標專用ノ許可ニ關スル規定ハ明治十七年六月布告第十九號商標條例ヲ始メトス而シテ同二十一年十二月勅令第八十六號ヲ以テ之ヲ改正ス是レ即チ現行法ナリ十七年六月ノ條例中其ノ主ナル點ヲ舉クレハ商標ノ實體ハ出願人隨意ニ選ムコトヲ得ト雖モ他人ノ登録商標又ハ從來ヨリ他人ノ使用セル商標ト同一又ハ類似ノ商標ニシテ同種ノ商品ニ用フル者、地名、人名、商社名、商品普通ノ名稱又ハ内外國ノ旗章ノ

ミヲ以テ成立スル商標及ヒ同業者普通ニ慣用セル目印ヲ以テスル商標ハ之ヲ許可セス、商標ヲ用ユルコトヲ得ヘキ商品ハ之ヲ六十五種ニ分類シ、商標專用權ノ年限ハ專用ノ許可ヲ受ケ登録シタル日ヨリ十五  
年間トセリ

明治二十一年十二月發布ノ商標條例ニ於ケル改正ノ要點ヲ舉クレハ、  
商標ノ實體ハ特別著明ナル圖形、字體又ハ其ノ結合ヲ以テ要部トスル  
モノニ限り、尙ホ從來ノ制限ノ外風俗ヲ害スルモノモ登録ヲ受クルコ  
トヲ得ストシ、商標專用權ノ期間ハ登録ノ日ヨリ二十個年トシ、商標專  
用ノ許否ニ關スル手續及ヒ其ノ行政機關ノ組織ニ付テハ同年發布ノ  
特許條例ノ規定ヲ準用スルコト、セリ

明治三十二年三月特許法及ヒ意匠法ノ制定ト同時ニ法律第三十八號  
ヲ以テ商標法ヲ制定シタリ、本法ニ於ケル改正ノ要點ハ商標トシテ專  
用シ得ヘキモノ、實體ヲ詳密ニ定メ且ツ商標專用ノ出願ニ關スル代

理業、專用ノ許否ニ關スル手續及ヒ其ノ機關ノ組織等ニ關シテハ本法  
ト同時ニ公布セラレタル特許法ノ規定ヲ準用シタルニ在リ

### 第九章 監獄

監獄制度沿革

文武天皇大寶元年律例ヲ選定シ囚獄司ヲ置キ刑部省ノ管轄スル所ト爲ス始メテ囚獄ノ法定リテヨリ以來後鳥羽天皇文治二年ニ至ルマテ凡ソ四百八十五年間時々沿革スル所アリシト雖モ大率大寶ノ制ヲ以テ源準ト爲ス後鳥羽天皇文治二年源賴朝ヲシテ征夷大將軍ヲ以テ總追捕使ヲ兼テシム厥後朝廷政刑ノ權ヲ舉テ征夷大將軍ニ委スルニ至リ刑獄ノ方法復タ大寶ノ制ノ如クナル能ハス（且後醍醐天皇建武元年一ニシモ未タ畿ハクナラヌシテ復タ足利氏爾後兵亂相踵キ織田氏足利氏ニ委ス是ヨリ以來封建ノ勢漸ク成ル）爾後兵亂相踵キ織田氏足利氏ニ代リ豐臣氏織田氏ニ代リ延ヒテ德川氏ニ及ヒ後陽成天皇慶長八年德川家康征夷大將軍ト爲リ豐臣氏ニ代リテ政刑ノ權ヲ握リ封建ノ制全ク成リ更ニ各藩主ニ分委シテ之ヲ專行セシメ以テ維新ニ至ル而シテ維新以前ニ於ケル刑罰ハ生命刑（斬、火、磔、門、磔、絞、槍、磔）體刑（鞭、杖、笞、徒、禁錮）ヲ主トシ自由刑

ハ遠島（伊豆ノ七島、薩摩ノ五島、肥前ノ尼子、隱岐、壹岐等領並放逐シ又無籍囚ニシテ再犯ノ憂アル者ハ佐渡者クハ佃島ニ發遣シテ若使ス）逐放（所擄江戸、十里四方擄）ノ二種トス外ニ屬刑トシテ晒、入墨、欠所非人、下手ノ四種ヲ設ケ其ノ他閔刑トシテ士人ニハ逼塞、閉門、禁居、改易、切腹、又僧徒ニハ晒、追院、構、婦女ニハ剃髮、及ヒ奴、庶人ニハ呵責、過料、戸閉、手鎖等トス始メテ獄舎ヲ江戸（東）常盤橋門外ノ水濱ニ設ク其ノ後延寶年間之ヲ小傳馬町ニ移シ且ツ獄舎ヲ五種ニ分テリ揚坐敷（將軍ニ認見取容ス）揚屋（土人及ヒ僧徒ノ）大牢、百姓牢、女牢トス石出帶刀ナル者監守ノ職ヲ世ニシ同心及ヒ獄丁之ニ屬ス外ニ病監二ヶ所アリ一ヲ淺草千束村ニ置キ善次郎ナル者之ヲ守リ一ヲ品川驛ニ置キ松右衛門ナル者又之ヲ守ル（二者共ニ）享保七年更ニ獄舎ヲ本所松坂町及ヒ兩國馬喰町ニ設ケ代官（地方官ナリ）ノ管轄ニ屬スル部民ノ犯罪者ヲ繫留スル處トス其ノ他京都、大坂、長崎、及ヒ奈良等ノ奉行若クハ代官ノ治下及ヒ大小各藩各獄舎ノ設アリ其ノ制畫一ナラサリシト雖モ概テ法ヲ小傳馬

町ノ獄制ニ準シ以テ令ヲ行ヘリ

當時江戸ニハ奉行所三个所アリ、勘定奉行所（旗下其ノ他身分重キ犯即者ヲ審判ス）、寺社奉行所（大僧正以下身分ニ關スル僧侶及ヒ位記ヲ有ス）、町奉行所（通常ノ犯即者ヲ審判ス）、而シテ町奉行所ヲ南（奥郡橋内）、北（敷寄屋橋）ニ置ク、寛政二年即チ徳川十代將軍家治ノ時石川大隅守屋敷裏ノ沼地ニ留置場ヲ設ク稱シテ人足寄場ト云フ、市井ニ徘徊スル無籍無宿ノ徒ヲ收容スル處トス、即チ維新後明治二十八年マテ石川島監獄署（今ノ巢鴨）ノ在リシ地ナリ

當時獄舎ノ監督ハ専ラ町奉行ノ主管ニ屬ス、奉行ハ時々與力同心又ハ目付役徒目付及ヒ小人目付等ヲシテ臨檢セシム、然レトモ其ノ實況酷薄慘憺云フニ忍ヒサルモノアリ、殊ニ幕政ノ末路法令行ハレス紀綱擧ラス弊竇相因リ貪婪至ラサルナク遂ニ世人ヲシテ所謂地獄ノ沙汰モ金次第テフ語ヲ發セシムルニ至レリ、當時自由刑未タ發達セス監獄ハ恰モ未決囚ノ留置場ノ如ク其ノ審問數年ノ久シキニ彌リ一度獄舎ニ

投セラル、トキハ生命ヲ完ウシテ出獄スル者幾稀ナリ、其ノ制度ノ不完全ニシテ且ツ悲惨ナル推知スヘキナリ

蓋シ舊幕時代ニ於ケル帝國刑獄ノ實況ハ今猶ホ之ヲ目撃シタルノ人士亦少ナカラス、其ノ慘況ハ同時代ノ歐洲ニ於ケルモノト酷ク相似タル所アリシカ如シ、其ノ改良ノ度遅々タリシハ種々ノ事情アルニ由ルヘシト雖モ、要スルニ歐米諸國ト異ナリ、我カ一般ノ社會又ハ宗教家等カ屏息默視シテ輿論ノ同情ヲ惹ク能ハサリシモ、亦其ノ一因ナランカ、明治元年王政一新始メテ囚獄ノ制一變シ大ニ其ノ改良ヲ觀ルニ至レリ

明治二年十二月刑部省中ニ囚獄司ヲ設ケ専ラ優恤ヲ旨トシ徳川執政時代ノ陋弊ヲ剷去スル事ヲ努ム、明治三年十二月新律綱領ヲ頒布シ徒刑ノ制（徒刑ヲ五等トス即チ一年、二年、三年、四年）ヲ定メ各地方ニ徒場ヲ設ケテ之ヲ執行シ、徒刑囚ニ役業ヲ課シ傭工錢ヲ給ス、即チ工錢ハ之ヲ二分シ其ノ一

半ハ囚徒常食外ノ食物其ノ他ノ雜費ニ費消スルヲ許シ其ノ一半ハ出獄後生業ニ基クノ資ニ供セシム又教誨師ヲシテ心神教養ノ道ヲ講セシメ專ラ感化遷善ノ法ヲ執ラシムルニ至レリ

明治四年七月刑部省彈正臺ヲ廢止シ更ニ司法省ヲ置キ囚獄ヲ之ニ屬セシメシカ幾干モナクシテ又之ヲ廢止シ捕亡囚獄ノ事ヲ總テ地方廳ノ管轄ニ移セリ

是ヨリ先キ我カ政府ハ獄制ノ改良ニ意ヲ傾注シ特ニ吏員ヲ東洋英領地方ニ派遣シ其ノ實況ヲ視察セシム而シテ使臣復命ノ結果終ニ一ノ監獄制度ヲ設定スルニ至レリ

明治五年十月第三百七十八號布告ヲ以テ監獄則及ヒ圖式ヲ制定頒布セラル其ノ緒言ニ曰ク獄トハ何ソ囚人ヲ禁鎖シテ之ヲ懲戒セシムル所以ナリ曰ク獄ハ人ヲ仁愛スル所以ニシテ人ヲ殘虐スル所以ニ在ラス曰ク刑ヲ用ユルハ已ムヲ得サルニ出ツ國ノ爲ニ害ヲ除ク所以ナ

リ獄司欽テ此ノ意ヲ體シ罪囚ヲ遇スヘシト而シテ其ノ綱領ヲ興造繁獄懲役病疾附死亡處刑官員雜則等ノ七項トス其ノ概要ヲ擧クレハ夜間ハ分房制ヲ採リ且ツ已決未決ノ監房ヲ別チ未決囚ニ就テハ初犯者ト再犯以上ノ者トヲ分類ス又男監ト女監及ヒ懲治場トヲ各嚴割シ其ノ交通ヲ遮斷ス疾病者ノ爲ニハ別ニ病監ヲ置キ痲疾若クハ身體虛弱者ノ爲ニハ特ニ寬役場ヲ設ケテ其ノ役ヲ寬宥ス囚徒ノ服役ニ階級ヲ設ケ一定ノ期間ヲ經ル毎ニ其ノ役業ヲ輕減シテ其ノ工錢ヲ增加ス特別ノ才能ヲ有スル者ハ役業及ヒ工錢其ノ他ノ所遇ヲ厚フス懲治人ニシテ改悛ノ狀アリ若クハ貧窶營生ノ資ナクシテ放免ノ後危險ノ虞アル者ハ滿期ニ至ルモ之ヲ釋放セサル等其ノ綱目ヲ審議スレハ稍是非ノ點ナキニ非スト雖モ其ノ精神ニ至リテハ蓋シ歐米今日ノ獄制ト又何ソ擇フ所アラン即チ殘虐苦痛ヲ剔除シ專ラ仁愛懲戒ノ道ニ依ルヲ旨義トセルカ如キ實ニ一大突進的改良ト謂フモ可ナリ殊ニ役法其ノ



他諸般ノ遇囚方法等階級法ニ依リテ最モ精密且ツ周到ニ規定セラレタリ、但々當時ノ國情未タ其ノ實施ヲ許サ、リシカ、明治五年十一月第三百七十八號布告ヲ以テ各地方共禁囚處遇及ヒ懲役法ヲ施行セラレ構造法ノ一部ハ其ノ施行ヲ止メラレタリ、而シテ明治六年四月第百二十九號布告ヲ以テ更ニ禁囚處遇及ヒ懲役法ノ施行ハ詮議ノ次第有之ニ付當分總テ從前ノ通取計フヘシトテ茲ニ又全部ノ施行ヲ停止セラ、ニ至レリ、明治六年二月第七十一號布告ヲ以テ徒場ヲ懲役場ト改メラル

明治六年五月改定律令ヲ頒布ス始メテ笞杖等ノ施體刑及ヒ徒流刑ヲ廢シ、尙ホ刑名ヲ取捨スル所アリ、即チ死刑ヲ斬絞ノ二種トシ更ニ懲役終身刑ヲ設ケ以下總テ懲役トシ其ノ刑期ヲ十日以上十年以下トス

明治六年十一月司法省各裁判所所屬ノ監倉ヲ除クノ外全國ノ未已決兩監ヲ内務省ノ統轄ニ屬セシム

明治八年一月太政官達第八號ヲ以テ囚人給與規則ヲ定メラレ已未決囚ニ給スヘキ飲食、衣服、臥具、沐浴等ヲ一定ス、穀物ハ量、他ハ價格ニ據リテ定ム、未決囚ノ衣服ハ任意自給トス已決囚ハ凡テ官給トシ定役ニ依リ得タル工錢ヲ以テ之ヲ償却セシムルコト、セリ

明治九年ニ至リ未已決監及ヒ監倉共總テ内務省之ヲ統轄シ〔明治七年三月内務省第一局第一課ニ於テ監獄事務ヲ主管シ、同八年十一月其ノ事務ヲ警保寮ニ移シ、同九年四月警保寮ヲ廢シ警保局ヲ置キ其ノ事務ヲ之ニ〕東京ハ警視廳自餘ハ使府縣廳ノ所管トス

是ヨリ先キ監獄ノ經費ハ總テ官費ヲ以テ之ヲ支辨スルコト、シ大ニ刑獄ノ面目ヲ一變セリ

明治十四年三月太政官達第十三號ヲ以テ囚人給與規則ヲ廢シ、更ニ在監人給與規則ヲ設ケ尋テ同年七月太政官達第六十四號ヲ以テ在監人備錢規則ヲ定ム

政府ハ大ニ監獄改善ノ急務ナルヲ認メ銳意從來ノ陋弊ヲ更新シ刑獄

ノ事是レヨリ將サニ大ニ發達セントスルノ時ニ方リ偶々明治十年西  
南ノ兵亂アリ財政整理ノ必要上監獄費ヲ地方稅支辨ニ移スノ止ムナ  
キニ至リ斯業進歩上一大頓挫ヲ與ヘタリ  
明治十三年十一月第四十八號布告ヲ以テ歲計ヲ節約シ紙幣消却ノ元  
資ヲ増加シ併セテ地方ノ政務ヲ改良スルノ必要ヲ察シ地方稅目中ニ  
府縣監獄費及ヒ監獄建築修繕費ヲ加フルコト、ナリ同十四年三月第  
十七號布告ヲ以テ集治監ニ入ルヘキ囚徒ニシテ國庫ノ負擔ニ屬スル  
モノハ刑期終身ノ者及ヒ國事犯刑期五年以上ノ者トシ其ノ他ハ總テ  
地方稅負擔トシ、同年七月ヨリ施行スルコトヲ命シタリ  
明治十三年七月第三十六號布告ヲ以テ刑法ヲ頒布シ同十四年一月ヨ  
リ之ヲ施行ス是レ即チ現行刑法ニシテ此ノ刑法改正ニ件ヒ同十四年  
九月太政官達第八十一號ヲ以テ監獄則及ヒ在監人給與規則并在監人  
傭工錢規則ヲ併定シ同十五年一月ヨリ施行ス、監獄則ハ分テ四編十五

章百十有三條トシ、其ノ大綱ハ汎則監署ノ規程、監獄ノ構造、役法附時限  
工錢、徒流禁獄囚ノ押送、假出獄免幽閉者ノ貸與屋舍、給與、疾病附死亡、書  
信、接見等トス、其ノ細要ヲ舉クレハ監獄ハ六種ニ分チ留置場、監倉、懲治  
場、拘留場、懲役場、集治監トシ、留置場及ヒ監倉ハ未決囚ヲ拘禁シ懲治場  
ハ刑法ニ依ル不論罪者及ヒ尊屬親ノ情願ニ由ル放恣不良ノ子弟ヲ收  
容懲治シ拘留場ハ拘留ノ刑ニ處セラレタル者、懲役場ハ禁錮及ヒ懲役  
ノ刑ニ處セラレタル者又ハ婦女ノ徒刑囚ヲ禁治スル處トシ、每府縣ニ  
之ヲ設置ス、集治監ハ北海道ニ在ルモノハ徒刑、流刑、舊懲役、終身ノ刑ニ  
處セラレタル者ヲ收禁シ、内地ニ在ル者ハ北海道へ發遣スル者ヲ一時  
假留スル處トシ便宜ノ地ニ之ヲ設ク其ノ管理ハ集治監ハ内務卿之ヲ  
直轄シ、東京ハ警視總監、其ノ他ハ地方長官ノ管轄トス、而シテ以上各種  
ノ監獄ヲ一區域内ニ設クルトキハ牆壁ヲ以テ區隔シ、尙ホ未決監、已決  
監、懲治場、男監、女監等ノ區劃ハ一層之ヲ嚴密ニセリ

入監ノ婦女ニシテ乳兒ヲ携帶セント請フトキハ三歳未満ノ者ハ之ヲ許シ、八歳以上二十歳以下ノ幼者ニシテ尊屬親ノ教令ニ従ハサル者ハ其ノ請ニ由リ六个月以上二個年以内ノ期間懲治場ニ入ル、コトヲ許ス、已決囚ハ各刑名ニ従ヒテ其ノ監房ヲ別ニシ、尙ホ年齢十六歳以下ノ者ト十六歳以上二十歳未満ノ者ト二十歳歳上ノ者トヲ分チ就中其ノ初犯ノ者ト再犯以上ノ者ト各其ノ監房ヲ異ニス、懲治人モ亦分類法ニ依ル、在監人中獄則ヲ謹守スル者ヲ選ミテ傳告者、誘工者トシ、傳告者ハ司獄官ノ命令ヲ他囚ニ傳ヘシメ、誘工者ハ他囚ニ工業ヲ勸誘スルモノトス、定役ハ各囚徒ノ刑名、年齢、又ハ身體ノ強弱ニ應シテ之ヲ課シ、外役ニ服セシムル時ハ鐵鎖ヲ用ヒテ二囚毎ニ鏈結シ笠ヲ以テ其面ヲ掩ヘシム、定役ナキ者ハ典獄之ヲ勸誘シテ攝生又ハ父母妻子等ヲ補助スル爲メ工業ニ服セント請フト至ラシム、懲治人ハ農業又ハ工業ヲ教ヘ力作セシム、在監人ノ服役スル工錢ハ其ノ地普通ノ傭工錢ニ比準シ各自

ノ技能ニ應シテ其ノ工錢ヲ十分シテ其ノ一ヲ與ス、定役ナキ者ニシテ服役スル者ニハ其ノ十分ノ七ヲ與フ、定役ニ服スル囚徒ニシテ當日ノ科程ヲ終リ尙ホ作業ヲ爲シタル者モ亦同シ、懲治人ノ工錢ハ衣食費ヲ控除シ餘ハ總テ之ヲ給ス、但シ尊屬親ニ於テ衣食費ヲ辨納スル者ノ工錢ハ全部ヲ給ス、在監人ニ與フヘキ工錢ハ毎月ノ首ニ於テ其ノ前月分ノ總高ヲ告知ス、其ノ給與シタル工錢ハ總テ監獄署ヘ領置シ其ノ親屬ニ贈與シ又ハ書籍其ノ他食物等ヲ購ヘント(食物ハ食費ヲ償フ者ニ限ル)請フトキハ典獄ニ於テ之ヲ許シ其ノ餘ハ總テ出監ノ時之ヲ下付ス、在監人書籍ヲ看ント請フトキハ新聞紙及ヒ時事ノ論說ヲ除クノ外之ヲ許ス、但シ囚人ハ修身營業ニ關スルモノニ限ル、信書ハ已決囚ハ六ヶ月ニ一回、懲治人及ヒ幼年囚ハ一个月ニ一回之ヲ許ス、未決囚ノ信書ハ制限ナシ、信書ハ總テ典獄ニ於テ檢閲シタル後ニ非サレハ之ヲ發シ又ハ看讀セシムルヲ許サス、在監人ニ接見セント請フ者アルトキハ之ヲ

許ス、已決囚ニ對スル差入ハ書籍用紙ノ外一切許スコトナシ、在監人若シ司獄官吏ノ處置ニ對シ苦情ヲ訴ヘントスルトキハ監獄ヲ監督スル官吏又ハ之ヲ管理スル長官ノ巡視ニ際シ書面又ハ口頭ヲ以テ申述スルコトヲ得セシム

監獄ニ教誨師ヲ置キテ已決囚及ヒ懲治人ニ對シ免役日又ハ日曜日ニ於テ教誨ヲ施サシム、懲治人ニハ毎日三四時間普通學其ノ他必要ノ學科ヲ授ク、已決囚ニシテ獄則ヲ謹守シ且ツ改悛ノ狀著シキ者ハ之ヲ賞シ獄衣ニ一定ノ賞表ヲ附著セシメ且ツ通信及ヒ面會ノ度數ヲ増シ以テ之カ反正ヲ獎勵ス、在監人ノ逃走ヲ官吏ニ告ケ又ハ之ヲ捕獲シ若クハ人命ヲ救助シ或ハ水火等ノ災害ヲ防禦スル者ニハ其ノ功勞ニ應ジ賞金ヲ與フ、懲治人ニシテ之ト同一ノ行爲アル者ニハ金錢ニ換フルニ適宜物品ヲ給與ス、已決囚違令犯行スルトキハ其ノ輕重ニ從ヒ信書面接ノ禁ヲ科シ又ハ隔離シタル監房ニ分禁シテ坐業ヲ執ラシメ或ハ一

周間以内減食シ若クハ監禁ス、懲治人及ヒ十六才未滿ノ已決囚ノ懲罰ハ獨居減食ノ二種トス、未決囚及ヒ拘留ノ刑ヲ受ケシ者ニ對スル懲罰ハ減食トス、減食及ヒ監禁ノ罰ヲ執行スルトキハ醫師ニ於テ身體ニ障害ナキヲ診定シタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス、無期徒刑ノ囚徒逃走暴行其ノ他重輕罪ヲ犯シタルトキハ一定ノ期間其ノ一脚又ハ兩脚ニ重量ノ鐵索ヲ施ス、賞衣ヲ有スルモノヲ懲罰スルトキハ情狀ニ因リ其ノ一個又ハ數個ヲ褫奪ス

刑法ノ規定ニ依リ刑ノ期限内一定ノ條件(重輕罪ヲ犯シ又ハ刑法附則ニ規定スル處ノ特別監視規則ニ背クトキハ假出獄ヲ停止ス)又ハ無條件(免幽閉)ニテ出獄ヲ許ス、免幽閉ヲ受ケタル者又ハ徒刑囚ノ假出獄ニナリタル者ハ出獄シタル地ニ住居セシメ典獄ハ將來生營ノ方法ヲ指示監督ス、此等ノ者其ノ家族ヲ招キ又ハ嫁娶ヲ爲サント請フトキハ之ヲ許ス、又他人ヨリ物品ノ寄贈ヲ受ケタルトキハ其ノ旨ヲ典獄ニ申告